# 森園遺跡 Ⅱ

大野城市文化財調査報告書
－第 55 集－

1999

大野城市教育委員会

# 序

本市川久保に所在する九州電力の変電所構内では以前から遺跡の存在が知られ、本市教育委員会の調査によって弥生時代から奈良時代の遺跡であることが明らかとなりました。この時の調査結果は、既に発掘調査報告書「森園遺跡Ⅰ」の中で報告しているとおりであります。

変電所構内だけでなく、森園遺跡は周辺のかなり広い範囲にわたっていることがわかりましたので、会社の事務所の建設等に先立ってさらに発掘調査を行いました。その結果、弥生時代の甕棺墓をはじめとする多くの墓地を確認しました。近くでは学史上も有名な中・寺尾遺跡や、御陵前ノ椽(えん)遺跡等の弥生時代の墓地が発見されており、あわせて貴重な資料となったものと考えております。

森園遺跡には今回報告しました弥生時代の墓地以外にも、住居跡やたくさんの祭祀の土器等重要な資料があります。これらについては現在整理作業を進めており、次回以降に報告いたしたいと思います。

最後になりましたが、発掘調査に際しご協力を頂いた土地所有者をはじめとする地元の方々、整理作業において種々のご指導を賜りました関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成11年３月31日

大野城市教育委員会
教育長 堀内貞夫

# 例　言

1．本書は大野城市教育委員会が土地の売買、倉庫建設等に伴って実施した、大野城市川久保３丁目所在の森園遺跡発掘調査の第２次報告である。

2．遺構の分類記号はSP－木棺墓・土坑墓、SC－石棺墓、SJ－甕棺墓である。

3．遺物写真はフォトハウスおか（岡紀久雄、埋蔵文化財技術研究会会員）に委託して撮影したものである。

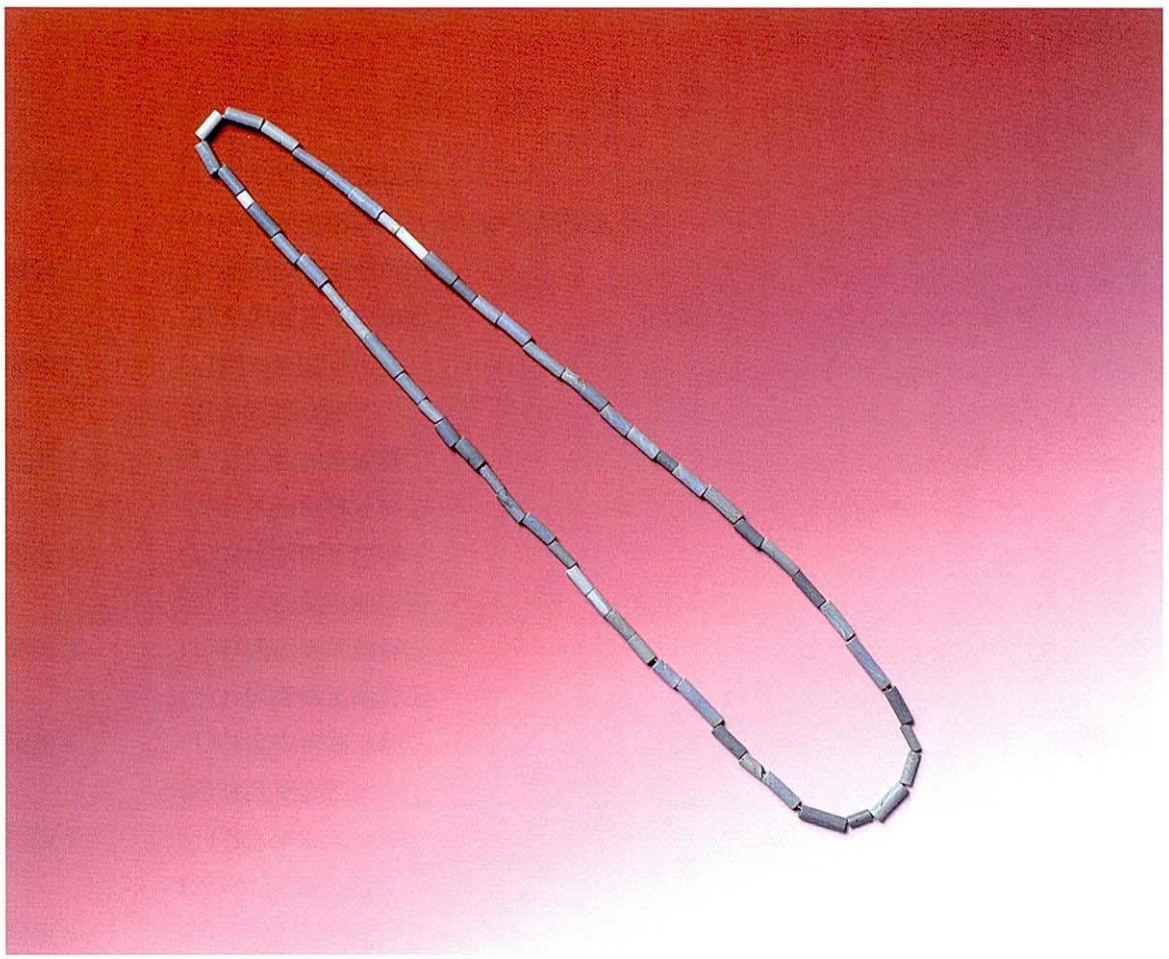
4．遺物番号は図38（SJ33出土の管玉）以外は通し番号とし、図版と挿図での番号を統一した。

5．図１は建設省国土地理院発行の地形図『福岡南部』を基に作成したものである。

6．本書の執筆と編集は向直也が担当した。



（1） 弥生時代の墳墓群（B区の南西隅）



（2） 小児甕棺墓SJ33出土の碧玉製管玉

# 本　文　目　次

Ⅰ　はじめに　　頁
　1　発掘調査と整理作業をめぐる経緯…… 1
　2　発掘調査と整理作業の体制…… 2
Ⅱ　森園遺跡の位置と環境…… 3
Ⅲ　発掘調査の結果
　1　調査の概要…… 6
　2　検出遺構
　　(1)　木棺墓…… 7
　　(2)　土坑墓…… 9
　　(3)　石棺墓……13
　　(4)　甕棺墓……14
　3　出土遺物
　　(1)　甕棺……32
　　(2)　管玉……55
Ⅳ　まとめ
　1　遺構の時期……57
　2　大野城市域の大型甕棺墓の変遷について……60

# 図　版　目　次

巻頭図版 1　(1)弥生時代の墳墓群
　　(2)小児甕棺墓SJ33出土の碧玉製管玉
図版 1　(1)発掘調査前の状況①
　　(2)発掘調査前の状況②
図版 2　(1)調査地遠景
　　(2)A区墓地群
図版 3　(1)B区西側墓地群①
　　(2)B区西側墓地群②
図版 4　(1)B区西側墓地群③
　　(2)B区西側墓地群④
図版 5　(1)B区西側墓地群⑤
　　(2)B区東側墓地群①
図版 6　(1)B区東側墓地群②
　　(2)B区東側墓地群③
図版 7　(1)B区東側墓地群④
　　(2)木棺墓SP01①
図版 8　(1)木棺墓SP01②
　　(2)木棺墓SP01③

図版９　(1)木棺墓SP01④
(2)木棺墓SP02
図版10　(1)土坑墓SP03・SP04
(2)土坑墓SP05
図版11　(1)土坑墓SP06
(2)土坑墓SP07
図版12　(1)土坑墓SP08
(2)土坑墓SP10
図版13　(1)木棺墓SP11
(2)石棺墓SC01
図版14　(1)石棺墓SC02①
(2)石棺墓SC02②
図版15　(1)石棺墓SC03①
(2)石棺墓SC03②
図版16　(1)石棺墓SC03③
(2)甕棺墓SJ01・SJ25
図版17　(1)甕棺墓SJ02
(2)甕棺墓SJ03
図版18　(1)甕棺墓SJ04・SJ18
(2)甕棺墓SJ06
図版19　(1)甕棺墓SJ07
(2)甕棺墓SJ08
図版20　(1)石棺墓SC01、甕棺墓SJ04・SJ05・SJ06・SJ07・SJ08・SJ18
(2)甕棺墓SJ09
図版21　(1)甕棺墓SJ10
(2)甕棺墓SJ11・SJ12・SJ13
図版22　(1)甕棺墓SJ14
(2)甕棺墓SJ15
図版23　(1)甕棺墓SJ16
(2)甕棺墓SJ17
図版24　(1)甕棺墓SJ18
(2)甕棺墓SJ19
図版25　(1)甕棺墓SJ20
(2)甕棺墓SJ21
図版26　(1)甕棺墓SJ22
(2)甕棺墓SJ23
図版27　(1)甕棺墓SJ24
(2)甕棺墓SJ26
図版28　(1)甕棺墓SJ27
(2)甕棺墓SJ28・SJ29

図版29　(1)甕棺墓SJ30
(2)甕棺墓SJ31
図版30　(1)甕棺墓SJ32
(2)甕棺墓SJ33
図版31　(1)甕棺墓SJ34
(2)甕棺墓SJ35
図版32　(1)甕棺墓SJ37・SJ38
(2)甕棺墓SJ39
図版33　(1)甕棺墓SJ40
(2)甕棺墓SJ41
図版34　(1)甕棺墓SJ42・SJ43
(2)甕棺墓SJ45
図版35　出土遺物①（甕棺）
図版36　出土遺物②（甕棺）
図版37　出土遺物③（甕棺）
図版38　出土遺物④（甕棺）
図版39　出土遺物⑤（甕棺）
図版40　出土遺物⑥（甕棺）
図版41　出土遺物⑦（甕棺）
図版42　出土遺物⑧（甕棺）
図版43　出土遺物⑨（甕棺）
図版44　出土遺物⑩（甕棺）
図版45　出土遺物⑪（甕棺）
図版46　出土遺物⑫（甕棺）
図版47　出土遺物⑬（甕棺・管玉）

# 挿　図　目　次

図1　森園遺跡と周辺の主な遺跡…… 4
図2　森園遺跡Ⅱ地点の調査箇所…… 5
図3　木棺墓SP01実測図…… 8
図4　木棺墓SP02、土坑墓SP03実測図…… 9
図5　土坑墓SP04・SP05実測図……10
図6　土坑墓SP06・SP07実測図……11
図7　土坑墓SP08・SP09・SP10実測図……12
図8　木棺墓SP11、石棺墓SC01実測図……13
図9　石棺墓SC02実測図……14
図10　石棺墓SC03実測図……15
図11　甕棺墓SJ01・SJ02・SJ03実測図……16
図12　甕棺墓SJ04・SJ05・SJ06・SJ07・SJ08実測図……17

図13　甕棺墓SJ09・SJ11・SJ12・SJ13・SJ14・SJ15・SJ16実測図……20
図14　甕棺墓SJ17・SJ18実測図……21
図15　甕棺墓SJ19・SJ20実測図……22
図16　甕棺墓SJ21・SJ22・SJ23実測図……23
図17　甕棺墓SJ24・SJ25・SJ26実測図……24
図18　甕棺墓SJ27・SJ28・SJ29・SJ30・SJ31・SJ32・SJ33・SJ34実測図……25
図19　甕棺墓SJ35・SJ36・SJ37・SJ41実測図……28
図20　甕棺墓SJ38・SJ39実測図……29
図21　甕棺墓SJ40・SJ42・SJ43・SJ44実測図……30
図22　SJ01（下甕）、SJ04実測図……40
図23　SJ02（上甕・下甕）実測図……41
図24　SJ03（上甕・下甕）、SJ05（上甕・下甕）実測図……42
図25　SJ06、SJ08、SJ09（上甕・下甕）、SJ10、SJ11実測図……43
図26　SJ07（上甕・下甕）実測図……44
図27　SJ12（上甕・下甕）、SJ13、SJ14実測図……45
図28　SJ15（下甕）、SJ16、SJ17（上甕・下甕）実測図……46
図29　SJ18（上甕・下甕）実測図……47
図30　SJ19、SJ21（上甕・下甕）、SJ22（上甕・下甕）実測図……48
図31　SJ20（上甕・下甕）、SJ24（上甕・下甕）実測図……49
図32　SJ23、SJ25（上甕・下甕）、SJ26（上甕・下甕）実測図……50
図33　SJ27（上甕・下甕）、SJ29（上甕・下甕）、SJ30（上甕・下甕）、SJ31、
　　SJ32（上甕・下甕）、SJ33（上甕・下甕）、SJ34（上甕・下甕）実測図……51
図34　SJ35（上甕・下甕）、SJ37（上甕・下甕）、SJ38（上甕・下甕）実測図……52
図35　SJ39（上甕・下甕）、SJ41（上甕・下甕）実測図……53
図36　SJ40、SJ42（上甕・下甕）、SJ43（下甕）実測図……54
図37　SJ44（上甕・下甕）実測図……55
図38　甕棺墓SJ33出土碧玉製管玉実測図……55
図39　検出遺構概略図……58
図40　大野城市域の甕棺……59

付図　森園遺跡Ⅱ地点の検出遺構図

# 表　目　次

表1　森園遺跡甕棺一覧表……33
表2　甕棺墓SJ33出土碧玉製管玉計測表……55

# Ⅰ　はじめに

## 1　発掘調査と整理作業をめぐる経緯

森園遺跡は、『森園遺跡Ⅰ』（大野城市文化財調査報告書第26集、大野城市教育委員会、1988年）の中で報告しているように、以前からその存在を知られていた遺跡であった。遺跡の立地する丘陵に、1950年代に九州電力の変電所（正式名称は福岡南制御所だが、煩雑なため変電所とする）が建設された際、数多くの土器が出土したことがきっかけである。しかし、発掘調査がなされたわけでもなく、具体的なことについては不明であった。遺跡の性格がわかったのは前掲の報告の内容のとおり、変電所における電圧昇圧工事や、変電所の諸施設の新設に先立つ発掘調査であった。その結果、弥生時代の竪穴住居、古墳時代の竪穴住居、平安時代の墓地などの遺構群が確認された。

この調査の後、変電所の西側にある台地上の畑地でも、倉庫や会社事務所の建築があることになり、数回かつ数年度にわたって発掘調査を行った。これによって結果的に森園遺跡の西側の範囲は、すでに変電所施設によって破壊されていた部分を除けば、かなりの範囲が調査を行ったことになり、この遺跡の性格については一定の成果を得られたことになった。本報告書は、これらの数回に分けて行われた調査の成果をまとめたものである。なお、変電所の構内の調査地を「Ⅰ地点」と呼び、今回本書でその一部を扱った下記の箇所を「Ⅱ地点」と仮称しておく。

各調査の場所と調査年月日は、次のとおりになる。調査地はそれぞれが隣接する関係にあるため、個別の現場で検出された遺構も、最終的にはそのつながりをつかむことができた。

①大野城市川久保３丁目１－13……1986年６月５日～同年８月25日
②　〃　１－15・１－19……1986年11月27日～同年12月27日
③　〃　１－18……1987年５月26日～同年７月９日
④　〃　１－３……1988年９月12日～同年12月27日
⑤　〃　１－５……1990年４月９日～同年５月９日
⑥　〃　１－４……1990年５月14日～同年５月24日
⑦　〃　１－１・１－２……1990年10月８日～同年11月14日

出土遺物の整理作業は、他の遺跡の調査現場を優先させたため調査完了後すぐにはできず、後送りにせざるをえなくなった。整理作業の大部分は98年度に行ったものである。本書はⅡ地点で検出した遺構群のうち、弥生時代の墳墓群だけを抜き出したものである。弥生時代の墳墓に伴う祭祀遺構を始め、その他の遺構についての報告は次年度以降に譲ることとなる。調査終了後速やかに報告ができなかったこと、また同一地点でありながら同時に報告ができなかったこと、この二重の不明についてご容赦願いたい。

調査に際して土地所有者をはじめとする地元の方々には、多大なる協力を頂いた。また真夏の炎天下、あるいは冬の寒風の下、現場での作業に従事して頂いた方にもあわせて感謝申し上げる。

## 2　発掘調査と整理作業の体制

発掘調査は86年度から90年度まで大野城市教育委員会が行ったもので、のべ５年にわたっている。そのうち本書で扱った弥生時代の墳墓群の調査は86年度と87年度に行ったものである。本書で扱った遺物の整理作業は、前述したように主に98年度に行った。この３年度に関する体制を以下に記す。

発掘調査

86年度

| | | |
|---|---|---|
| 教育長 | | 久野 英彦 |
| 教育部長 | | 村上 信幸 |
| 社会教育課 | 課長 | 船越 美直 |
| | 係長 | 安恒 巧高 |
| 社会教育担当 | 主査 | 高橋 裕司(庶務担当) |
| | 技師 | 舟山 良一 |
| | 技師 | 向　直也(調査担当) |
| | 調査補助員 | 舟橋 加恵(山口大学学生) |

87年度

| | | |
|---|---|---|
| 教育長 | | 久野 英彦 |
| 教育部長 | | 池田 嘉門 |
| 社会教育課 | 課長 | 船越 美直 |
| | 課長補佐 | 青木 克正(係長兼務) |
| 社会教育担当 | 主査 | 高橋 裕司(庶務担当) |
| | 技師 | 舟山 良一 |
| | 技師 | 向　直也(調査担当) |
| | 嘱託 | 徳本 洋一 |
| | 嘱託 | 岸野 和子 |
| | 調査補助員 | 下村 精一 |

調査作業員（50音順）

上野 恵子、上村 絹代、岡本 妙子、岡本 正枝、鹿児嶋 トシ子、梶原 三治、梶原 チヨノ、岸原 藤雄、高木 冴子、高野 晧代、堤 真佐子、中垣 親、原田 治子、播磨 博子、林田 弘、藤島 藤子、船越 ヱミ子、村上 愛子、村上 シゲ子、宮川 登志子、山口 慶子、山崎 三枝子、山部 イキエ、吉原 京子、吉原 満義、渡辺 治美

整理作業（98年度）

| | | |
|---|---|---|
| 教育長 | | 堀内 貞夫 |
| 教育部長 | | 高橋 正治 |
| 社会教育課 | 課長 | 片岡 猛 |
| 文化財担当 | 係長 | 舟山 良一 |
| | 技師 | 向　直也 |
| | 嘱託 | 明永 美和（整理担当） |
| | 整理補助員 | 境　聡子 |

整理作業員（50音順）

有田 朱美、鬼塚 穂子、白井 典子、町井 裕子、松岡 信子、村山 律子、渡辺 直美

# Ⅱ　森園遺跡の位置と環境

森園遺跡Ⅱ地点は、大野城市川久保３丁目１－１・１－２・１－３・１－４・１－５・１－13・１－15・１－18・１－19に当たる。調査面積は合計約3,200㎡である。

遺跡は御笠川の東岸、乙金山から西側に派生する低丘陵上にある。福岡市の金隈遺跡の東南約２㎞、大野城市の中・寺尾遺跡の北側百数十ｍの場所である。Ⅱ地点は変電所構内のⅠ地点とは現在道路によって寸断されてはいるが、同一の丘陵上にあり、遺跡も連続したものである。

調査地を含めた周辺は、かつて区画整理が行われていて、また大規模な削平や盛土がなされている部分もあり、旧来の地形を留めている所はほとんどない。同時に、今それを図上でさえ復元するのは難しくなっている。しかし、古い地図を見ると周囲には舌状に張り出した丘陵がいくつかあるのがわかる。周辺には、この丘陵上に弥生時代以降の遺跡が数多く知られている。このことについては『森園遺跡Ⅰ』で述べているので、ここでの重複した記述はやめておきたいが、近年行った弥生時代を中心にした発掘調査での知見を加えることで代としたい。

森園遺跡から北西に約600ｍ離れた丘陵の先端頂部に位置する御陵前ノ椽(えん)遺跡では、弥生時代前期初頭の甕棺墓群が確認された。この中には、板付Ⅰ式の小壺を副葬したものが見られた。森園遺跡とは谷を挟んだ丘陵上にあった中・寺尾遺跡では、弥生時代前期後半の墳墓群が見られたが、これに先立つ時期の墳墓遺跡である。

この御陵前ノ椽遺跡から西側に100ｍ下った所にある塚口遺跡では、御陵前ノ椽遺跡より時期の新しい弥生時代前期の木棺墓群と、平安時代の土坑墓群が確認されている。しかし残念ながら、遺跡の一部を調査しただけなので全容はよくわかっていない。

ヒケシマ遺跡は、これまで中・寺尾遺跡とは、別個の遺跡ととらえられてきた。だが再調査の結果、隣接する中・寺尾遺跡が広がる丘陵の先端は道路によって切断され、また削平されて平地になっていることが確かめられた。この部分で確認されたものがヒケシマ遺跡である。したがって、ヒケシマ遺跡も中・寺尾遺跡も、同一の丘陵を占地した同一一連の遺跡と理解することが適当と考えている。

墳墓遺跡以外の集落遺跡は、近年の宅地開発により、御笠川両岸の沖積地で頻繁に確認されるようになった。

森園遺跡の西南１㎞の場所の村下遺跡では、弥生時代中期から後期の集落と、奈良時代の集落が確認された。あいにく遺跡が住宅地の下にあるため、その範囲については十分につかめていない。

村下遺跡の南側には石勺遺跡がある。この遺跡は、縄文時代早期から奈良時代にまでわたる大規模な複合遺跡である。最も量的に多いのは弥生時代中期の遺構群であるが、とりわけこれまで予想もされていなかった縄文時代早期の遺構や、弥生時代の墳墓も検出されたのは驚きであった。また、この遺跡の西端は御笠川の氾濫によって破壊されていることが、御笠川の改修工事によって確認された。この破壊された部分に近い御笠川の河川敷から、広形銅矛の鋳型が工事中に偶然出土している。97年度の調査では、奈良時代の蔵骨器が単独で発見されている。

御笠川の東岸に当たるが、森園遺跡の南側では榎町遺跡が新たに発見された。調査面積は小範囲

だが、弥生時代後期の集落の存在が確認されている。すぐ近くの同時期の原門遺跡や銀山遺跡の墳墓との関連がどうであったのか問題であるが、すでに消滅してしまって実態がわかっていない遺跡のため、具体的なことを考えるに当たってはいかんともし難い。

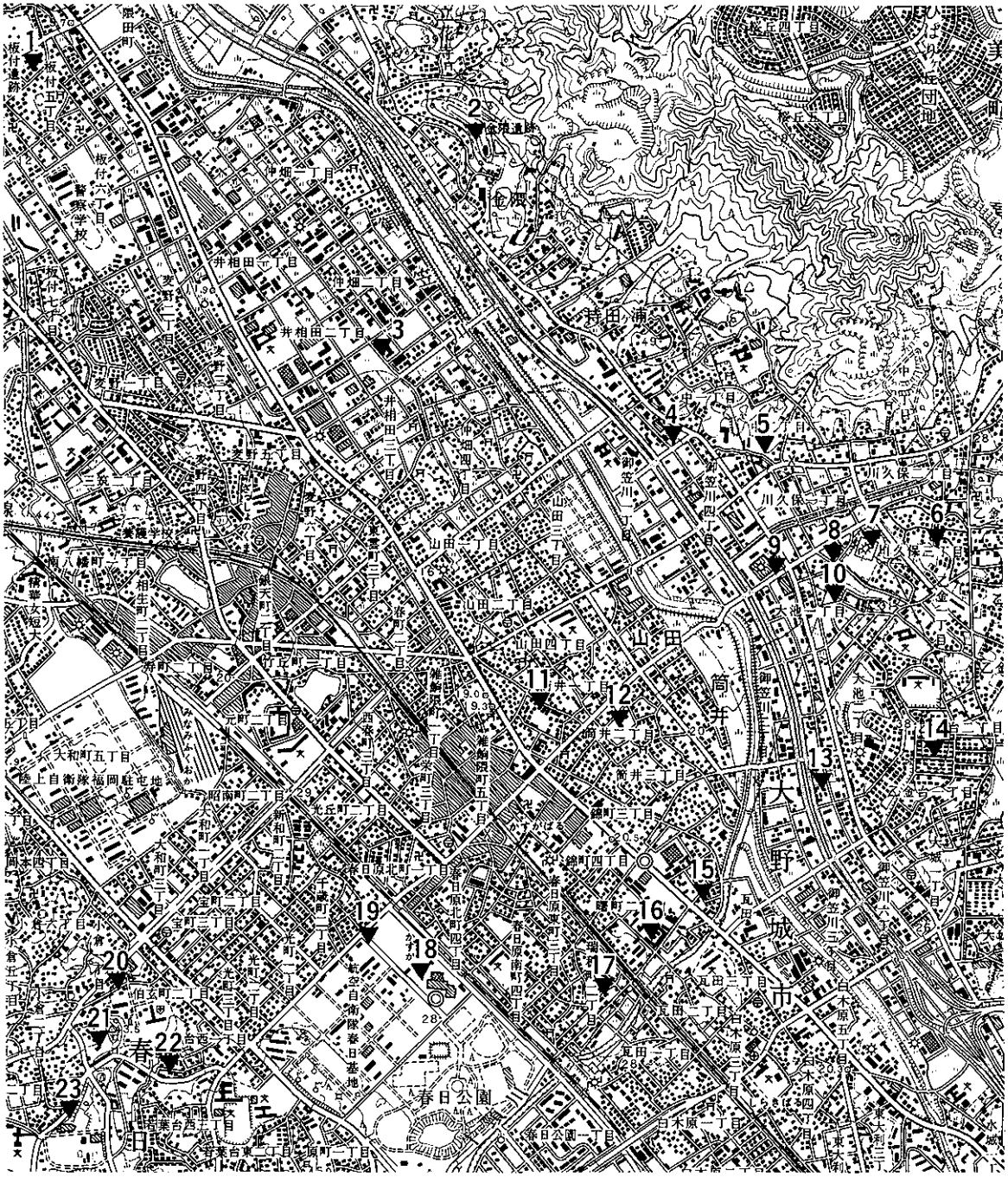



図1　森園遺跡と周辺の主な遺跡（1/25,000）

〈凡例〉

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 板付遺跡 | 2 | 金隈遺跡 | 3 | 仲島遺跡（貨布出土地） | 4 | 塚口遺跡 |
| 5 | 御陵前ノ椽遺跡 | 6 | 松葉園遺跡 | 7 | 森園遺跡（Ⅰ地点） | 8 | 森園遺跡（Ⅱ地点） |
| 9 | ヒケシマ遺跡 | 10 | 中・寺尾遺跡 | 11 | 市原遺跡 | 12 | 村下遺跡 |
| 13 | 榎町遺跡 | 14 | 銀山遺跡 | 15 | 石勺遺跡（弥生時代集落域の中心） | | |
| 16 | 石勺遺跡（弥生時代墳墓域の中心） | | | 17 | 瑞穂町遺跡 | 18 | 駿河遺跡 |
| 19 | 原町遺跡 | 20 | 伯玄社遺跡 | 21 | ナライ遺跡 | 22 | 西平塚遺跡 |
| 23 | 高辻遺跡 | | | | | | |

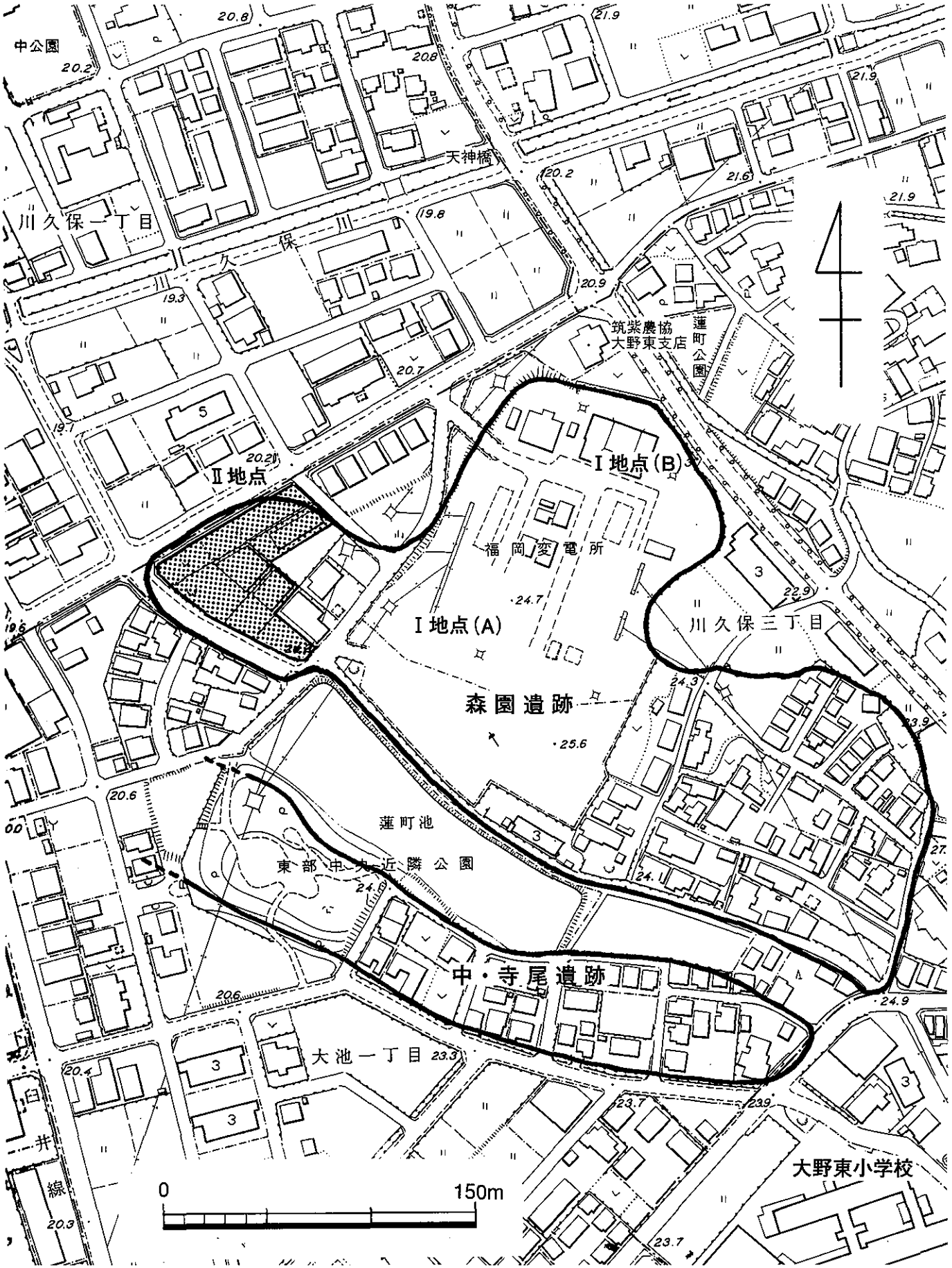



図２　森園遺跡Ⅱ地点の調査箇所（網かけ部分）

Ⅰ地点の中のA・B地点については『森園遺跡Ⅰ』を参照されたい。森園遺跡のすぐ南には細長い谷をはさんで、中・寺尾遺跡が存在する。

# Ⅲ 発掘調査の結果

## 1 調査の概要

Ⅱ地点は調査が７回にわたって行われ、６ヶ所の小区画に分かれた形で調査区が設定されている。便宜的に、時計回りにＡ区からＦ区までの６区画の名称を与えておく（付図参照）。

調査時には、地表は平坦な畑の区画ごとに段を持って標高を減らしていたが（要するに段々畑である）、畑にされる前は以下のことから全体が小高い丘陵地であったことが判明した。

遺構の分布を見ておくと、Ｂ区の中央から東寄りとＣ区の南側、それとＦ区の東側と南側で遺構の密度が低くなっている。遺構面に土器片が貫入していたり、検出した遺構の残り具合の悪さなどから判断すると、遺構の密度に偏りがあることや、無遺構の部分があることは後世の削平によって生じたものであることが明らかとなった。遺構の低密度部分や無遺構の部分は、丘陵の高い部分であったのであろうと思われる。遺構面は平坦に近いが、こうなった理由は後世の激しい削平によるもので、丘陵の低い部分がひどい削平を免れ、そこは遺構が残ったものであろう。無遺構の部分、または遺構の残りが極端に悪い部分（Ｂ区の中央部、Ｃ区の南側、Ｆ区の南側）も、本来は他と同様な密度で遺構があったことが窺われる。

Ｄ区の北隅とＥ区の北端は、１条の溝を介して比高差45cm～50cmの落ち込みとなっており、Ｆ区の北東隅では溝はないものの、最高２ｍの比高差を持つ緩やかな落ち込みとなっている。したがって、これらの部分が丘陵の裾に当たり、同時に遺構も確認されないことから、遺跡の境界を示していると考えられる。なお、Ｆ区の西側と東南部分は表土を剥いでいないが、この部分は事前の試掘により、削平がひどく遺構が見られないことがわかっていたからである（削平されるまでは、もちろん遺構はあったのであろうが）。また、Ａ区の北東側の表土を剥がなかったのは、ここでは建築工事が行われず、伴って遺跡が破壊されることがないと判断したためである。

Ａ区の全域と、Ｂ区の西端から南端にかけての部分を除くと、遺構は畑の耕作土である表土を数十cm掘り下げただけで現れる。このため遺構面には、耕作時についた細長い溝状の撹乱の落ち込みが随所に見られた。

検出した遺構を列記すると、次のようになる（図３）。

①竪穴住居５基 ②甕棺墓45基 ③石棺墓３基 ④木棺墓あるいは土坑墓13基 ⑤祭祀遺構３基
⑥井戸２基 ⑦溝 ⑧土坑・ピット

時代ごとに大まかに区分すれば、竪穴住居は弥生時代と古墳時代、墳墓群は２基を除いて弥生時代、祭祀遺構は弥生時代、井戸は平安時代のものである。祭祀遺構は弥生時代の墳墓群に伴うもので、大量の祭祀土器が出土している。本書は先にも述べたように上記の遺構のうち、弥生時代の墳墓群だけを取り出した調査報告である。これ以外は後日改めて報告するが、祭祀遺構（土器）とその対象である墳墓群を同じ報告書にまとめていないため、非常に扱いにくい報告書（資料）になったことを調査の担当者として重ねてお詫びする。

## 2 検出遺構

### (1) 木棺墓

明らかに木棺墓と確認したものは3基に過ぎないが、土坑墓の中には本来は木棺墓のものも含まれているかもしれない。木棺墓でも、棺となる板を固定するための掘り込み方が完全ではなく、その掘り込みを確認しにくいものや、確認できないものもある。また、本来なら木棺墓の形跡を残すべきものでも、削平されてそれが認められなくなってしまったものもあるからである。

記述方法は箇条書きに近いものとしたので、まず各項目について説明しておく。遺構名は略記号のSPを用いて番号をつけた。

なお、木棺墓には副葬品を含めて出土遺物はなかった。

(a)位置…小区画の位置である。

(b)掘り方型式…素掘りのものか、2段掘りであるかの区別である。

(c)主軸方位

(d)墓坑上段規模…墓坑上段とは、掘り方の型式が2段になっている木棺墓の1段目の掘り方のことをさす。素掘りのものは、棺本体に相当する部分をさす。長さ×幅×深さで表す。

(e)墓坑下段規模…墓坑下段とは、掘り方の型式が2段になっている木棺墓の棺本体に相当する部分をさす。したがって、素掘りのものには墓坑下段という表現は使っていない。長さ×幅×深さで表す。

(f)観察・付記事項

①SP01（図版7－(2)・図版8・図版9－(1)、図3）

(a) B区

(b) 2段掘り

(c) N45°W

(d)280cm×220cm

(e)130cm×55cm×40cm

(f)甕棺墓SJ20と並列しているが、前後関係をつかむことができなかった。ただし、木棺墓と甕棺墓という一般的な関係からみれば、甕棺墓のほうが新しい可能性は高い。木棺が埋められていた部分は幅9cm～12cm、深さ30cmを測るが、この溝は隅が丸く、小口、側壁部分ともに直線を成さない。したがって、木棺は小口板、側板ともに1枚の板を使ったのではなく、小さめの板を何枚かに分けて立てていたと考えられる。その上には、木棺を覆うための粘土塊が高さ35cm、厚さ15cmにわたって見られた。この粘土の覆いは量的にも多いが、蓋の直上部分には見られない。古墳で見られる粘土槨のようなものとは違うが、弥生時代の木棺墓としては構造的に特殊なものである。粘土の外側の大部分、つまり墓坑の掘り方の1段めは、黄色粘土混じりの褐色土を裏込めしている。

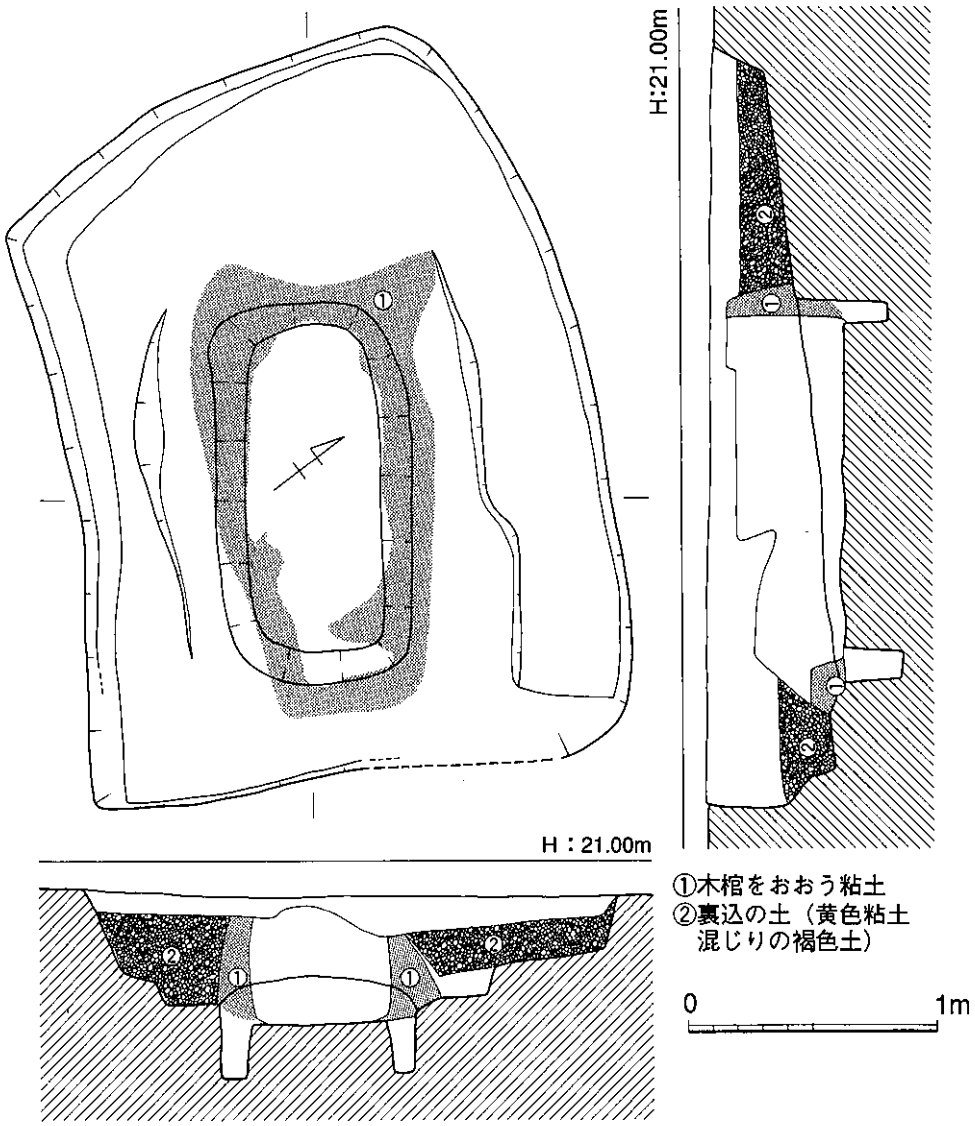



図３　木棺墓SP01実測図（１/30）

②SP02（図版９－(2)、図４）

(a)Ｂ区

(b)２段掘り

(c)Ｎ56°Ｗ

(d)210cm×130cm（東側は削平されている）

(e)140cm×60cm×25cm

(f)北西側底面に深さ10cm弱の落ち込みがある。小口板を立てるための掘り込みと考えられる。底面東側の側壁に沿って、長さ約50cmにわたって粘土塊が見られる。木蓋の目張り粘土と思われる。

③SP11（図版13－(1)、図８）

(a)Ｂ区

(b)素掘り

(c) N48° W

(d)130cm×45cm×50cm

(e)——

(f)墓坑の端部の形から木棺墓とした。

## (2) 土坑墓

土坑墓は弥生時代のもの8基（SP03～SP10）、平安時代のもの2基（SP12・SP13）を確認した。弥生時代の土坑墓には、副葬品を含めた出土遺物はなかった。

平安時代の土坑墓は弥生時代のものと異なり、墓坑の平面形態が長楕円形であるのが特徴である。本報告書では平安時代の土坑墓は取り上げていない。

土坑墓も記述方法は箇条書きに近いものとした。各項目の内容は次のとおりである。遺構名は略記号のSPを用いて番号をつけた。

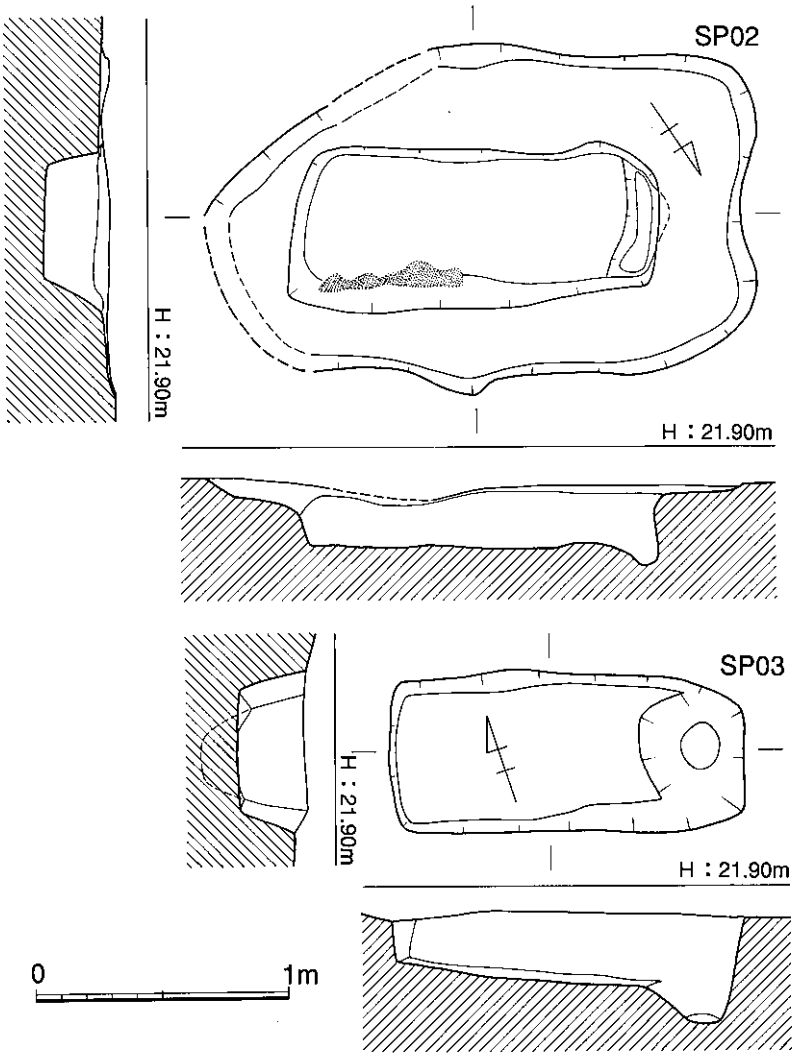



図4　木棺墓SP02、土坑墓SP03実測図（1/30）

(a)位置…小区画の位置である。

(b)掘り方型式…素掘りのものか、2段掘りであるかの区別である。

(c)主軸方位

(d)墓坑上段規模…墓坑上段とは、掘り方の型式が2段になっている木棺墓の1段目の掘り方のことをさす。素掘りのものは、棺本体に相当する部分である。長さ×幅×深さで表す。

(e)墓坑下段規模…墓坑下段とは、掘り方の型式が2段になっている木棺墓の棺本体に相当する部分をさす。したがって、素掘りのものには墓坑下段という表現は使っていない。長さ×幅×深さで表す。

(f)観察および付記事項

①SP03（図版10－(1)、図4）

(a)B区

(b)素掘り

(c)N71°W

(d)140cm×60cm×20～45cm（平均して30cm）

(e)——

(f)底面は東側ほど深く、特に東端には深さ45cmの落ち込みがある。

②SP04（図版10－(1)、図5）

(a)B区

(b)素掘り

(c)N89°W

(d)120cm（底面は75cm）×60cm×20～45cm

(e)——

(f)壁面の一部に赤色の顔料が付着していた。おそらく頭位と思われる。

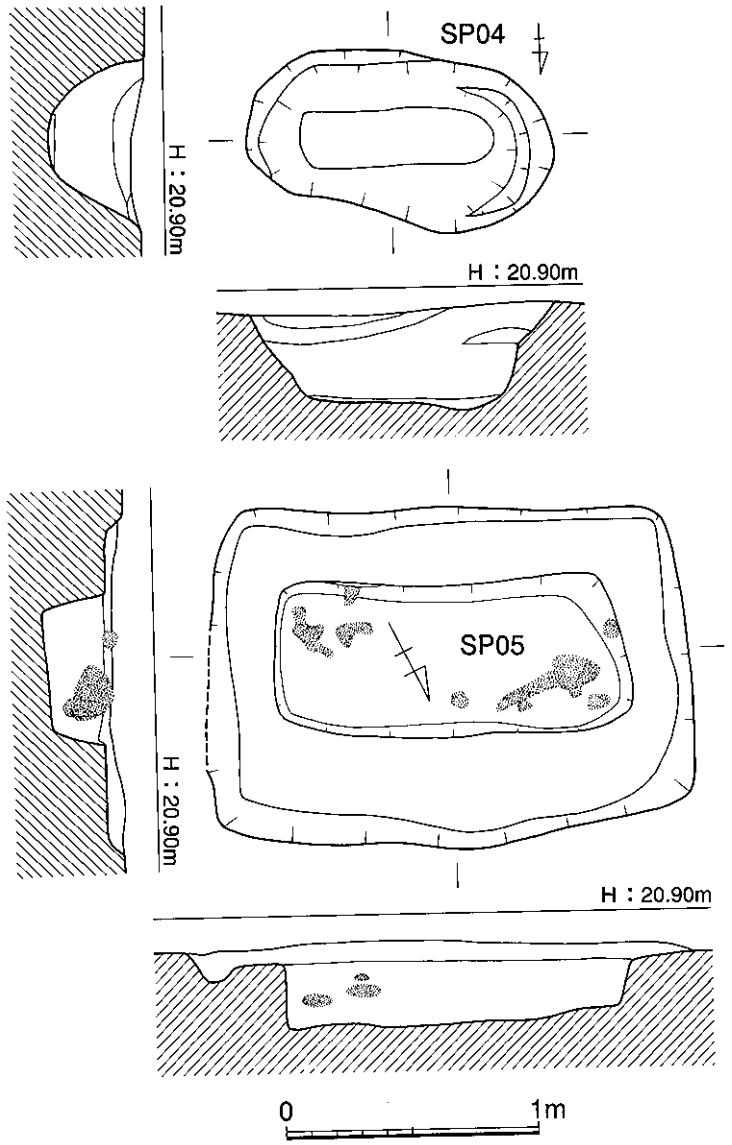



図5　土坑墓SP04・SP05実測図（1／30）

③SP05（図版10－(2)、図5）

(a)B区

(b)2段掘り

(c)N63°W

(d)190cm×135cm

(e)140cm×60cm×25cm

(f)木蓋の目張りをしたと考えられる粘土塊が見られる。

④SP06（図版11－(1)、図6）

(a)B区

(b)2段掘り

(c)N83°W

(d)150cm×110cm

(e)125cm×40cm×50～60cm（東側にいくほど深い）

(f)墓坑上段（墓坑の1段目）の南東側は部分的に破壊されている。

⑤SP07（図版11－(2)、図６）

(a)Ｂ区

(b)２段掘り

(c)Ｎ51°Ｗ

(d)230㎝×130㎝

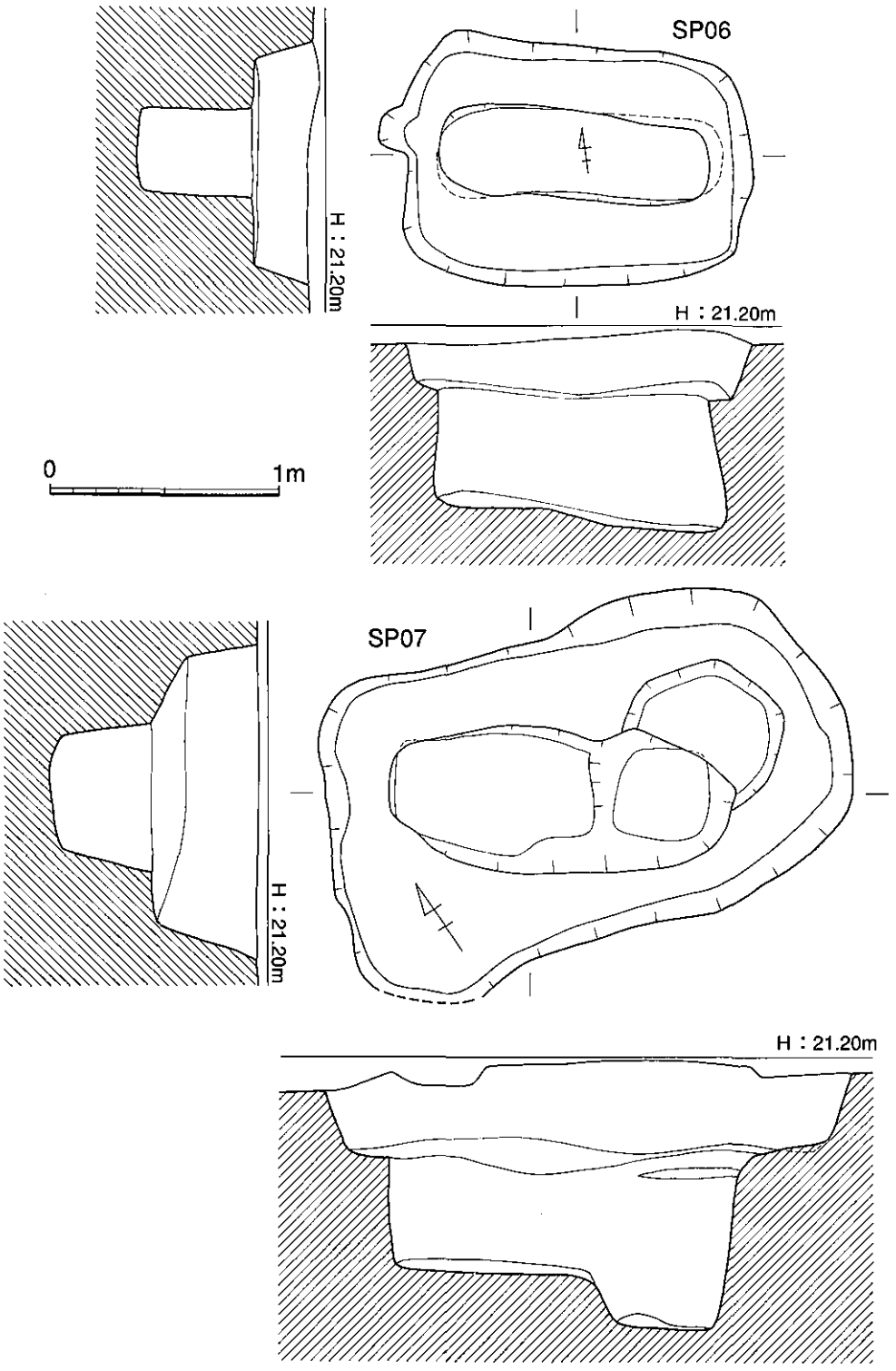



図６　土坑墓SP06・SP07実測図（１/30）

(e)150cm×65cm×60～80cm（東側に深さ20cmの掘り込みがある）

(f)墓坑上段（墓坑の１段目）と墓坑下段（墓坑の２段目、すなわち棺本体）の主軸の方向が一致していない。

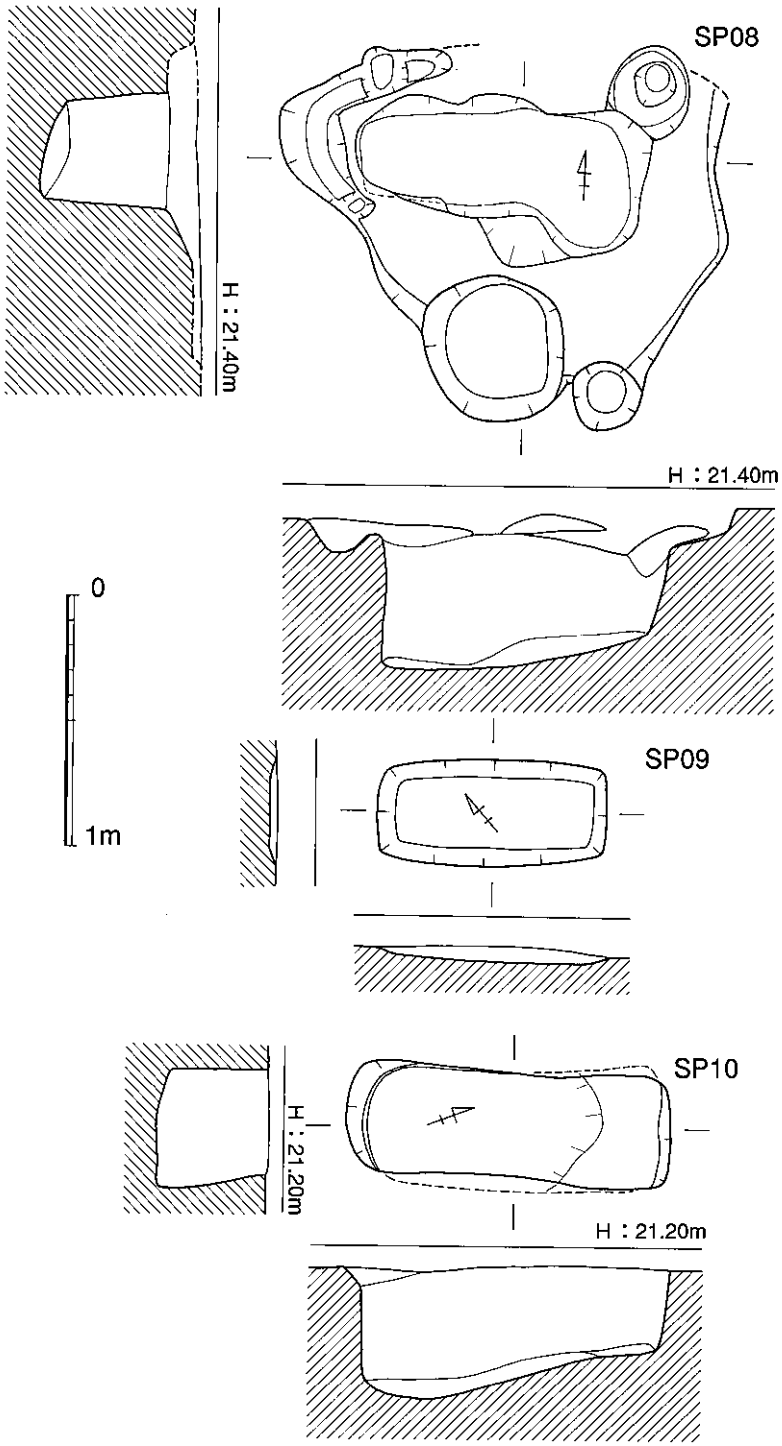



図７　土坑墓SP08・SP09・SP10実測図（１/30）

⑥SP08（図版12－(1)、図7）

(a)Ｂ区

(b)２段掘り

(c)Ｎ88°Ｅ

(d)170cm×150cm（攪乱を受けているため、幅についてはやや不明確）

(e)115cm×45cm×35～50cm（西側ほど深い）

⑦SP09（図７）

(a)Ｂ区

(b)素掘り

(c)Ｎ50°Ｗ

(d)90cm×45cm×10cm弱

(e)――

(f)削平がひどく、本来の大きさは不明確である。

⑧SP10（図版12－(2)、図7）

(a)Ｂ区

(b)素掘り

(c)Ｎ21°Ｅ

(d)120cm×40cm×35～50cm（南側ほど深く、底面は平坦でない）

(e)――

(f)東側の壁は膨らみをもって掘られている。

## (3) 石棺墓

石棺墓が確認されたのはB区だけである。3基を確認した。副葬品を含めた出土遺物はなかったが、甕棺墓を破壊して作られたものもあり、時期的には甕棺墓より後出するものである。

①SC01（図版13－(2)・図版20－(1)、図8）

蓋石、東側の小口石、ならびに南側2枚の側石以外の石材は見られなかった。石の供給が間に合わずに元々なかったのか、後世に抜き取られたためなのか判然としない。石材は花崗岩である。蓋の目張り粘土が一部に残っている。墓坑の大きさは長さ205cm×幅130cm、棺の大きさは内法で長さ140cm×幅50cm×深さ35cmである。主軸方位はN70°Wである。

②SC02（図版14、図9）

この石棺墓は、大型の甕棺墓1基を完全に破壊して作られている。墓坑内から大型の甕棺用土器の破片が数点出土している。また、甕棺墓の墓坑の中に作られた関係もあり、土が軟らかく底面の確認が非常に困難であった。したがって、底面の位置は多少の誤りがあるかもしれない。破壊された甕棺墓は、墓坑が辛うじてわかる程度に徹底して破壊されていたため、この甕棺墓は調査で確認した甕棺墓の員数の中には含めなかった。

石棺の構成は次のとおりである。蓋石は6枚、小口石は西側が2枚、東側が1枚、側石は両側とも3枚である。石材は花崗岩である。墓坑の大きさは、長さ190cm×幅165cmである。棺の大きさは、内法で長さ140cm×幅45cm×深さ15～25cmである。棺は墓坑の南側に片寄って作られている。主

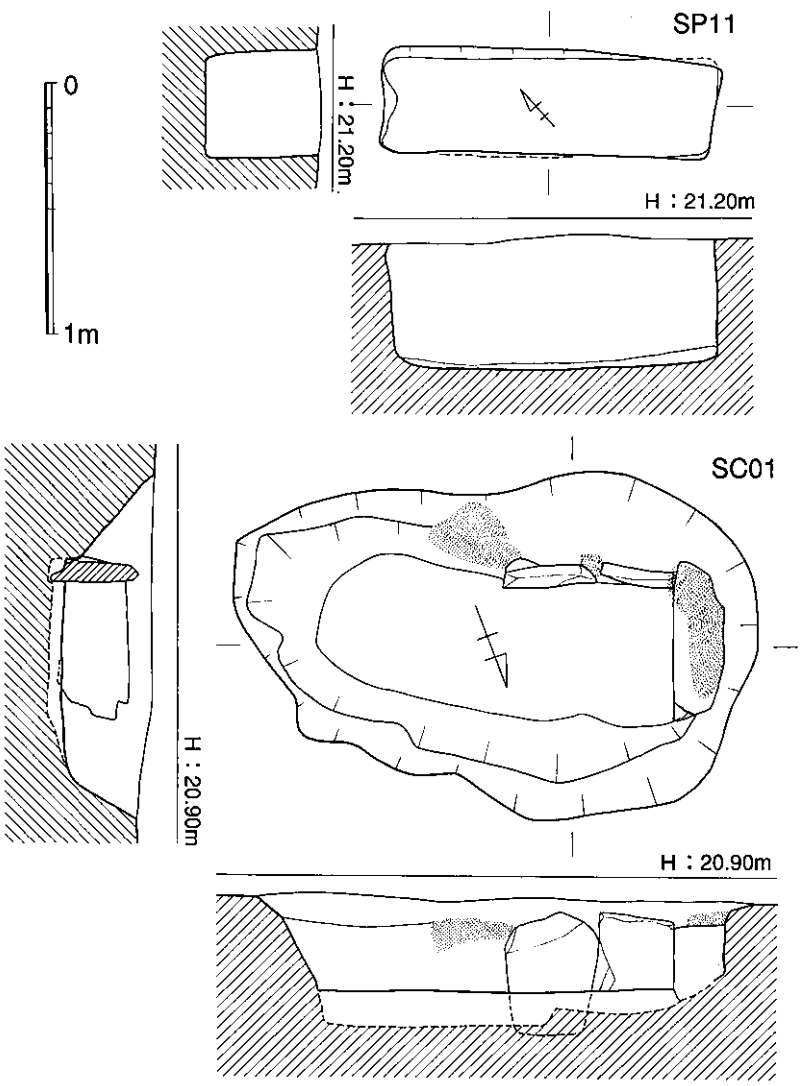



図8　木棺墓SP11・石棺墓SC01実測図（1/30）

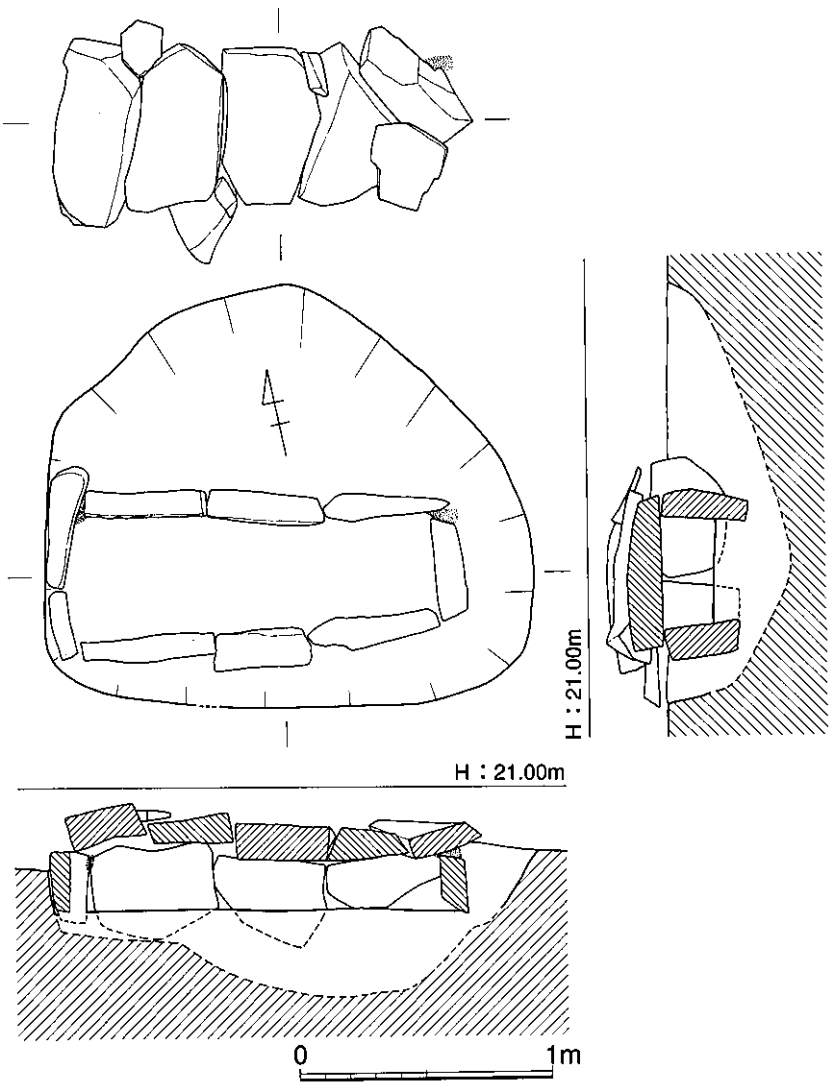



図９　石棺墓SC02実測図（１/30）

軸方位はＮ78°Ｗである。

③SC03（図版15・図版16－(1)、図10）

小型の甕棺墓SJ42の一部を破壊して作られている。石棺の構成は次のとおりである。蓋石は４枚で、隙間を粘土と小石で塞いでいる。小口石は両側とも見られないが、蓋石は完全に残っているので、最初から用意されていなかったものである。側石は両側とも３枚である。石材は花崗岩である。

墓坑は東側の一部が隣地のブロック塀のため掘れなかったが、長さ210㎝以上×幅115㎝である。棺は内法で、長さ140㎝×幅40㎝×深さ35㎝である。主軸方位はＮ72°Ｗである。

## (4)　甕棺墓

甕棺墓はすべて弥生時代のものである。合計45基を確認したが、削平されて痕跡を残すだけになってしまっているものもある。小児用の甕棺SJ33から副葬品の碧玉製管玉が出土した以外、他に出土遺物はなかった。他の墳墓の型式も含めてＢ区の西側に固まった形で位置しており、その東側に遺構の空白地帯がある。Ⅱ章でも記述したように丘陵が削平されたためで、ここにも同じように甕棺墓などがあったはずである。

甕棺墓の記述も箇条書きに近いものとした。各項目の内容は次のとおりである。遺構名は略記号の「SJ」を用いて番号を付した。

(a)位置…小区画の位置である。

(b)種別…成人棺（大）と小児棺（小）の別である。

(c)上（蓋）…棺として蓋の役をする土器（一般にいう上甕）の種別である。

(d)下（身）…棺として身（本体）の役をする土器（一般にいう下甕）の種別である。

(e)型式…棺の土器を２つ使う場合、土器の口の接合の方法である。ここでいう「接口」とは口と口が普通に合わせられているもの。「挿入」とは、身（下甕）の中に蓋（上甕）が入っているもの。「覆口」とは、蓋（上甕）の中に身（下甕）が入っているものである。２つの棺を使わないもの、すなわち単棺はここに記した。

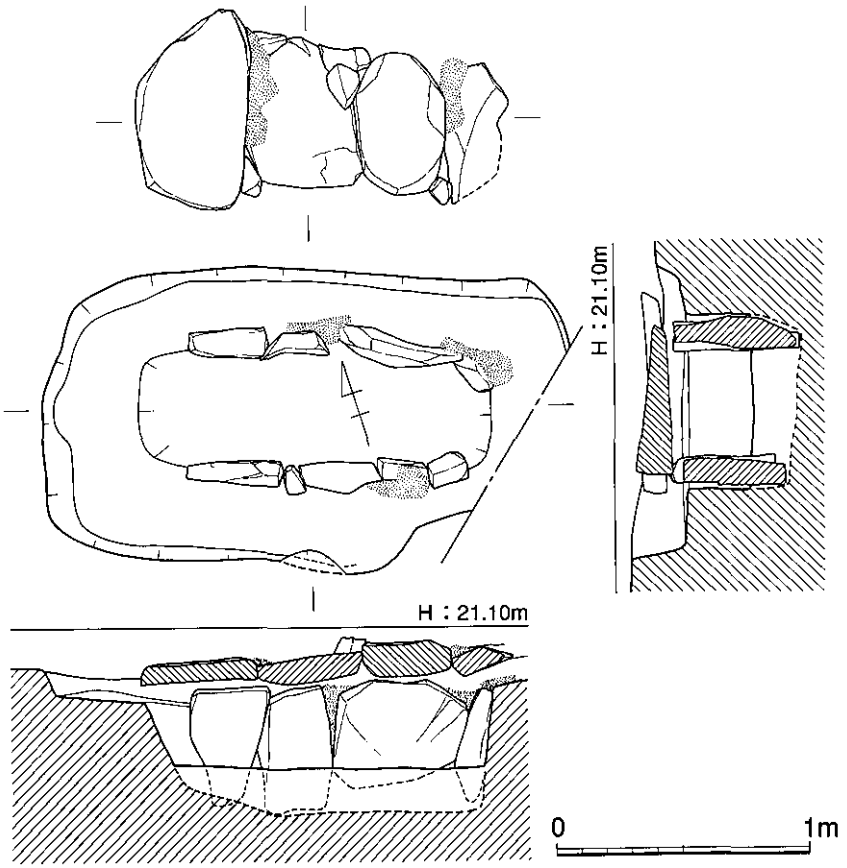



図10　石棺墓SC03実測図（1/30）

(f)主軸方位

(g)埋置角度…墓坑の中で棺が置かれている角度である。マイナスの値を示しているのは、蓋（上甕）の方が身（下甕）よりも低位にある場合である。

(h)墓坑規模…長軸×短軸で表す。

(i)観察および付記事項

なお、棺として使われた土器、すなわち遺物としての甕棺については後でまとめて記述している。また、いたずらに煩雑さを避けるため、以下では上甕・下甕という表現を使っている。

①SJ01（図版16－(2)、図11）

(a)Ｂ区　　(b)大

(c)甕（口縁部打ち欠き）　　(d)甕

(e)挿入　　(f)Ｎ82°Ｅ

(g)不明　　(h)120㎝×65㎝

(i)大部分が削平を受け破壊されている。下甕の口縁部の断面形状は一見、「く」の字型だが剥落したためである。詳細は別記した。

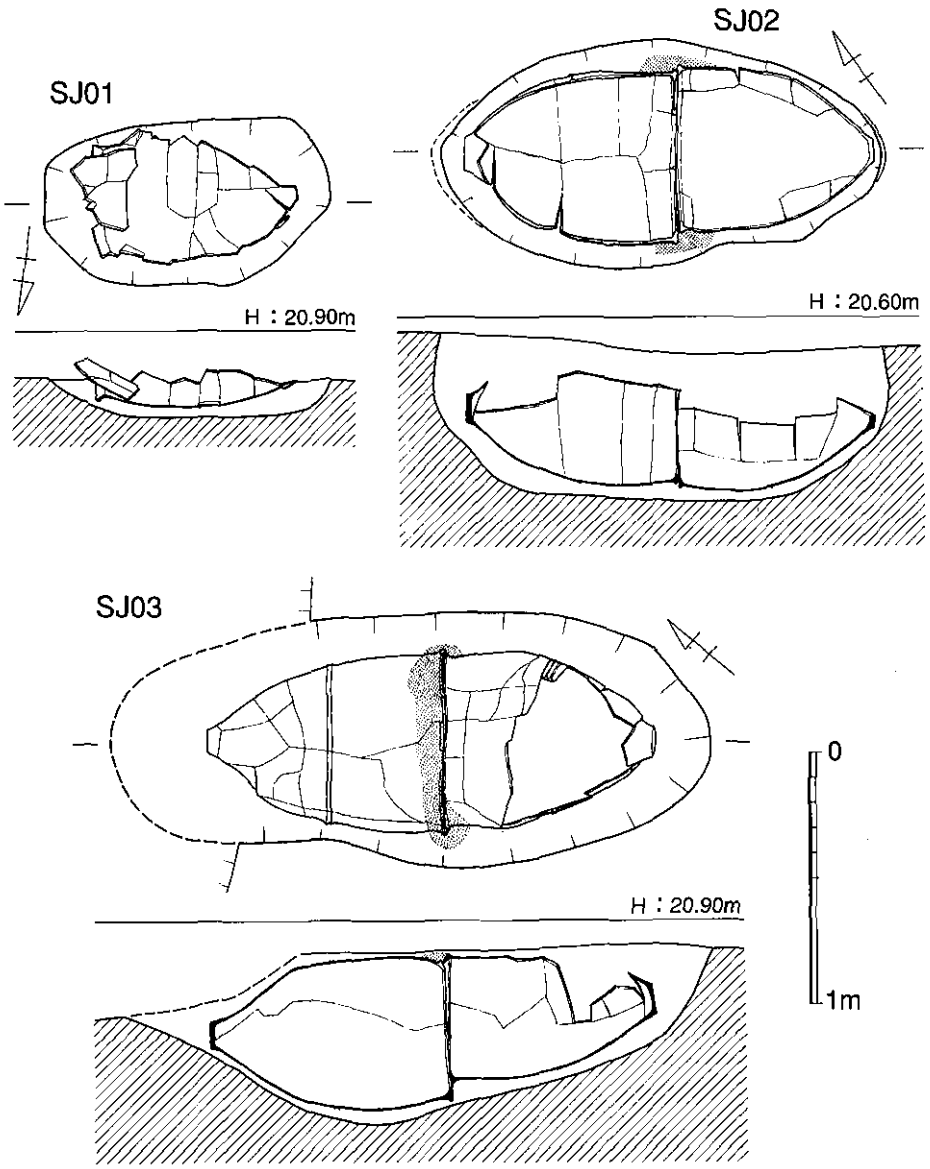



図11　甕棺墓SJ01・SJ02・SJ03実測図（1/30）

②SJ02（図版17－(1)、図11）

(a)B区　(b)大

(c)甕　(d)甕

(e)接口　(f)N54°W

(g)－1°　(h)175cm×90cm

(i)上部が削平されている。接口部の上部を粘土で目張りする。

③SJ03（図版17－(2)、図11）

(a)B区　(b)大

(c)甕　(d)甕

(e)接口　(f)N41°W

(g)5°　(h)240cm×100cm

(i)墓坑上位は削平されている。接口部上側を粘土で目張りする。

④SJ04（図版18－(1)・図版20－(1)、図12）

(a)B区　　(b)大

(c)不明　　(d)甕

(e)不明　　(f)N42°W

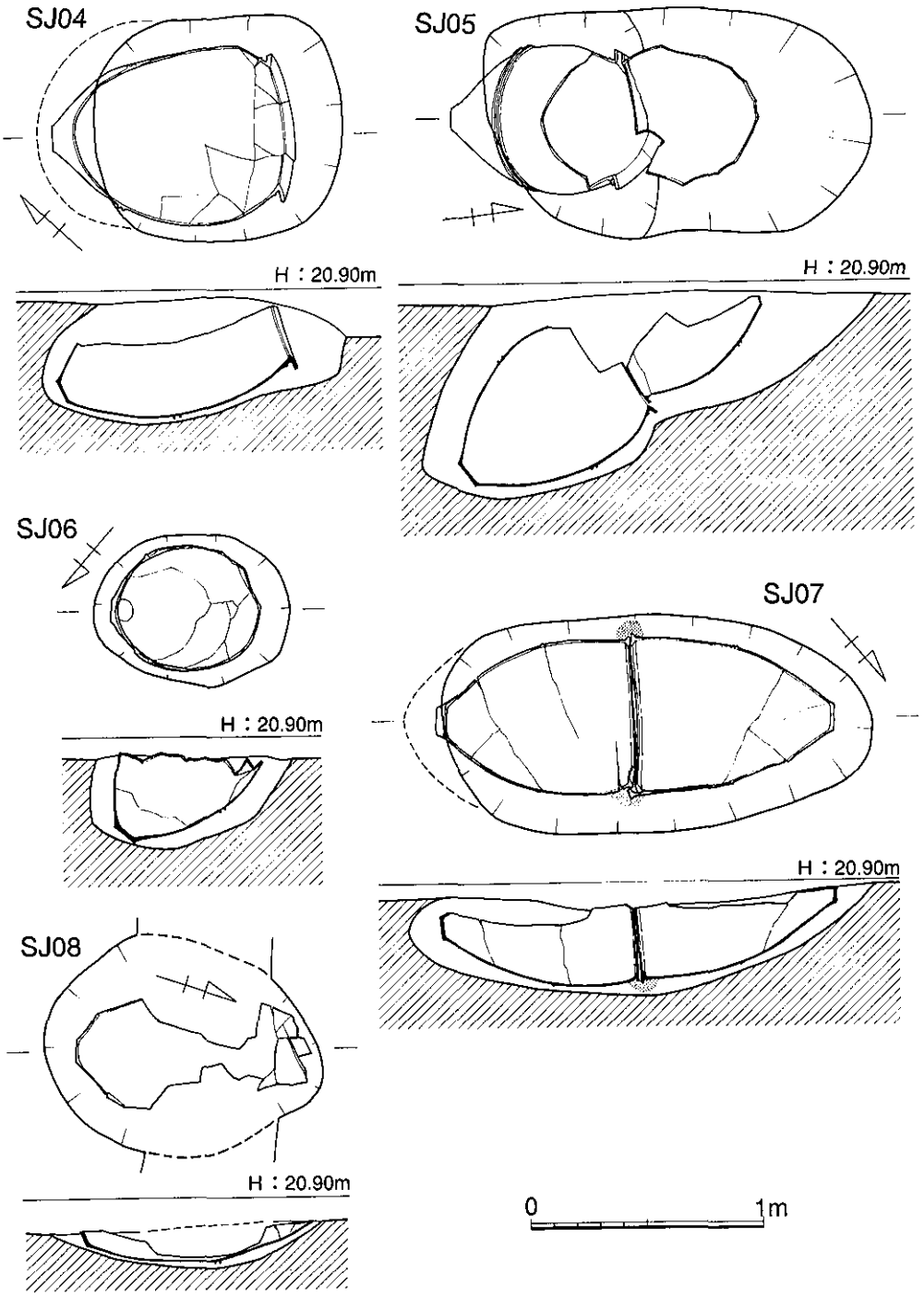



図12　甕棺墓SJ04・SJ05・SJ06・SJ07・SJ08実測図（1/30）

(g)21°　　(h)130cm×95cm

(i)上部を削平により破壊されており、上甕があったのかどうかわからない。単棺であったかどうかは不明である。

⑤SJ05（図版20－(1)、図12）

(a)B区　　(b)大

(c)甕　　(d)甕

(e)接口　　(f)N7°E

(g)37°　　(h)190cm×100cm

(i)上甕のほとんどが削平されている。

⑥SJ06（図版18－(2)・図版20－(1)、図12）

(a)B区　　(b)大

(c)不明　　(d)甕

(e)不明　　(f)N50°E

(g)50°前後　　(h)85cm×65cm

(i)上位を削平されており、上甕があったかどうか不明である。

⑦SJ07（図版19－(1)・図版20－(1)、図12）

(a)B区　　(b)大

(c)甕　　(d)甕

(e)接口　　(f)N49°W

(g)5°　　(h)200cm×95cm

(i)上位を削平されている。接口部を粘土で目張りする。一周していたと考えられる。上甕、下甕とも内面を黒塗りしている。

⑧SJ08（図版19－(2)・図版20－(1)、図12）

(a)B区　　(b)大

(c)甕　　(d)不明

(e)不明　　(f)N20°W

(g)20°前後　　(h)120cm×95cm

(i)上位をほとんど削平されている。

⑨SJ09（図版20－(2)、図13）

(a)B区　　(b)小

(c)壺（口縁部打ち欠き）　(d)甕

(e)接口　　(f)N 6° E

(g)40°　　(h)80cm×65cm

(i)上位を削平されている。

⑩SJ10（図版21－(1)）

(a)B区　　(b)不明

(c)不明　　(d)不明

(e)不明　　(f)不明

(g)不明　　(h)不明

(i)削平が甚だしく、甕棺墓があったという痕跡を示すのみであった。写真や実測図は記録していない。

⑪SJ11（図版21－(2)、図13）

(a)B区　　(b)大

(c)不明　　(d)甕

(e)不明　　(f)N86° E

(g)40°　　(h)105cm×90cm

(i)上部の大部分を削平されている。

⑫SJ12（図版21－(2)、図13）

(a)B区　　(b)大

(c)甕　　(d)甕

(e)接口　　(f)N40° W

(g)15°前後　　(h)135cm×75cm

(i)大部分が削平されている。墓坑の一部を甕棺墓SJ13に切られている。

⑬SJ13（図版21－(2)、図13）

(a)B区　　(b)大

(c)不明　　(d)甕

(e)不明　　(f)N26° W

(g)30°前後　　(h)105cm×90cm

(i)上部を大部分削平されている。甕棺墓SJ12の墓坑の一部を切る。

⑭SJ14（図版22－(1)、図13）

(a)B区　　(b)小

(c)不明　　(d)不明

(e)不明　　(f)不明

(g)不明確　　(h)45cm×30cm

(i)大部分が削平されている。

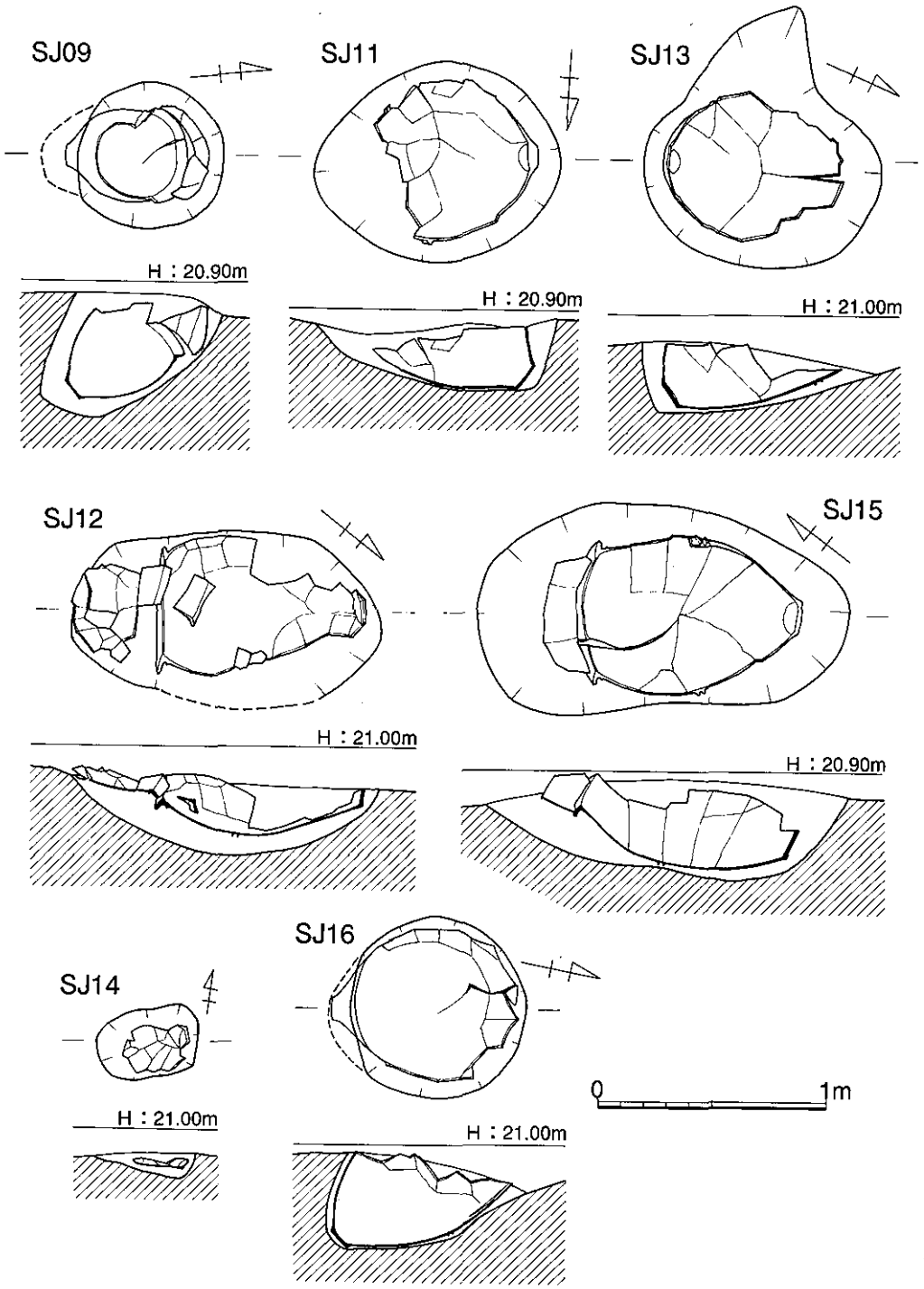



図13　甕棺墓SJ09・SJ11・SJ12・SJ13・SJ14・SJ15・SJ16実測図（1/30）

⑮SJ15（図版22－(2)、図13）

(a)Ｂ区　　(b)大

(c)甕（口縁部打ち欠き）　　(d)甕

(e)接口　　(f)Ｎ38°Ｗ

(g)25°　　(h)160cm×90cm

(i)上部を大きく削平されている。

⑯SJ16（図版23－(1)、図13）

(a)Ｂ区　　(b)大

(c)不明

(d)甕

(e)不明

(f)Ｎ10°Ｗ

(g)40°前後

(h)90cm×80cm

(i)上部を大きく削平されている。

⑰SJ17（図版23－(2)、図14）

(a)Ｂ区

(b)大

(c)甕

(d)甕

(e)接口

(f)Ｎ62°Ｗ

(g)2°

(h)225cm×130cm

(i)上部を削平されている。棺の埋置角度は水平に近く上甕と下甕の峻別は定かではないが、下位にある方を便宜的に下甕と考えた。

⑱SJ18（図版20－(1)・図版24－(1)、図14）

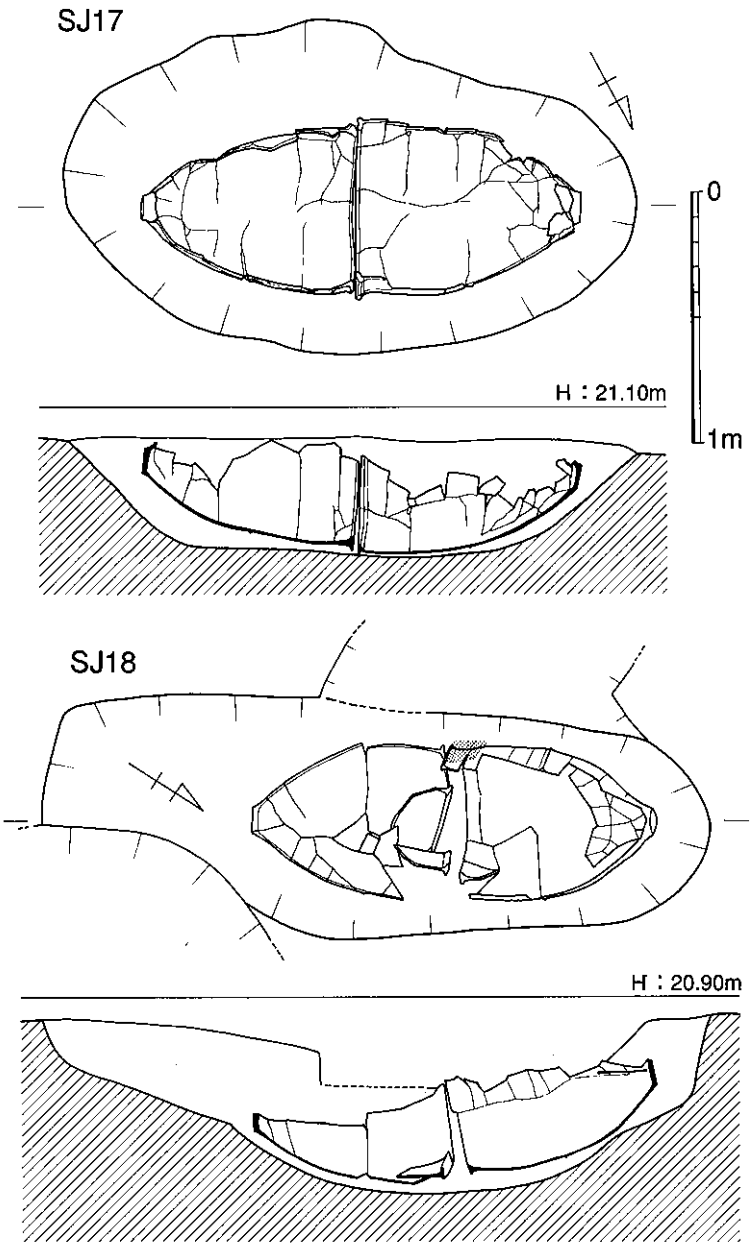



図14　甕棺墓SJ17・SJ18実測図（1／30）

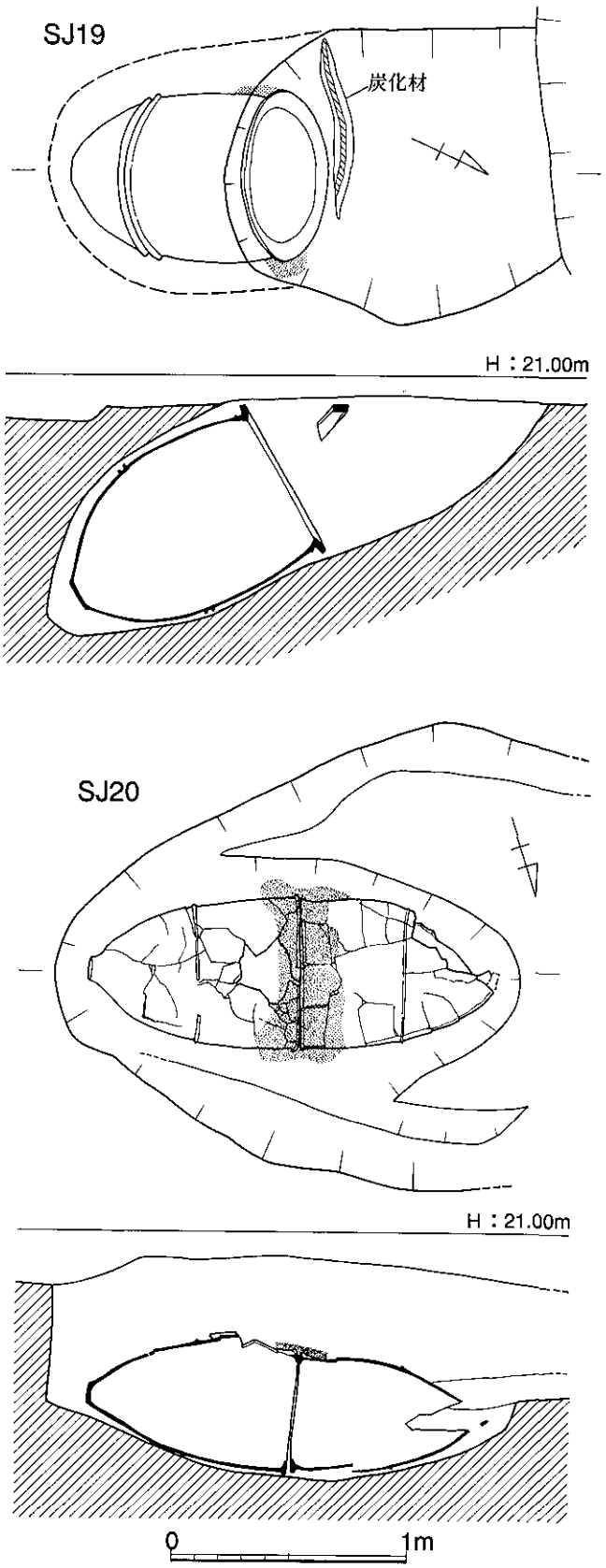



図15　甕棺墓SJ19・SJ20実測図（1/30）

(a)B区　(b)大
(c)甕　(d)甕
(e)接口　(f)N33°W
(g)2°　(h)260cm×95cm
(i)2つの甕の口の合わせ方は丁寧でない。上甕側の墓坑を掘る深さが十分でなかったので、こうなってしまったのであろう。甕棺墓SJ04とSJ05によって墓坑が切られる。

⑲SJ19（図版24－(2)、図15）

(a)B区　(b)大
(c)一　(d)甕
(e)単棺　(f)N25°W
(g)30°
(h)210cm×120cm
(i)墓坑の上位は削平されているが、ほぼ完全な形で確認された。甕の口縁部から約30cm離れた位置に幅8cm、長さ75cmの中心にまだ木質が残った炭化材が見られた。甕から離れているので、棺の木蓋であったかどうかは不明である。

⑳SJ20（図版25－(1)、図15）

(a)B区　(b)大
(c)甕　(d)甕
(e)接口　(f)N74°W
(g)4°　(h)200cm×170cm
(i)接口部の上方は粘土で覆われるが下2分の1は覆われていない。墓坑の断面形だけからでは棺の上甕と下甕の区別は明瞭でなく、便宜的に高低差で区分した。隣

にある木棺墓SP01との切り合い関係がわからずに掘り進めたので、西側の墓坑の掘り方は明瞭でない。

㉑SJ21（図版25－(2)、図16）

(a)B区

(b)小

(c)壺（口縁部打ち欠き）　(d)甕

(e)接口　(f)N42°W

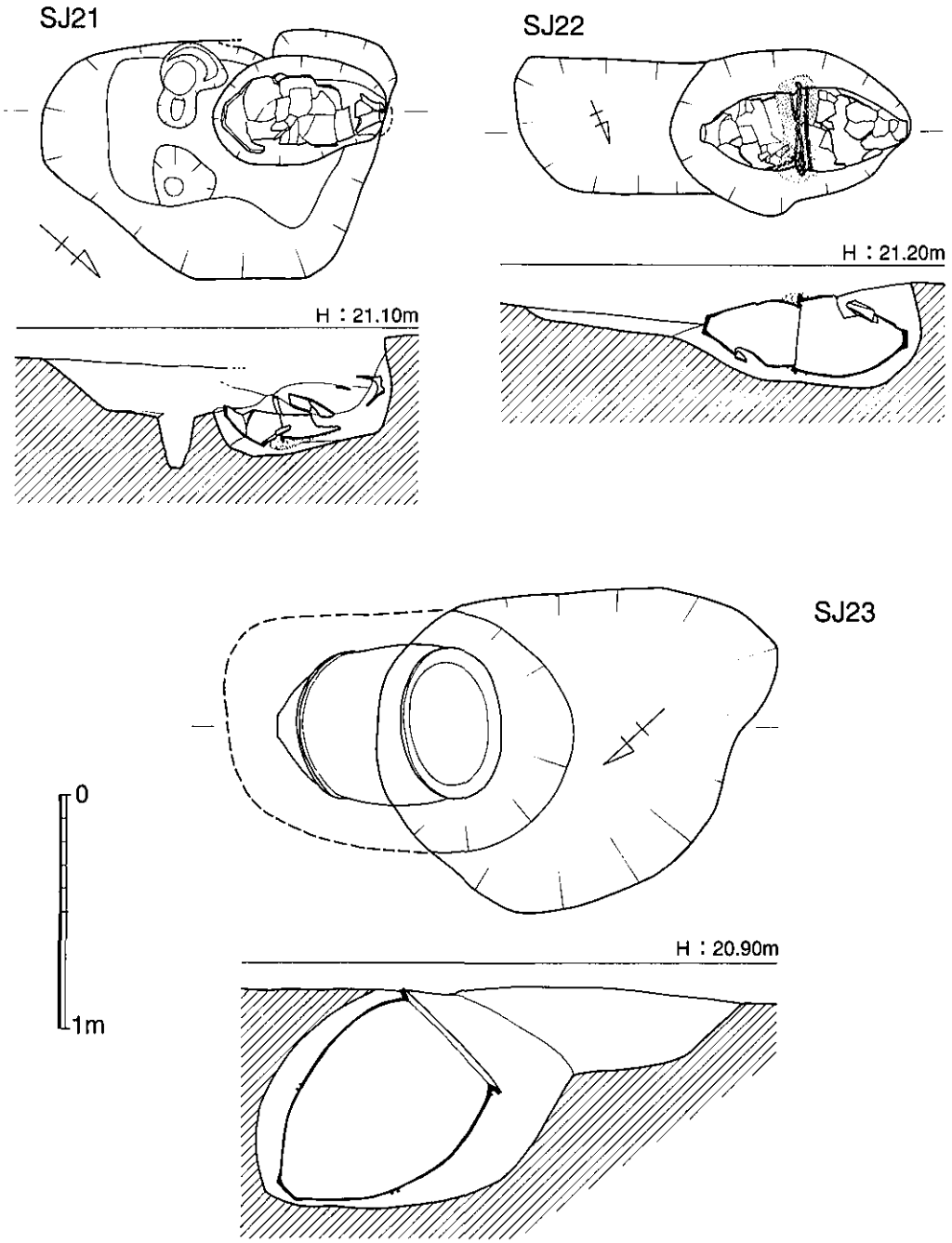



図16　甕棺墓SJ21・SJ22・SJ23実測図（1/30）

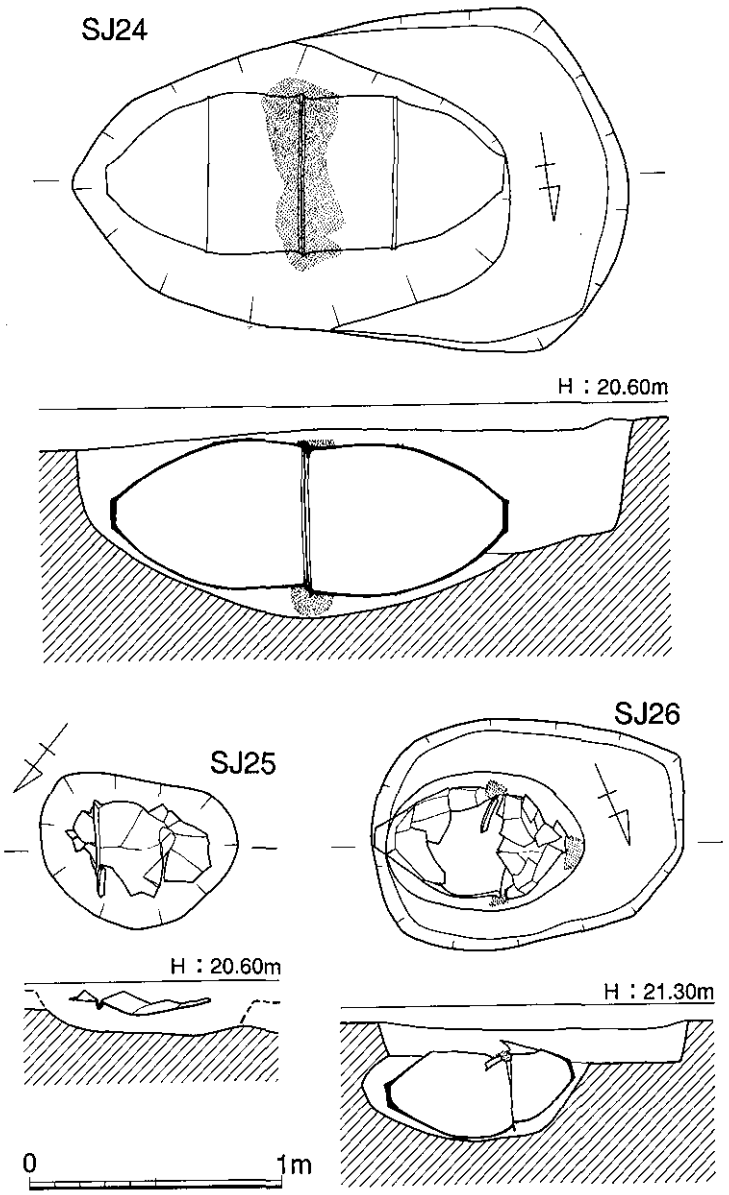



図17　甕棺墓SJ24・SJ25・SJ26実測図（1/30）

(g)−5°

(h)70cm×45cm

(i)後世の小ピットにより破壊されている。接口部の下方に目張り粘土が見られる。

㉒SJ22（図版26−(1)、図16）

(a)B区

(b)小

(c)甕

(d)甕

(e)接口

(f)N67°W

(g)4°

(h)170cm×65cm

(i)接口部の上部のみ粘土で目張りしている。

㉓SJ23（図版26−(2)、図16）

(a)B区

(b)大

(c)一

(d)甕

(e)単棺

(f)N44°E

(g)43°

(h)220cm×130cm

(i)完全な形で確認された。

㉔SJ24（図版27−(1)、図17）

(a)B区　(b)大

(c)甕　(d)甕

(e)接口　(f)N82°W

(g)−1°　(h)220cm×135cm

(i)接口部は完全に粘土で目張りされている。上甕側の棺の内面は黒塗りである。

㉕SJ25（図17）

(a)B区　　(b)小

(c)甕　　(d)甕

(e)接口　　(f)N51°E

(g)不明確　　(h)75cm×60cm

(i)大部分が削平されている。棺の埋置角は水平に近い。

㉖SJ26（図版27－(2)、図17）

(a)A区　　(b)小

(c)壺　　(d)甕

(e)接口　　(f)N68°W

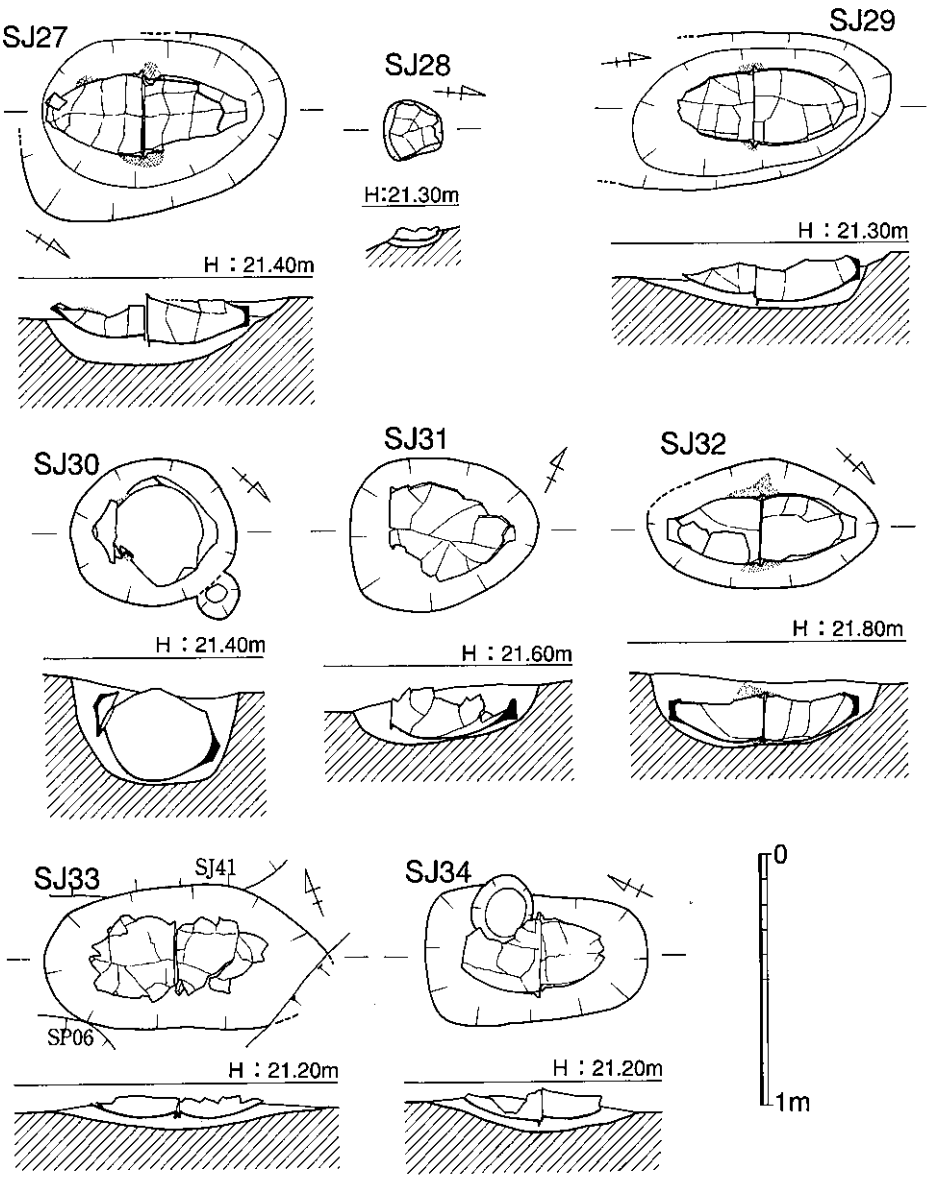



図18　甕棺墓SJ27・SJ28・SJ29・SJ30・SJ31・SJ32・SJ33
SJ34実測図（1/30）

(g) 7°　　(h)130cm×95cm

(i)上甕と墓坑の間に、上甕を固定するために粘土塊を置いている。

㉗SJ27（図版28－(1)、図18）

(a)A区　　(b)小

(c)甕　　(d)甕

(e)接口　　(f)N34°W

(g)5°前後

(h)105cm×70cm

(i)上部を削平されている。接口分の上部は粘土で目張りされる。上甕と墓坑との隙間の一部を粘土塊で押さえている。

㉘SJ28（図版28－(2)、図18）

(a)A区　　(b)小

(c)・(d)甕（上甕か下甕か不明）

(e)不明　　(f)N 5°W

(g)不明　　(h)20cm×25cm

(i)大部分が削平されており、残っていた土器が上甕であるのか下甕であるのか判別できない。

㉙SJ29（図版28－(2)、図18）

(a)A区　　(b)小

(c)甕　　(d)甕

(e)接口　　(f)N 7°E

(g)ほぼ水平　　(h)110cm×60cm

(i)上部を大きく削平されている。

㉚SJ30（図版29－(1)、図18）

(a)A区　　(b)小

(c)上甕（あるいは鉢か）　　(d)甕

(e)覆い口　　(f)N45°W

(g)24°　　(h)65cm×60cm

(i)上部を削平されている。覆い口の部分の隙間を粘土で目張りする。

㉛SJ31（図版29－(2)、図18）

(a)A区　　(b)小

(c)－　　(d)甕

(e)単棺　　(f)N26°W

(g)10°　　(h)75cm×60cm

(i)上部を大きく削平されている。

㉜SJ32（図版30－(1)、図18）

(a)A区　　(b)小

(c)甕　　(d)甕

(e)接口　　(f)N50°W

(g)1°　　(h)90cm×50cm

(i)上部を削平されている。棺の埋置角度は水平に近く、また墓坑の形からも2つの甕のどちらが上甕か下甕かの判断は難しいが、わずかに下位にある方を下甕と考えた。接口部には粘土の目張りが見られる。

㉝SJ33（図版30－(2)、図18）

(a)B区　　(b)小

(c)甕　　(d)甕

(e)接口　　(f)N70°W

(g)ほぼ水平　　(h)110cm×55cm

(i)甕棺墓SJ41の墓坑内に埋置されている。上部を大きく削平されている。墓坑の南端も後世に破壊されている。棺内から碧玉製の管玉57個が出土した。耕作によって攪乱されており、管玉は攪乱された埋土の中に散乱している状態で、出土状況の記録はとることができなかった。棺の埋置角はほぼ水平で、上甕と下甕の区別は管玉のあった方に遺体が収まっていたと考え、そちらをを下甕とした。

㉞SJ34（図版31－(1)、図18）

(a)B区　　(b)小

(c)甕　　(d)甕

(e)接口　　(f)N24°W

(g)ほぼ水平　　(h)85cm×50cm

(i)小ピットが掘り込まれ、部分的に破壊を受ける。さらに上部を大きく削平されている。棺の埋置角はほぼ水平で、上甕と下甕の判別ができない。

㉟SJ35（図版31－(2)、図19）

(a)B区　　(b)小

(c)壺（口縁部打ち欠き）　　(d)甕

(e)接口　　(f)N90°W

(g) 4°　　(h)160cm×95cm

(i)上甕側の墓坑はかなり大きい。

㊱SJ36（図19）

(a)B区　　(b)小

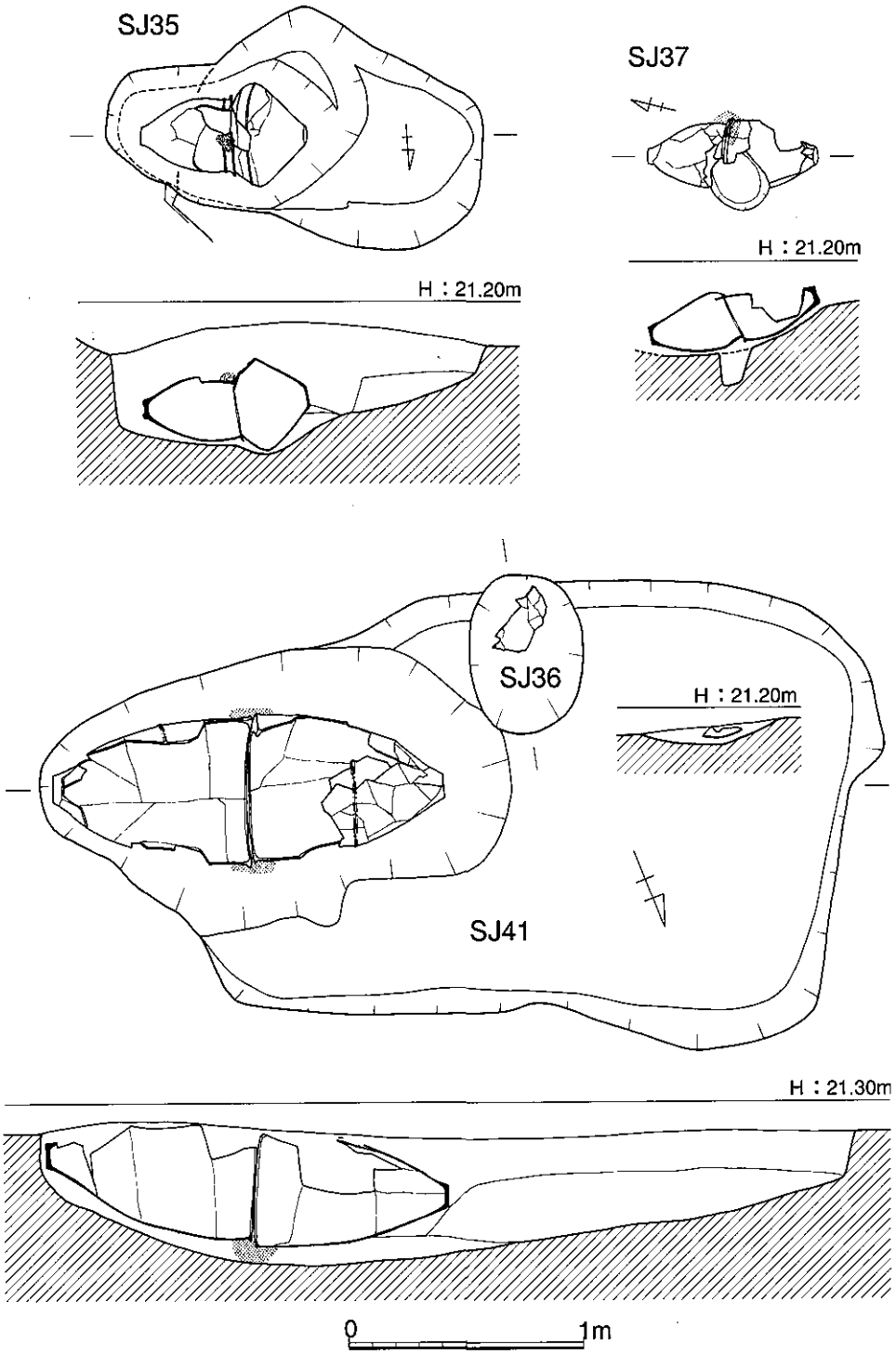



図19　甕棺墓SJ35・SJ36・SJ37・SJ41実測図（1/30）

(c)・(d)甕（どちら側か不明）

(e)不明　　(f)不明

(g)不明　　(h)65cm×50cm

(i)大部分が削平されており、棺体は痕跡のみである。

㊲SJ37（図版32－(1)、図19）

(a)B区　　(b)小

(c)甕　　(d)甕

(e)接口

(f)N11°W

(g)13°

(h)不明確

(i)小ピットによって部分的に破壊されている。甕棺墓SJ38の墓坑内に掘られ、この甕棺墓自体の墓坑は確認できなかった。接口部の上方に目張り粘土が見られる。

㊳SJ38（図版32－(1)、図20）

(a)B区　　(b)大

(c)甕　　(d)甕

(e)接口

(f)N70°W　　(g)3°

(h)260cm×145cm

(i)墓坑の一部をSJ40に切られる。接口部の上部は粘土で目張りしている。

㊴SJ39（図版32－(2)、図20）

(a)B区　　(b)大

(c)甕　　(d)甕

(e)接口

(f)N66°W

(g)ほぼ水平

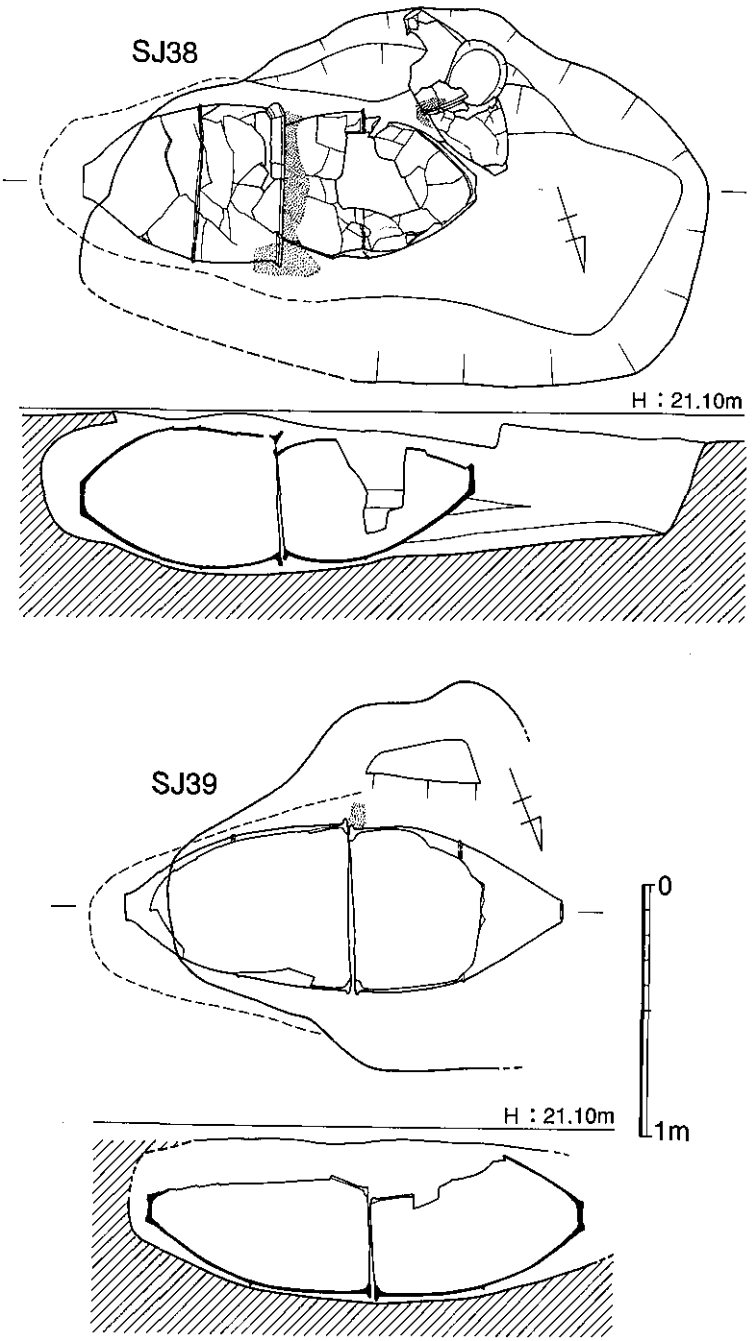



図20　甕棺墓SJ38・SJ39実測図（1/30）

(h)(210+χ)cm×150cm

(i)上部を削平されている。墓坑の西側は甕棺墓SJ40に切られ、墓坑の長径は不明確である。

㊵SJ40（図版33－(1)、図21）

(a)B区　　(b)大

(c)－　　(d)甕

(e)単棺　　(f)N45°E

(g)24°　　(h)155cm×95cm

(i)甕棺墓SJ38とSJ39の墓坑の一部を切る。蓋との合わせ目の目張り粘土が残っている。

㊶SJ41（図版33－(2)、図19）

(a)B区　　(b)大

(c)甕　　(d)甕

(e)接口　　(f)N68°W0

(g)－7°　　(h)350cm×195cm

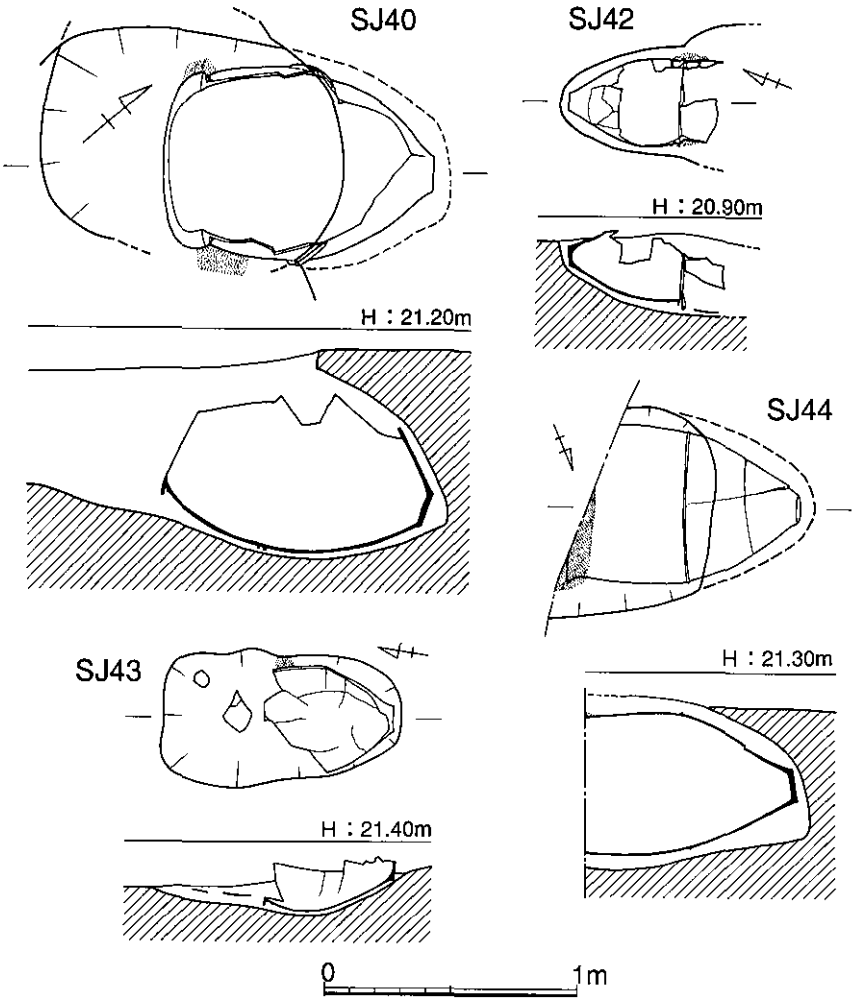



図21　甕棺墓SJ40・SJ42・SJ43・SJ44実測図（1/30）

(i)墓坑は大型であるが、上部を削平されている。墓坑内に小型棺SJ33が掘り込まれている。接部の粘土の目張りは丁寧で、一周している。

㊷SJ42（図版34－(1)、図21）

(a)B区　(b)小

(c)甕　(d)甕

(e)接口　(f)N24°W

(g)5°前後　(h)60cm×45cm

(i)下甕側の棺のほとんどは、石棺墓SC03によって破壊されている。また甕棺墓SJ43に墓坑を切られている。接口部の上部に目張り粘土が残る。

㊸SJ43（図版34－(1)、図21）

(a)B区　(b)小

(c)甕　(d)甕

(e)不明　(f)N9°W

(g)水平に近い　(h)95cm×50cm

(i)上甕側の甕は削平されほとんど残っていなかった。甕棺墓SJ42の墓坑を切る。

㊹SJ44（図21）

(a)B区　(b)大

(c)不明（おそらく甕）　(d)甕

(e)不明　(f)N22°E

(g)ほぼ水平　(h)χcm×95cm

(i)上甕側の棺および墓坑は、隣接地の建物の基礎のため掘り出せなかった。したがって棺の種類や墓坑の大きさは不明である。

㊺SJ45（図版34－(2)）

(a)C区　(b)小

(c)・(d)甕（どちら側か不明）

(e)不明　(f)不明

(g)不明　(h)不明

(i)削平が激しく、痕跡を示すのみである。詳細は不明。土器の厚さから、小型の棺と考えられる。

## 3 出土遺物

### (1) 甕棺

「甕棺として利用された土器」という意味の弥生土器の総称である。言うまでもなく、壺も使われている。詳細は別記の一覧表に記したが、表中の各項目の内容は次のとおりである。

①甕棺　甕棺墓の遺構番号。

②部位　上甕・下甕の別、もしくは単棺を示す。

③器種　甕・壺・蓋の区分である。

④区分　甕の場合の大型（成人棺）、小型（広義の小児棺）の区別である。中型と分類することもできるものもあるが、ここでは成人用大型棺を「大」と表し、それ以外を一括して「小」と大きく二分した。

⑤残存状況　残存あるいは破損の程度。

⑥寸法　（復元）とあるのは図上復元の数値である。

⑦凸帯位置　大型棺の胴部につけられた凸帯の位置（高さ）の、器高に対する割合である。（凸帯位置）÷（器高）で算出した。したがって0.5が胴部中位であり、数値が大きいほど胴部の凸帯位置は高いことを示し、反対に数値が小さいほど凸帯位置は低いことを示している。

⑧分類　大型棺だけに使った型式区分である。森園遺跡の場合、次のA・B・Cの3つに分類できる。それぞれの時期は、まとめの部分に記述した。

◇A類

| | |
|---|---|
| 全体的な器形のイメージ | 砲弾形 |
| 口縁部の断面形 | 未発達なT字形か逆L字形　内傾する |
| 口縁部直下のすぼまり | あり |
| 口縁部直下の凸帯 | なし |
| 胴部の凸帯 | 断面三角形1条（やや小さい） |
| 胴部の凸帯の位置 | 傾向として胴部のほぼ中位に近い |
| 最大径の位置 | 口縁部と胴部（ほぼ等しい） |

◇B類

| | |
|---|---|
| 全体的な器形のイメージ | 釣鐘形 |
| 口縁部の断面形 | T字形　ほぼ水平 |
| 口縁部直下のすぼまり | ないか、わずか |
| 口縁部直下の凸帯 | なし |
| 胴部の凸帯 | 断面三角形　1～2条（1条が多い） |
| 胴部の凸帯の位置 | 傾向として胴部のほぼ中位に近い |
| 最大径の位置 | 口縁部 |

◇C類　全体的な器形のイメージ　砲弾形

口縁部の断面形　逆Ｌ字形（内側の張り出しが弱いＴ字形で、「く」の字形に近い）　内傾する

口縁部直下のすぼまり　あり

口縁部直下の凸帯　断面三角形１条

胴部の凸帯　断面四角形２条（大きい）

胴部の凸帯の位置　傾向として胴部のやや下位

最大径の位置　胴部（凸帯部）

⑨その他の特徴　上記以外の特徴。

なお、実測図の縮尺は８分の１に統一したが、口縁部は４分の１で示した。黒い網かけは「黒塗り」と「丹塗り」を示している。SJ11の上甕（図25の11）にかけた粗い網は丹塗りで、それ以外のものは黒塗りである。甕棺墓の時期についてはまとめの章に記述した。

**表１　森園遺跡甕棺一覧表**

※寸法の（復元）は図上復元の数値

| 甕棺No. | 部位 | 器種 | 区分 | 残存状況 | 寸法(単位cm) | 胴部凸帯の位置 | 分類 | その他の特徴 | 掲図及び遺物番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SJ01 | 上 | 甕 | 大 | 胴部の一部。 | | − | B | 復元しても小片にしかならず、図示できなった。胴部に断面三角形の１条の凸帯を持つものである。口縁部の断面はＴ字形、あるいは未発達なＴ字形で、直下には凸帯を付さないものであろう。 | |
| | 下 | 甕 | 大 | 底部はすべて欠損。それ以外の部分も２分の１を欠損する。口縁部上面および内面は剥落している。 | 口径(復元) 71.0<br>器高(推定) 約73 | 0.45 | B | 口縁部の上面・内面は粘土の接合面で剥落しているが、これが焼成前のものか、焼成後のものか定かでない。本来の形状は断面Ｔ字型のものである。剥離面は指でオサエて整形している痕が明瞭に残り、製作過程の一端が知れる。胴部中位には１条の断面三角形の凸帯を貼りつける。 | 図22−1 |
| SJ02 | 上 | 甕 | 大 | 完形。 | 口径 63.2<br>器高 85.2<br>底径 12.2 | 0.52 | A | 口縁部の断面形は外側の張り出しが弱いＴ字型で内傾する。胴部の凸帯は１条の断面三角形のもので、貼りつける前に１条の沈線を施している。凸帯貼りつけの際の目印と思われる。最大径は胴部の上位にある。口縁部上面には赤色顔料を塗った痕跡がある。 | 図23−3 |
| | 下 | 甕 | 大 | 完形。 | 口径 61.0<br>器高 79.4<br>底径 12.4 | 0.52 | A | 口縁部の断面形は外側の張り出しが弱いＴ字形である。胴部の凸帯は１条の断面三角形のものである。最大径は口縁部にある。 | 図23−4 |
| SJ03 | 上 | 甕 | 大 | 完形。 | 口径 63.4<br>器高 82.0<br>底径 13.2 | 0.46 | B | 口縁部の断面形は外側の張り出しがやや弱いＴ字形である。胴部の凸帯は断面三角形のものを２条貼りつけたもの。最大径は口縁部にある。内外面ともに黒塗りの痕跡が見られる。 | 図24−5 |
| | 下 | 甕 | 大 | 完形。 | 口径 67.1<br>器高 95.5<br>底径 10.6 | 0.51 | B | 口縁部の断面形は外側の張り出しがやや弱いＴ字形である。胴部の凸帯は断面三角形のものを２条貼りつける。内外面ともに黒塗りの痕跡が見られる。最大径の位置は口縁部にある。 | 図24−6 |

| 甕棺No. | 部位 | 器種 | 区分 | 残存状況 | 寸法(単位cm) | 最大径の位置 | 分類 | その他の特徴 | 挿図及び遺物番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SJ04 | 単 | 甕 | 大 | 胴部中位から上の約2分の1を欠損。 | 口径(復元) 67.2<br>器高 97.4<br>底径 12.4 | 0.39 | C | いびつな器形で、左右対称にならない。口縁部の断面形はわずかに内側に突出し内傾する逆L字形で、直下に1条の断面三角形の凸帯を貼りつける。胴部のやや下がった位置に2条の大きな断面四角形の凸帯を貼りつける。 | 図22−2 |
| SJ05 | 上 | 甕 | 大 | 完形。 | 口径 48.4<br>器高 78.8<br>底径 11.2 | 0.46 | C | 口縁部の断面形は内傾するT字形で、直下に1条の断面三角形の凸帯を貼りつける。胴部の貼りつけ凸帯は、2条の大きな断面四角形のものである。 | 図24−7 |
| | 下 | 甕 | 大 | 口縁部を一部欠くが、ほぼ完形。 | 口径 57.2<br>器高 83.5<br>底径 11.6 | 0.5 | C | 口縁部の断面形は内傾するT字形で、直下に1条の断面三角形の凸帯を貼りつける。胴部の貼りつけ凸帯は2条の大きなもので、最大径の位置はここにある。 | 図24−8 |
| SJ06 | ※下 | 甕 | 大 | 口縁部を欠損。 | 口径−<br>器高<br>(残存高) 64.2<br>底径 11.2 | − | C | 胴部の凸帯は2条の大きな断面四角形(強い横ナデによりM字形に近い)のもの。外面には黒塗りの痕跡が見られる。上甕(蓋)が本来あったか明らかではないが、大きさから考えて単棺の可能性は低いと思われる。 | 図25−9 |
| SJ07 | 上 | 甕 | 大 | 約2分の1を欠損。 | 口径(復元) 65.4<br>器高 87.4<br>底径 10.2 | 0.49 | B | 口縁部の断面形はT字形で、最大径もここにある。胴部中位に2条の断面三角形の凸帯を貼りつける。凸帯を貼りつける前に器面に上下2条の沈線を巡らしている。凸帯貼りつけの際の目印と思われる。内面は黒塗りである。 | 図26−15 |
| | 下 | 甕 | 大 | 約2分の1を欠損。 | 口径(復元) 63.8<br>器高 84.6<br>底径 12.2 | 0.54 | B | 口縁部の断面形はT字形で、胴部中位に断面三角形の1条の凸帯を貼りつける。凸帯を貼りつける前に器面に凸帯の幅の上下2条の沈線を引いている。凸帯貼りつけの目印と考えられる。内面は黒塗りである。 | 図26−16 |
| SJ08 | ※下 | 甕 | 大 | 胴部の凸帯部位よりも下方が残存するが、その部分も2分の1は欠損している。なお、凸帯は一部のみ残存している。 | 残存高 43.4<br>底径 11.4 | − | B | わずかに残っている1条の凸帯の断面形は、M字形に近い大きな四角形で、このことから胴部の凸帯は2条あるものと考えられる。また、口縁部の断面形はL字形(やや内側に突出する)で、その直下に断面三角形の凸帯を1条貼りつける甕と考えられる。上甕が本来あったのかどうかは不明。 | 図25−10 |
| SJ09 | 上 | 壺 | − | 頸部から上を欠損。棺の蓋とするため打ち欠いたもの。 | 口径−<br>器高<br>(残存高) 26.1<br>底径 10.5 | − | | 胴部最大径(41.1cm)の位置に4条の断面M字形の凸帯を貼りつける。肩部(凸帯よりも上)の外面にのみ丹が塗られている。祭祀用の土器の広口壺の転用である。 | 図25−11 |
| | 下 | 甕 | 小 | 完形。 | 口径 39.4<br>器高 49.9<br>底径 10.8 | − | | 口縁部は端部が強くはね上がる「く」字形で、内面には明瞭な稜をつくる。口縁直下には1条の断面三角形の凸帯がつく。最大径は胴部上位にある。外面には全面にわたって黒塗りの痕跡が見られる。 | 図25−12 |
| SJ10 | 不明 | 甕 | 大 | 底部のみの小片。 | 残存高 20.1<br>底径(復元) 11.8 | − | 不明 | 正確な器高は知りえないが、やや小振りの棺である。器壁は5〜7mmと薄い。 | 図25−13 |
| SJ11 | ※下 | 甕 | 大 | 胴部上半を欠損。 | 口径−<br>器高<br>(残存高) 61.2<br>底径 13.8 | − | C | 全体の器形はよくわからないが、残存部だけを見ても非常に大型の甕棺である。胴部のやや下がった位置に断面四角形(強い横ナデによりM字形に近い)の2条の凸帯を貼りつける。胴部と接合しないが、口縁部の小片が残存する。わずかに内傾する未発達な断面T字形の口縁で、その直下には断面三角形の凸帯を1条貼りつけるものである。外面には黒塗りの痕跡が見られる。上甕(蓋)が本来あったか不明。 | 図25−14 |

| 甕棺No. | 部位 | 器種 | 区分 | 残存状況 | 寸法(単位cm) | 胴部凸帯の位置 | 分類 | その他の特徴 | 挿図及び遺物番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SJ12 | 上 | 甕 | 小 | 胴部下半を欠損。 | 口径 23.5 | — | C | 口縁部の断面形は「く」字形で、内面に明瞭な稜をつくる。口縁直下に断面三角形の凸帯を1条貼りつける。 | 図27－17 |
| | 下 | 甕 | 大 | 約2分の1を欠損。 | 口径(復元) 56.4<br>器高 87.0<br>底径 11.8 | 0.56 | C | 内傾する断面逆L字形（やや内側に突出し、T字形の口縁の退化したもの）の口縁部を持つ。口縁直下に1条の断面三角形の凸帯を貼りつける。胴部中位の位置には断面四角形の2条の大きな凸帯を貼りつける。この凸帯の場所が最大径の部位で、61.4cmを測る。 | 図27－18 |
| SJ13 | ※下 | 甕 | 大 | 胴部中位、凸帯部よりも上を欠損する。 | 口径—<br>残存高 61.2<br>底径 12.1 | — | C | 口縁部の形状は、残存する器形から推して内傾する逆L字形で、直下に1条の断面三角形の凸帯を貼りつけるものと考えられる。胴部の凸帯はほぼ中位の位置に断面四角形（強い横ナデにより、M字形に近い）の凸帯を2条貼りつける。器面の風化がかなり進んでいるが、凸帯周辺に黒塗りの痕跡が見られる。全面にわたっていたと思われる。上甕（蓋）が本来あったか不明。 | 図27－19 |
| SJ14 | 不明 | 甕 | 大 | 底部のみの破片で、約4分の3を欠損する。 | 残存高 16.5<br>底径 10.5 | — | 不明 | やや小振りの棺となろう。外面に縦ハケを残す。 | 図27－20 |
| SJ15 | 上 | 甕 | 大 | 凸帯部分の一部を残すのみ。 | | — | C | 削平がひどく、胴部に張りつけられた2条の凸帯周辺が残るのみで図示できない。 | |
| | 下 | 甕 | 大 | 全体の約2分の1を欠損。 | 口径(復元) 60.0<br>器高 92.0<br>底径 16.0 | 0.52 | C | 口縁部の断面形はT字形と内傾する逆L字形との中間的なものだが、基本形は内傾する逆L字形のものである。口縁直下に1条の断面三角形の凸帯、胴部の中位に2条の断面四角形の大きな凸帯を貼りつける。胴部の凸帯部の横ナデは非常に強く、断面形の基本は四角形ながらM字形になっている。底径は他の同型式の土器に比し、かなり大きい。 | 図28－21 |
| SJ16 | ※下 | 甕 | 大 | 口縁部を欠損。また、残存部位も胴部上位については2分の1を欠損。 | 残存高 77.0<br>底径 11.2 | — | C | 口縁部は全体の器形から断面逆L字形の内傾するものと考えられる。胴部の2条の凸帯はやや小さな断面四角形のもので、胴部最大径（図上復元値で66.0cm）の位置よりやや下がった位置に貼りつけられる。凸帯周辺に黒塗りの痕跡が見られる。全面にわたっていたと思われる。上甕（蓋）が本来あったか不明。 | 図28－22 |
| SJ17 | 上 | 甕 | 大 | 全体の約2分の1を欠損。 | 口径(復元) 67.6<br>器高 84.0<br>底径 9.8 | 0.49 | B | 口縁部の断面形はT字型だが、外面の張り出しは内側に比べて小さい。胴部のほぼ中位に断面三角形の凸帯を1条貼りつける。外面には黒塗りの痕跡が見られる。 | 図28－23 |
| | 下 | 甕 | 大 | 全体の約4分の1を欠損。 | 口径 67.6<br>器高 88.7<br>底径 10.5 | 0.48 | B | 口縁部の断面形はT字形。胴部中位には小さな断面三角形の凸帯を1条貼りつける。外面には黒塗りの痕跡が見られる。 | 図28－24 |
| SJ18 | 上 | 甕 | 大 | ほぼ完形。 | 口径 60.0<br>器高 78.8<br>底径 11.6 | 0.55 | B | 口縁部の断面形はT字型で、胴部中位に断面四角形の1条の凸帯を貼りつける。内外面ともに黒塗りの痕跡が見られ、本来全面黒塗りだったと考えられる。 | 図29－25 |
| | 下 | 甕 | 大 | ほぼ完形。 | 口径 57.8<br>器高 81.8<br>底径 11.5 | 0.51 | A | 整形が不十分で全体的にひずんでいる。口縁部の断面形はやや未発達なT字形で、口縁直下は内側にすぼまる。また、口縁直下の内外面には強い横ナデによる凹凸が残る。胴部のほぼ中位に小さな断面三角形の凸帯を貼りつける。外面は黒塗りである。 | 図29－26 |
| SJ19 | 単 | 甕 | 大 | 完形。 | 口径 75.6<br>器高 103.9<br>底径 12.8 | 0.44 | C | 口縁部の断面形はやや内傾する肉厚の逆L字型で、端部はやや下垂する。口縁直下には断面三角形の凸帯を1条貼りつける。胴部のやや下がった位置に断面四角形の2条の凸帯を貼りつける。今回の調査ではもっとも大きな甕棺で、口縁部はいくぶん内側にすぼまるが、全体的にずんどうな印象を受ける。凸帯部位を除き、外面には細かい縦ハケを残す。 | 図30－27 |

| 甕棺No. | 部位 | 器種 | 区分 | 残存状況 | 寸法(単位cm) | 胴部凸帯の位置 | 分類 | その他の特徴 | 挿図及び遺物番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SJ20 | 上 | 甕 | 大 | 完形。 | 口径 65.2<br>器高 89.0<br>底径 12.0 | 0.49 | B | 口縁部の断面形は内側への突出が強いT字形。胴部中位に断面三角形の凸帯を1条貼りつける。凸帯貼りつけ部位には、上下2段の浅い平行沈線が施されている。凸帯貼りつけの際の目印と考えられる。 | 図31－32 |
| | 下 | 甕 | 大 | 完形。 | 口径 62.4<br>器高 86.3<br>底径 10.8 | 0.47 | B | 口縁部の断面形は内側の突出が強いT字型。胴部中位のやや下がった位置に断面三角形の凸帯を1条貼りつける。 | 図31－33 |
| SJ21 | 上 | 壺 | — | 頸部から上を打ち欠く。 | 頸部径 20.5<br>残存高 29.9<br>底径 8.8 | — | — | 中型の広口壺の口縁から頸部を打ち欠いて棺としたものである。胴部最大径の位置のやや上方に小さな断面三角形の凸帯を1条貼りつける。 | 図30－28 |
| | 下 | 甕 | 小 | ほぼ完形。 | 口径 37.0<br>器高 47.0<br>底径 7.8 | — | — | 口縁部は内傾し、内側にすぼまる。断面形はやや張り出す逆L字形である。口縁下には1条の断面三角形の凸帯を貼りつける。底面は内側にくぼむ。 | 図30－29 |
| SJ22 | 上 | 甕 | 小 | ほぼ完形。 | 口径 38.9<br>器高 47.2<br>底径 7.8 | — | — | 口縁部は内傾し内側にすぼまる。断面形は逆L字形である。口縁下には1条の断面三角形の凸帯を貼りつける。底面はわずかに内側にくぼむ。胴部の外面は黒色を呈しており、顔料を塗布したものと思われる。 | 図30－30 |
| | 下 | 甕 | 小 | ほぼ完形。 | 口径 34.7<br>器高 41.1<br>底径 7.6 | — | — | 口縁部の断面形は逆L字形で内傾する。口縁部直下は内側にすぼまり、断面三角形の小さな1条の凸帯を貼りつける。 | 図30－31 |
| SJ23 | 単 | 甕 | 大 | 完形。 | 口径 64.8<br>器高 96.5 | 0.34 | C | 口縁部は内傾し、断面形は小さく「く」の字形に外反する。口縁直下に断面三角形の凸帯を1条、胴部下位に断面四角形の2条の大きな凸帯を貼りつける。底部に縦ハケが残る。 | 図32－36 |
| SJ24 | 上 | 甕 | 大 | 完形。 | 口径 62.8<br>器高 82.7<br>底径 13.5 | 0.52 | B | 口縁部の断面形はT字形だが、外側の張り出しはやや弱い。胴部の中位に高さの低い2条の断面三角形の凸帯を貼りつける。内外面ともに黒塗りである。 | 図31－34 |
| | 下 | 甕 | 大 | 完形。 | 口径 64.0<br>器高 78.6<br>底径 13.2 | 0.52 | A | 口縁部の断面形はやや未発達なT字形で、直下は内側にすぼまる。胴部のほぼ中位に小さな断面三角形の凸帯を1条貼りつける。内外面ともに黒塗りで、今回調査した甕棺の中では黒塗りの度合い（残り具合）は最も強い。 | 図31－35 |
| SJ25 | 上 | 甕 | 小 | 胴部中位から下を欠損。残存部は全体の約4分の1。 | 口径(復元) 42.0 | — | — | 口縁部の断面形は内側の突出が強い逆L字形で、端部は跳ね上げ気味である。口縁下に断面三角形の1条の凸帯を貼りつける。 | 図32－37 |
| | 下 | 甕 | 小 | 胴部下位から下を欠損。残存部は全体の約2分の1。 | 口径(復元) 48.0 | — | — | 口縁部の断面形は厚手の逆L字形で、わずかに内傾する。上面はくぼむ。口縁下には1条の断面三角形の凸帯を貼りつける。推定される器高は55～57cmほどになろう。 | 図32－38 |
| SJ26 | 上 | 壺 | 小 | 頸部から上は打ち欠き。胴部は完形。 | 頸部径 27.2<br>器高 33.1<br>底径 8.2 | — | — | 広口壺の頸部から上を打ち欠いて棺としたものである。胴部最大径の位置に断面三角形の凸帯を1条貼りつける。 | 図32－39 |

| 甕棺No. | 部位 | 器種 | 区分 | 残存状況 | 寸法(単位cm) | 胴部の凸帯位置 | 分類 | その他の特徴 | 挿図及び遺物番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SJ26 | 下 | 甕 | 小 | ほぼ完形。 | 口径 46.5<br>器高 51.3<br>底径 11.6 | — | — | 口縁部の断面形はわずかに内傾する厚手の逆Ｌ字形である。口縁下は内側にすぼまり、断面三角形の１条の凸帯を貼りつける。胴部の最大径は47.5cmあり、胴張りで丸みのある器形である。 | 図32－40 |
| SJ27 | 上 | 甕 | 小 | 胴部下半の約２分の１を欠損。 | 口径 31.2<br>器高 38.3<br>底径(復元) 7.2 | — | — | 口縁部の断面形は逆Ｌ字形である。直下は内側にすぼまり、外面には１条の断面三角形の凸帯を貼りつける。 | 図33－41 |
| | 下 | 甕 | 小 | 胴部の一部を欠損。 | 頸部径 30.4<br>残存高 39.9<br>底径 8.2 | — | — | 口縁部の断面形は内傾する逆Ｌ字形で、わずかに内側に突出する。凸帯はつけられていない。 | 図33－42 |
| SJ28 | 不明 | 甕 | 小 | 小片。 | | — | — | 小片のため図示できない。 | |
| SJ29 | 上 | 甕 | 小 | 底部を欠く。残存部は２分の１を欠損。 | 口径(復元)29.0 | — | — | 口縁部は断面逆Ｌ字形である。胴部の張りは小さく、ほっそりした器形である。底径は７cmほどになろう。器面の風化がかなり進んでいる。 | 図33－43 |
| | 下 | 甕 | 小 | 約２分の１を欠損。 | 口径(復元) 32.6<br>器高 41.6<br>底径 8.0 | — | — | 口縁部の断面形はは逆Ｌ字形で、わずかに内傾する。口縁直下には断面三角形の凸帯を１条貼りつける。器面の風化がかなり進んでいる。 | 図33－44 |
| SJ30 | 上 | 蓋 | — | 完形。 | 口径 25.7<br>天井径 4.9<br>器高 8.3 | — | — | 類例をあまり見ない器形である。口縁部には１孔１対の緊縛用の穴がある。下甕用の壺の口縁部の穴と位置的に対応し、これと最初からセットをなすものと考えられる。 | 図33－45 |
| | 下 | 壺 | — | 胴部上位の一部を欠損。 | 口径 25.0<br>器高 45.4<br>底径 8.7 | — | — | 上甕の蓋同様、類例をあまり見ない器形の無頸壺である。口径は小さく、胴部は球形に近いほど大きく張り出す。口縁部上面には１孔１対の緊縛用の穴がある。上甕の蓋の項で記述しているように、穴の位置が正確に対応し最初からセットをなしていたものであると考えられる。胴部最大径の位置のやや上方に断面三角形の凸帯を１条貼りつける。この凸帯部分だけ明らかに色が違い、意図的に他の部分とは異なる粘土を使って作られたものと思われる。 | 図33－46 |
| SJ31 | 単 | 甕 | 小 | 約２分の１を欠損。 | 口径(復元) 41.5<br>器高 46.5<br>底径(復元) 8.6 | — | — | 口縁部の断面形は上面が平坦な逆Ｌ字形（未発達なＴ字形）である。口縁直下は内側にすぼまり、断面三角形の凸帯を１条貼りつける。胴部の張りは強く、上位にある最大径（復元）は41.6cmを測る。底面は上方にくぼむ。器面の風化が進んでいる。 | 図33－47 |
| SJ32 | 上 | 甕 | 小 | 胴部の一部を欠損。 | 口径 29.3<br>器高 37.9<br>底径 7.3 | — | — | 口縁部の断面形はわずかに内傾する逆Ｌ字形である。口縁直下はわずかに内側にすぼまり、断面三角形の凸帯を１条貼りつける。 | 図33－48 |
| | 下 | 甕 | 小 | 口縁部を約２分の１を欠損。 | 口径(復元) 29.0<br>器高(復元) 37.0<br>底径 7.6 | — | — | 整理作業の際は胴部の破片どうしが接合せず、図上で復元したものである。口縁部の断面形は上面が平坦な逆Ｌ字形である。 | 図33－49 |

| 甕棺No. | 部位 | 器種 | 区分 | 残存状況 | 寸法(単位cm) | 胴部凸帯の位置 | 分類 | その他の特徴 | 挿図及び遺物番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SJ33 | 上 | 甕 | 小 | 胴部下半を欠損。残存部は約4分の1。 | 口径(復元) 43.0 | — | — | 口縁部の断面形は逆L字形で若干内傾する。口縁部直下には断面三角形の凸帯を1条貼りつける。 | 図33−50 |
| | 下 | 甕 | 小 | 胴部中位から下を欠損。残存部分は約4分の1。 | 口径(復元) 40.8 | — | — | 口縁部の断面形は逆L字形で内傾する。やや「く」の字形に近く、端部は下垂する。口縁直下には鋭い断面三角形の凸帯を1条貼りつける。 | 図33−51 |
| SJ34 | 上 | 甕 | 小 | 口縁部から胴部上位までのみ残存。 | 口径(復元) 33.4 | — | — | 器面の風化が進み破片の接合ができず、図示できる部分は口縁部だけとなった。断面形は逆L字形である。口縁下には凸帯はつかない。 | 図33−52 |
| | 下 | 甕 | 小 | 口縁部から胴部上位までのみ残存。 | 口径(復元) 31.6 | — | — | 上甕同様器面の風化がひどく破片の接合ができず、図示できる部分は口縁部だけとなった。断面形は逆L字形である。口縁下には凸帯はつかない。 | 図33−53 |
| SJ35 | 上 | 壺 | — | 頸部から上を欠損(打ち欠き)。 | 器高(残存高) 31.8<br>底径 7.5 | — | — | 中型の広口壺の頸部から上を打ち欠いて棺の蓋としたものである。胴部最大径の位置に、断面M字形の凸帯を1条貼りつける。肩部外面はヘラミガキである。 | 図34−54 |
| | 下 | 甕 | 小 | ほぼ完形。 | 口径 35.2<br>器高 41.6<br>底径 8.6 | — | — | 口縁部の断面形は内傾する逆L字形で、口縁直下に断面三角形の凸帯を1条貼りつける。底面は上方にくぼむ。 | 図34−55 |
| SJ36 | 不明 | 甕 | 小 | 小片。 | | — | — | 小片のため図示できない。 | |
| SJ37 | 上 | 甕 | 小 | 胴部上位から上を約4分の1欠損。 | 口径(復元) 29.0<br>器高(復元) 36.2<br>底径 7.5 | — | — | 整理作業の際に胴部の破片どうしが接合せず、図上で復元したものである。口縁部の断面形は逆L字形である。上面はくぼみ、内面は内側に突出する。 | 図34−56 |
| | 下 | 甕 | 小 | 胴部上位から上を約3分の2欠損。 | 口径 26.5<br>器高 37.5<br>底径 7.5 | — | — | 口縁部の断面形は、わずかに内傾する逆L字形である。胴部最大径は25.8cmと、ほっそりした印象の器形である。 | 図34−57 |
| SJ38 | 上 | 甕 | 大 | 胴部中位を約4分の1欠損。 | 口径 53.2<br>器高 76.4<br>底径 10.8 | 0.58 | A | 口縁部の断面形は逆L字形で内傾する。口縁直下は内側にすぼまる。胴部中位のやや上方に断面三角形の凸帯を1条貼りつける。 | 図34−58 |
| | 下 | 甕 | 大 | ほぼ完形。 | 口径 62.6<br>器高 79.4<br>底径 12.4 | 0.57 | A | 口縁部の断面形は未発達なT字形で肉厚である。口縁下は内側にすぼまる。胴部のやや上位に断面三角形の凸帯を1条貼りつける。 | 図34−59 |
| SJ39 | 上 | 甕 | 大 | 胴部上半の約3分の1を欠損。 | 口径 67.5<br>器高 84.0<br>底径 11.0 | 0.48 | B | 口縁部の断面形は内側の突出が強いT字形で、口縁直下はわずかにすぼまる。胴部のほぼ中位には断面三角形の凸帯を1条貼りつける。底面は上方にくぼむ。 | 図35−60 |

| 甕棺No. | 部位 | 器種 | 区分 | 残存状況 | 寸法(単位cm) | 凸帯の位置 | 分類 | その他の特徴 | 挿図及び遺物番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SJ39 | 下 | 甕 | 大 | 胴部上半の約4分の1を欠損。 | 口径 69.8<br>器高 90.2<br>底径 10.5 | 0.49 | B | 口縁部の断面形は内側の突出が強いT字形である。胴部の中位には小さいながらも鋭い断面三角形の凸帯を1条貼りつける。底面は上甕同様上方にくぼむ。 | 図35－61 |
| SJ40 | 単 | 甕 | 大 | ほぼ完形。 | 口径 69.4<br>器高 103.0<br>底径 12.6 | 0.54 | C | SJ19に匹敵する大きさを持つ。口縁部は器壁が厚く、断面形は上面の平坦な逆L字形である。口縁下は大きく内側にすぼまる。口縁直下には断面三角形の小さな凸帯を1条貼りつける。胴部中位のやや上方には断面四角形の大きな凸帯を2条貼りつける。凸帯の位置はこの型式の甕にしてはかなり高いのが特徴である。 | 図36－64 |
| SJ41 | 上 | 甕 | 大 | 上半部を約2分の1欠損。 | 口径(復元) 60.4<br>器高 85.4<br>底径 11.6 | 0.52 | B | 口縁部の断面形はT字形であるが、未発達なものとの中間で、やや古い傾向を示す。胴部の中位には断面三角形の凸帯を1条貼りつける。 | 図35－62 |
| | 下 | 甕 | 大 | 上半部を約2分の1欠損。 | 口径 (57,62.8)<br>器高 80.0<br>底径 10.2 | 0.48 | B | 整形が不十分でゆがんでいる。口径は短径と長径を示した。口縁部の断面形は内側の突出が強いT字形である。胴部中位に断面三角形の凸帯を1条貼りつける。 | 図35－63 |
| SJ42 | 上 | 甕 | 小 | 下半部を欠損。 | 口径(復元) 30.0 | — | — | 口縁部の断面形は逆L字形で内側にすぼまる。口縁下には断面三角形の凸帯を1条貼りつける。貼りつけ後の調整(横ナデ)は不十分で、凸帯はやや丸みを帯びている。 | 図36－65 |
| | 下 | 甕 | 小 | 胴部中位から上を約4分の1欠損。 | 口径 33.8<br>器高 45.9<br>底径 7.2 | — | — | 口縁部の断面形は逆L字形で、口縁下は大きく内側にすぼまるため、最大径(34.2cm)は胴部にある。口縁下には断面三角形の凸帯を1条貼りつける。底部の厚みは他の小型の甕に比べて厚い。 | 図36－66 |
| SJ43 | 上 | 甕 | 小 | 小片。 | | — | — | 小片のため図示できない。 | |
| | 下 | 甕 | 小 | 全体の約2分の1を欠損。 | 口径(復元) 38.0<br>器高 50.0<br>底径 8.8 | — | — | 口縁部の断面形は内側にわずかに突出する逆L字形で、やや内傾する。口縁直下には断面三角形の凸帯を1条貼りつける。内面は黒塗りである。 | 図36－67 |
| SJ44 | 上 | 甕 | 大 | 口縁部のみ(口縁部だけしか掘り出さなかった)。 | 口径 61.0 | 不明 | B | 口縁部だけしか掘り出していないため、全容は完全にはわからないものの、下甕に類する器形を呈するものであろう。口縁部の断面形は内側の突出が強いT字形である。口縁直下には凸帯はつかない。 | 図37－68 |
| | 下 | 甕 | 大 | 完形。 | 口径 63.4<br>器高 90.4<br>底径 13.5 | 0.49 | B | 口縁部の断面形は内側の突出が強いT字形で、口縁下はわずかにすぼまる。胴部の中位に1条の断面台形(横ナデによりM字形に近い)の凸帯を貼りつける。 | 図37－69 |
| SJ45 | 不明 | 甕 | 小 | 小片。 | | — | — | 小片のため図示できない。 | |

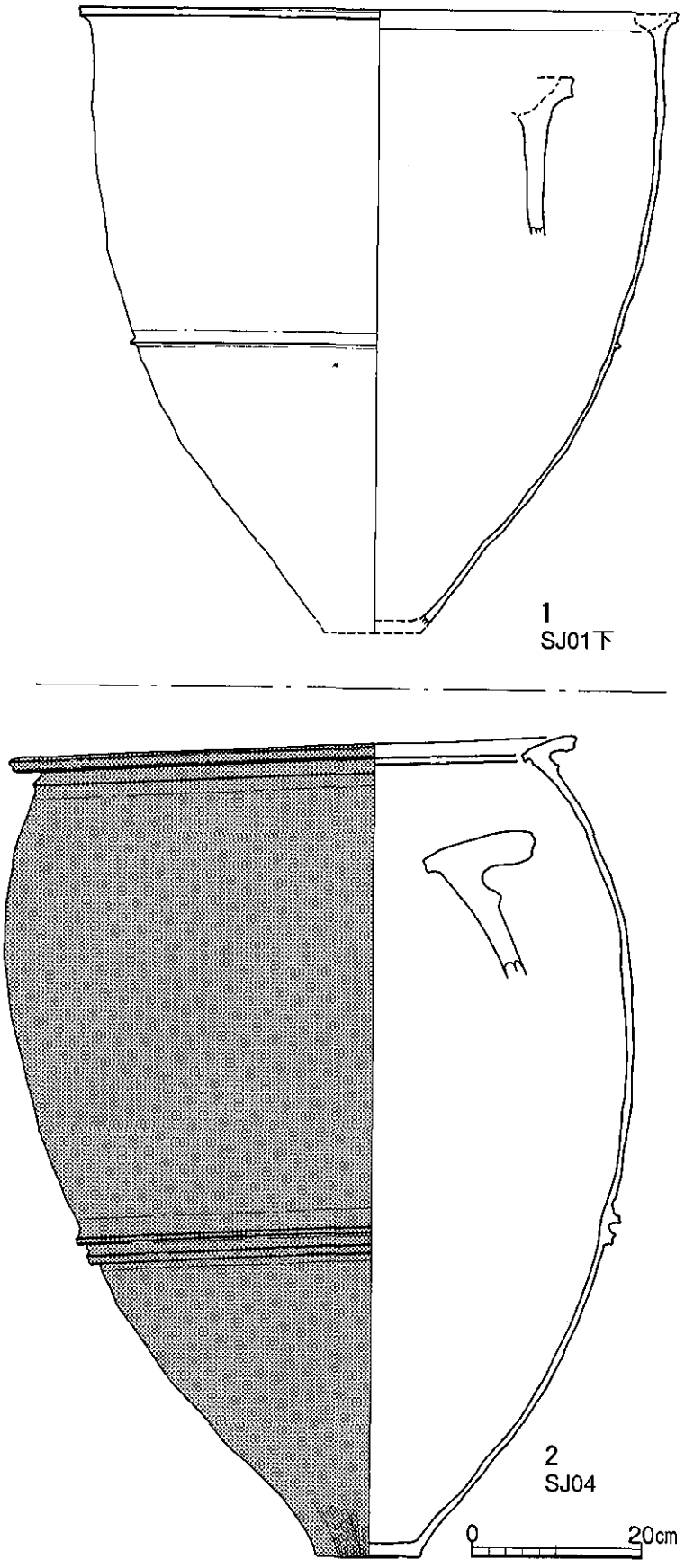



図22　SJ01下甕(1)、SJ04(2)実測図(1/8)

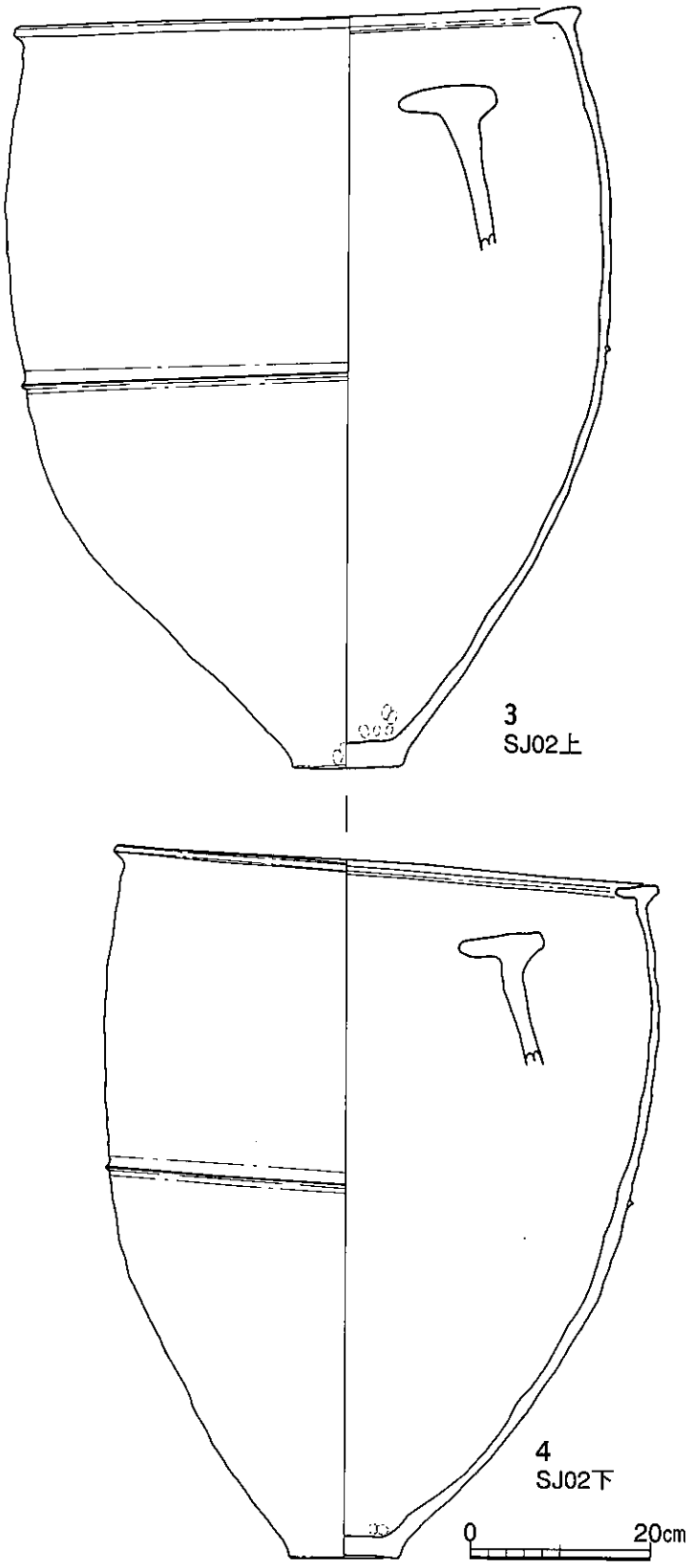



図23　SJ02上甕(3)・下甕(4)実測図(1/8)

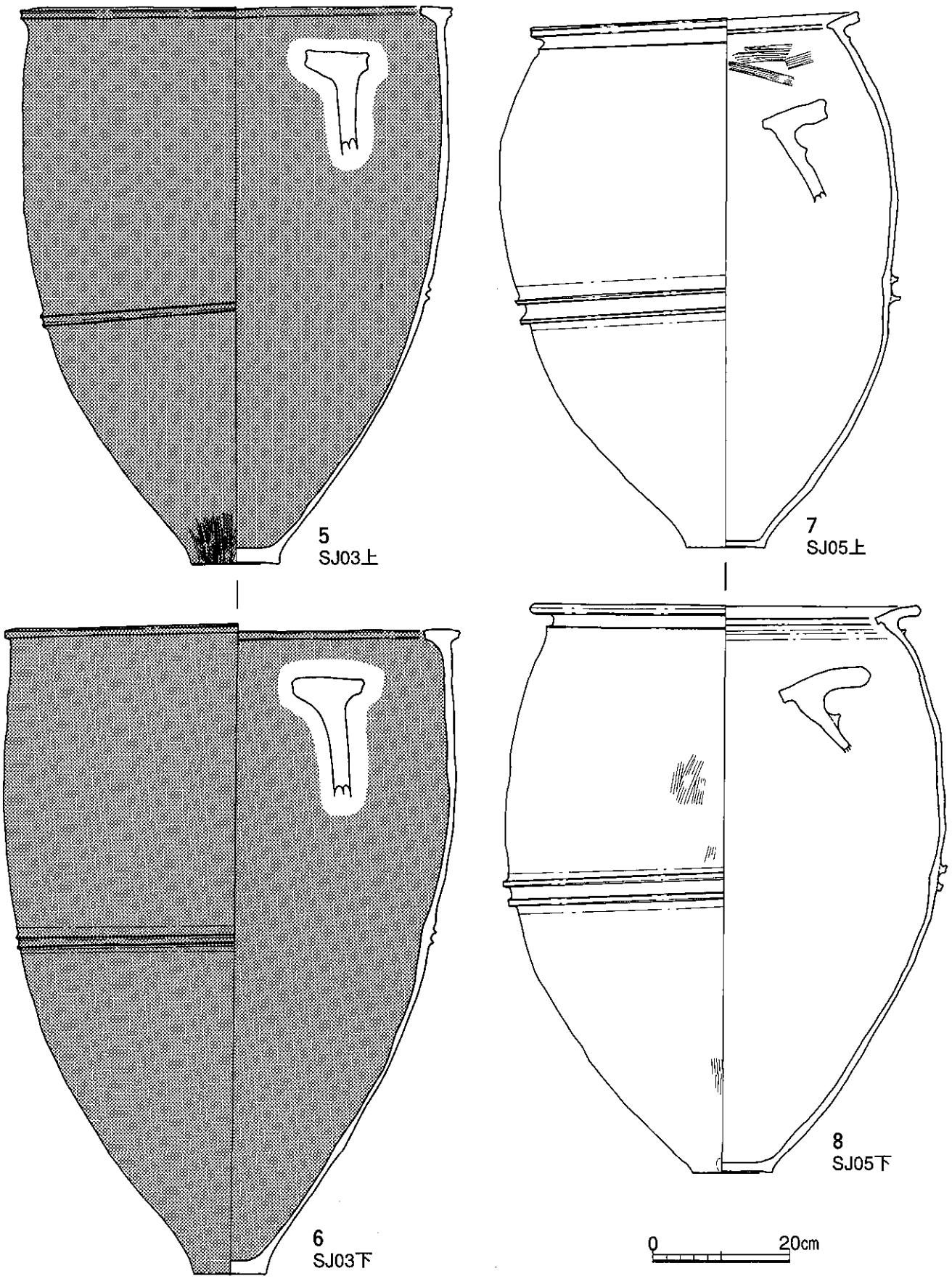



図24　SJ03上甕(5)・下甕(6)、SJ05上甕(7)・下甕(8)実測図 (1/8)

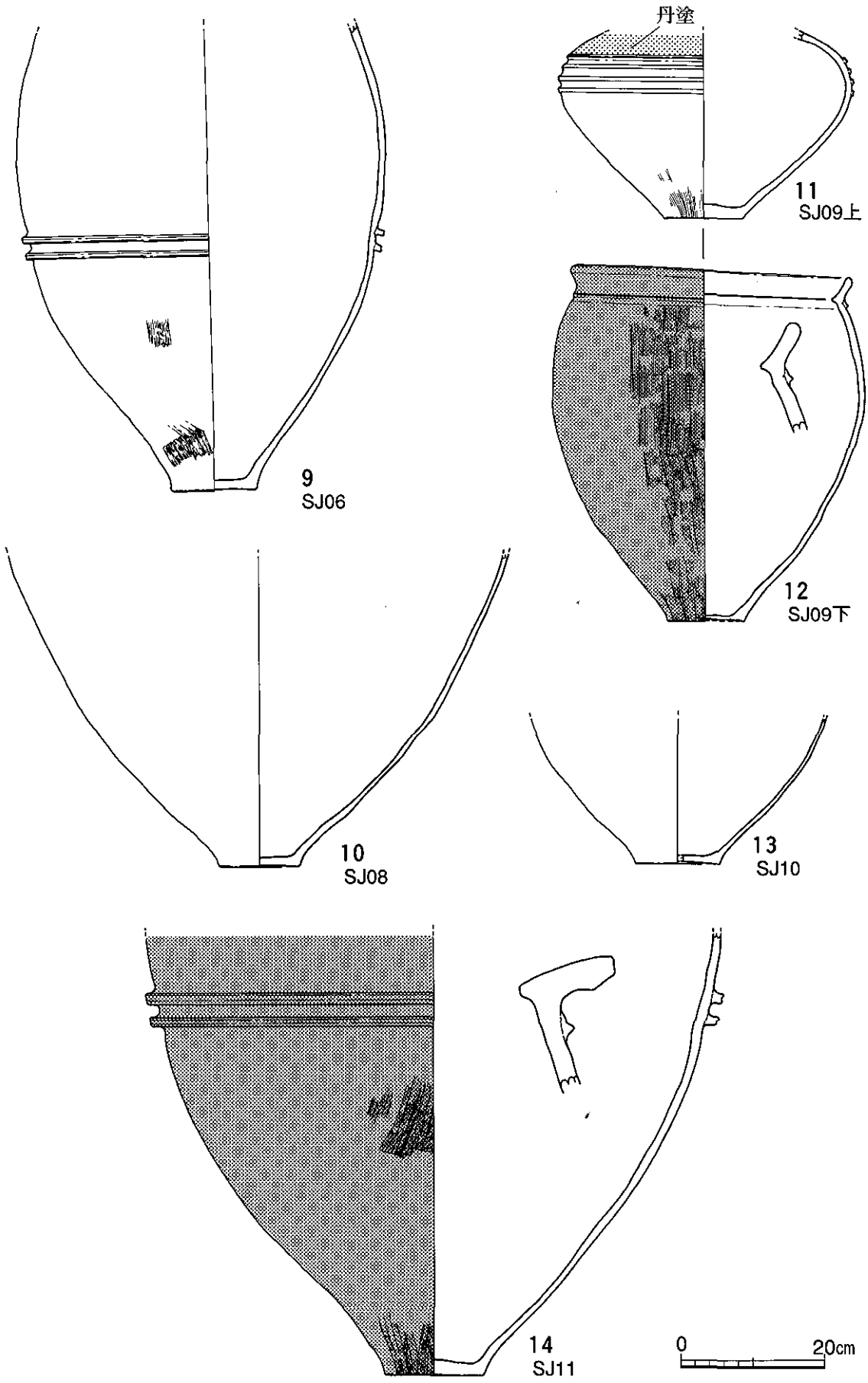



図25　SJ06(9)、SJ08(10)、SJ09上甕(11)・下甕(12)、SJ10(13)、SJ11(14)実測図 (1/8)

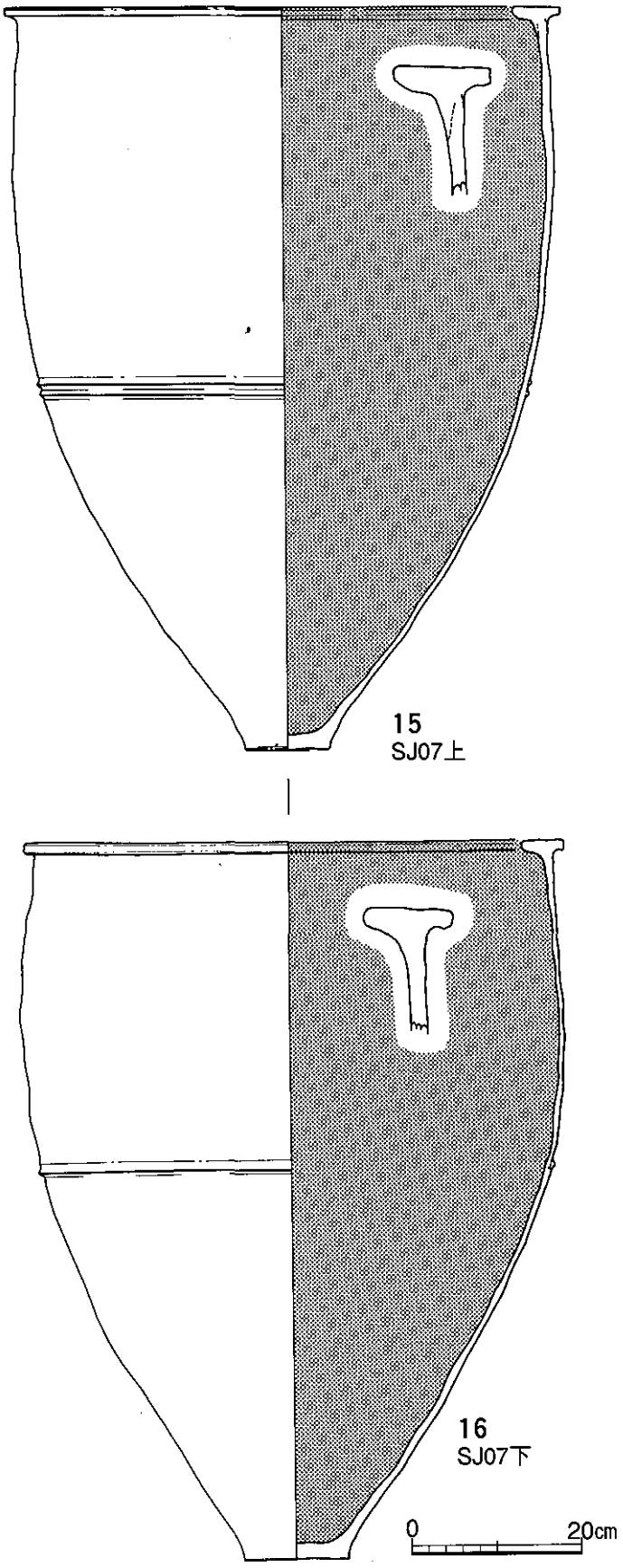



図26　SJ07上甕(15)・下甕(16) 実測図 (1/8)

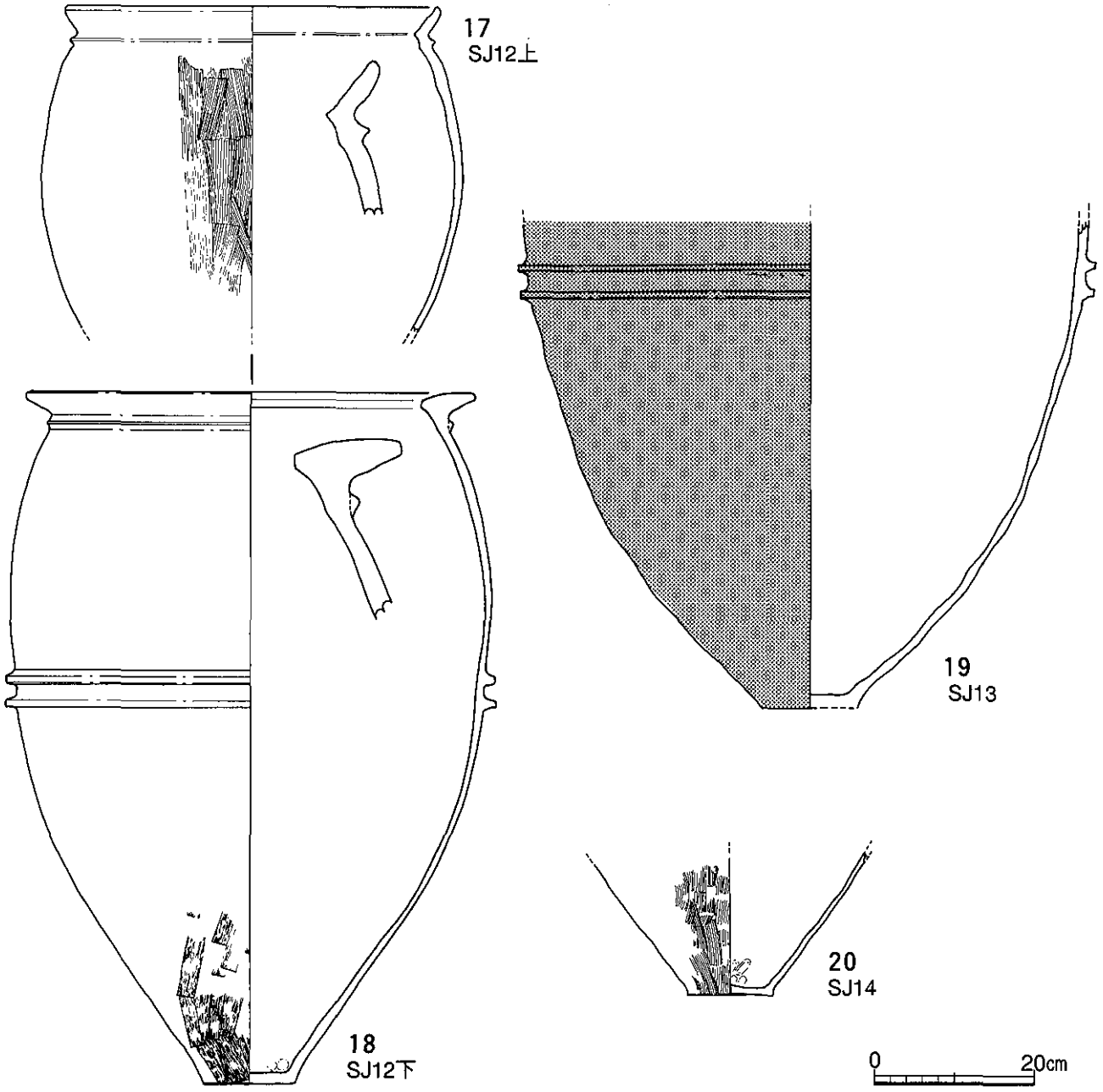



図27　SJ12上甕(17)・下甕(18)、SJ13(19)、SJ14(20)実測図 (1/8)

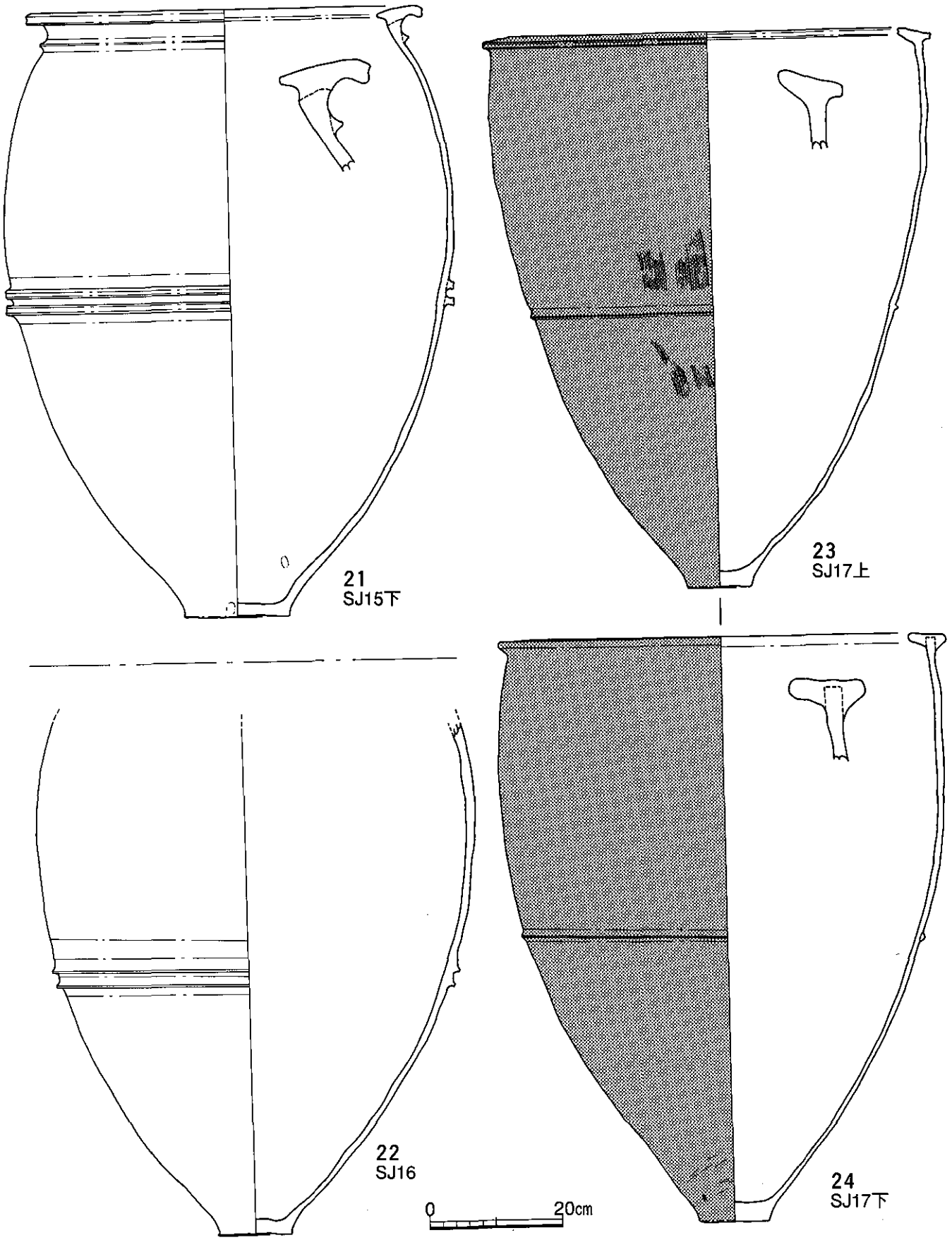



図28　SJ15下甕(21)、SJ16(22)、SJ17上甕(23)・下甕(24)実測図 (1/8)

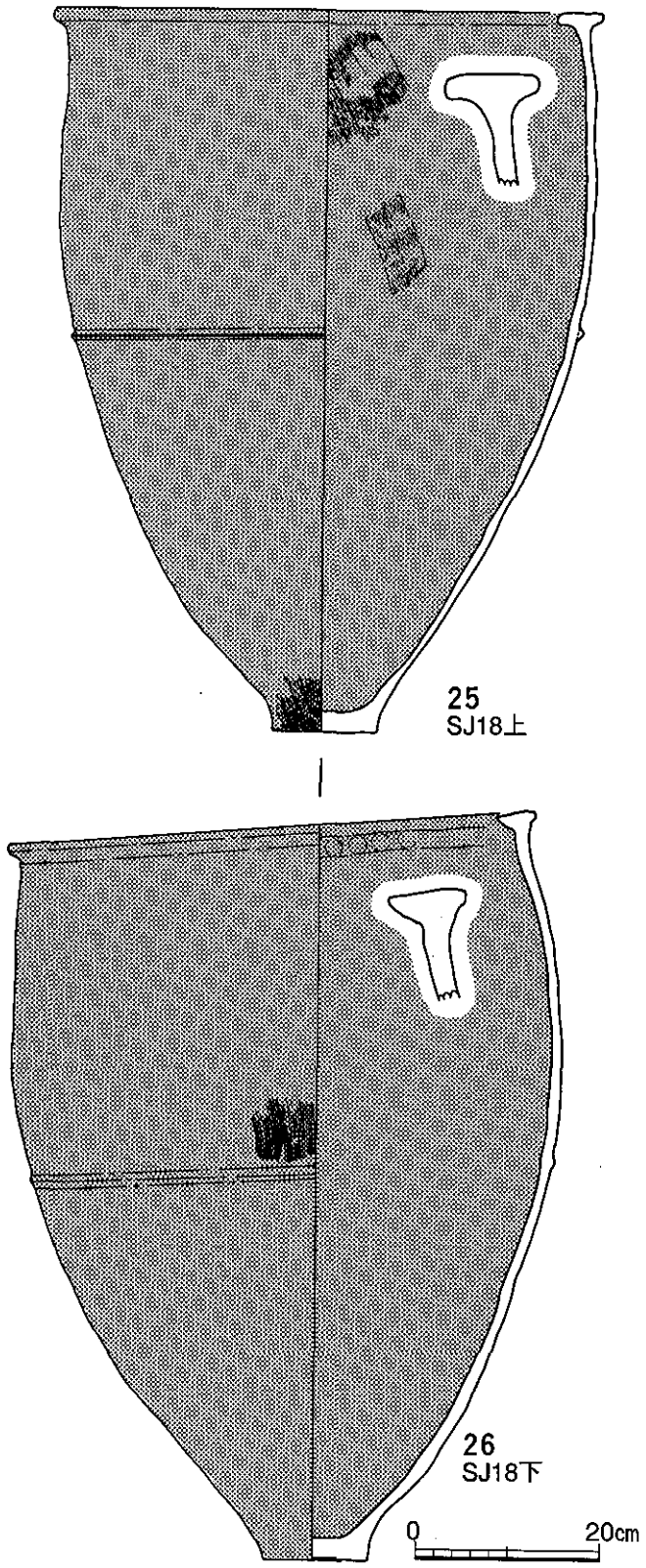



図29　SJ18上甕(25)・下甕(26)実測図（1/8）

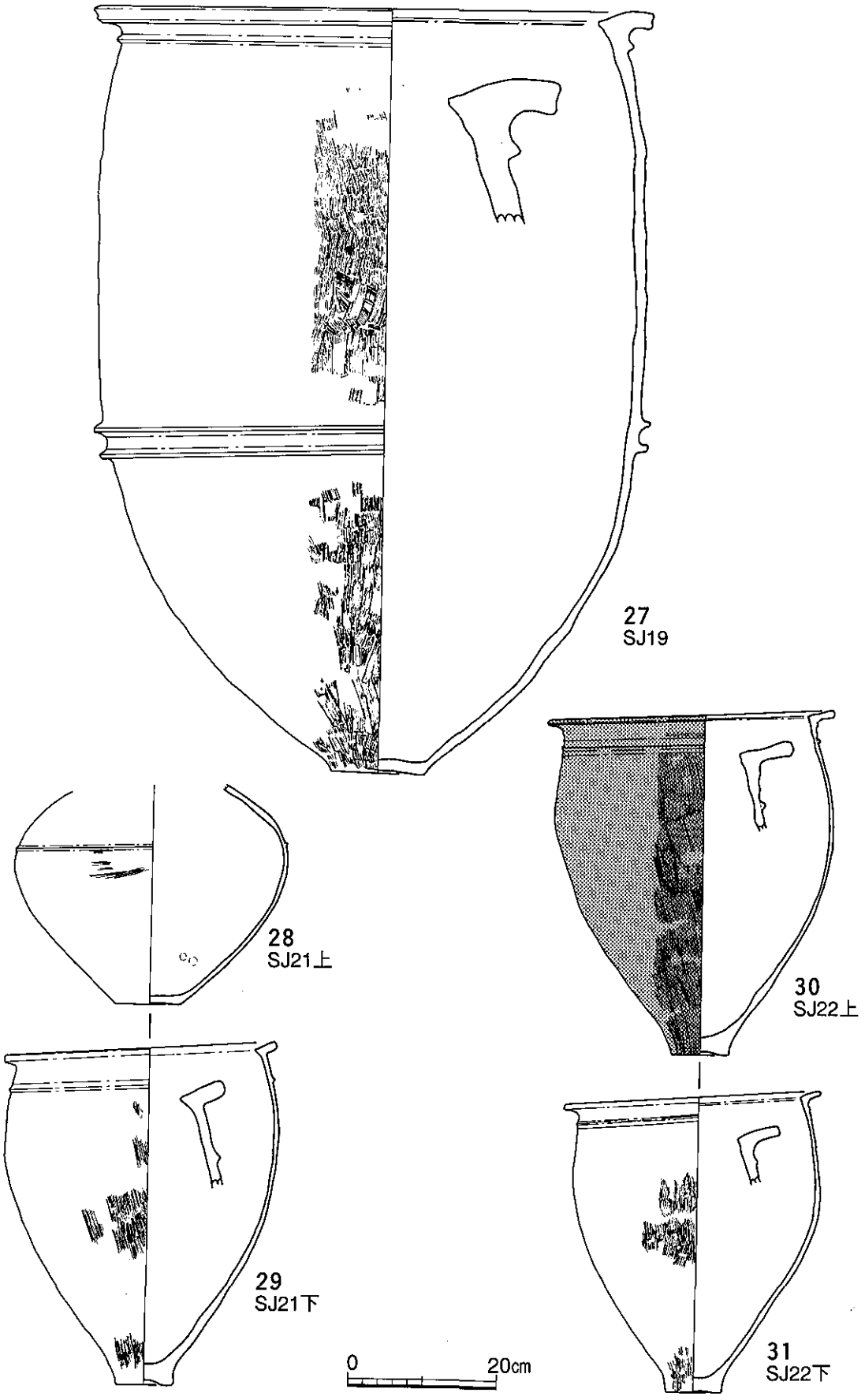



図30　SJ19(27)、SJ21上甕(28)・下甕(29)、SJ22上甕(30)・下甕(31)実測図 (1/8)

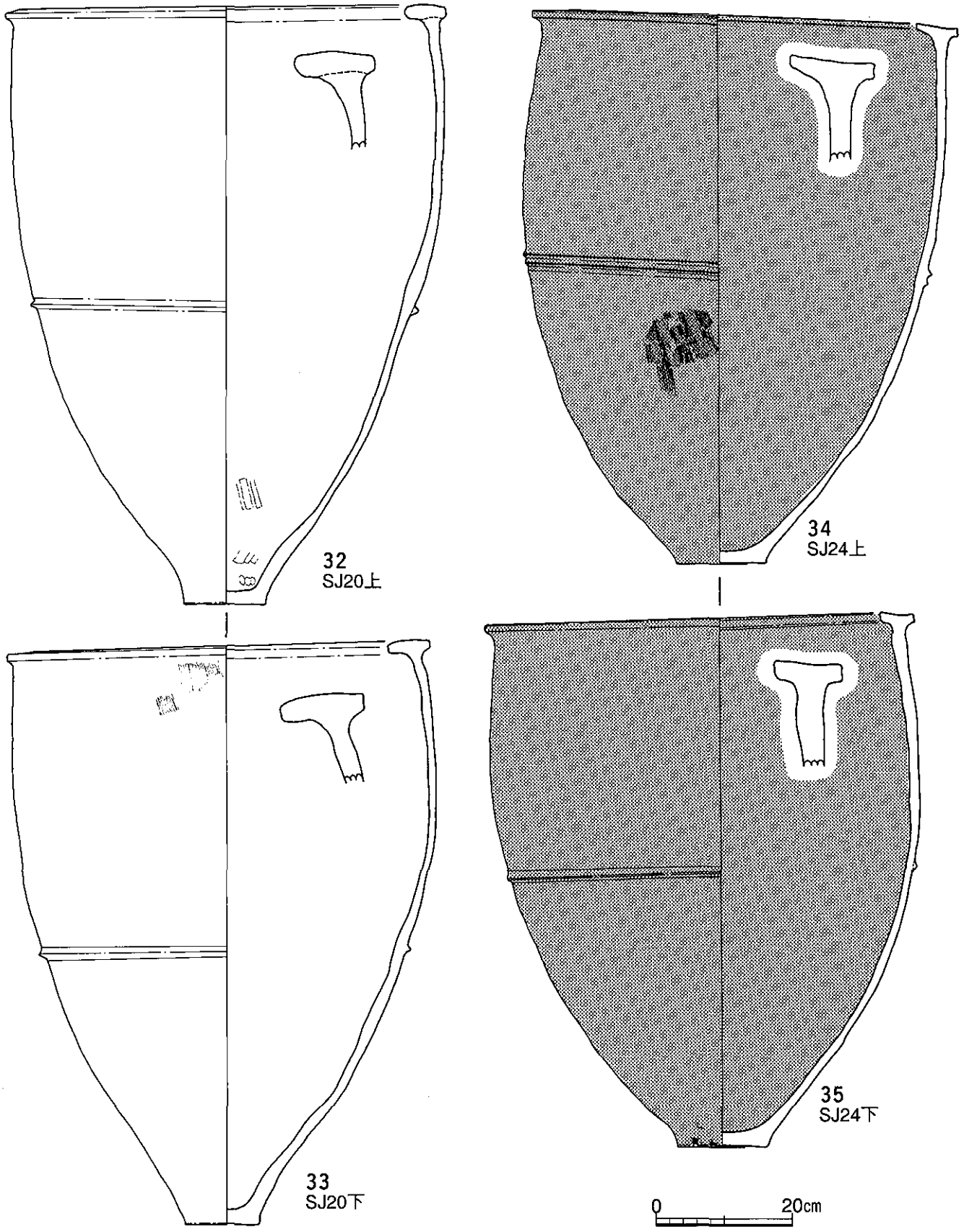



図31　SJ20上甕(32)・下甕(33)、SJ24上甕(34)・下甕(35)実測図 (1/8)

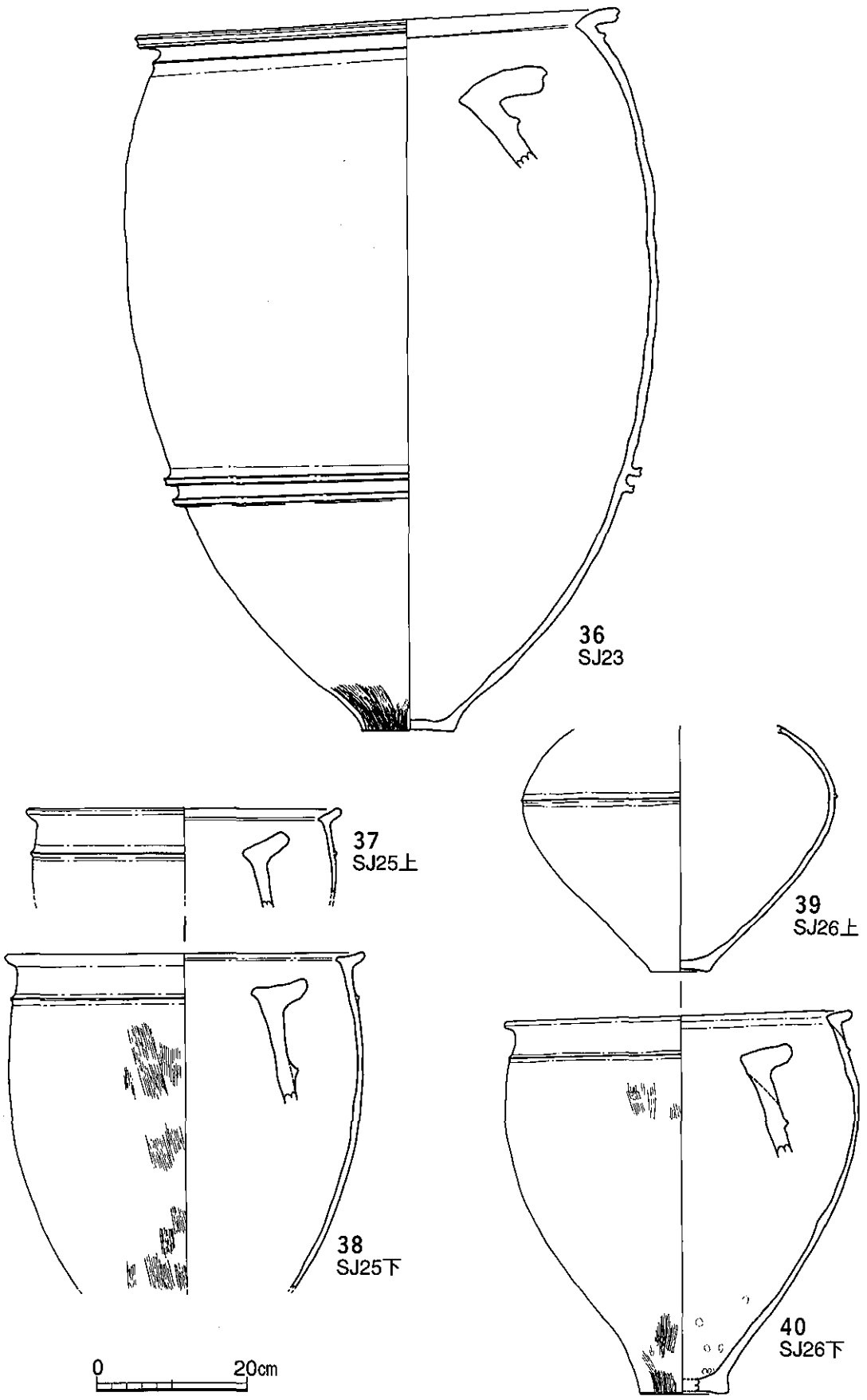



図32　SJ23(36)、SJ25上甕(37)・下甕(38)、SJ26上甕(39)・下甕(40)実測図 (1/8)

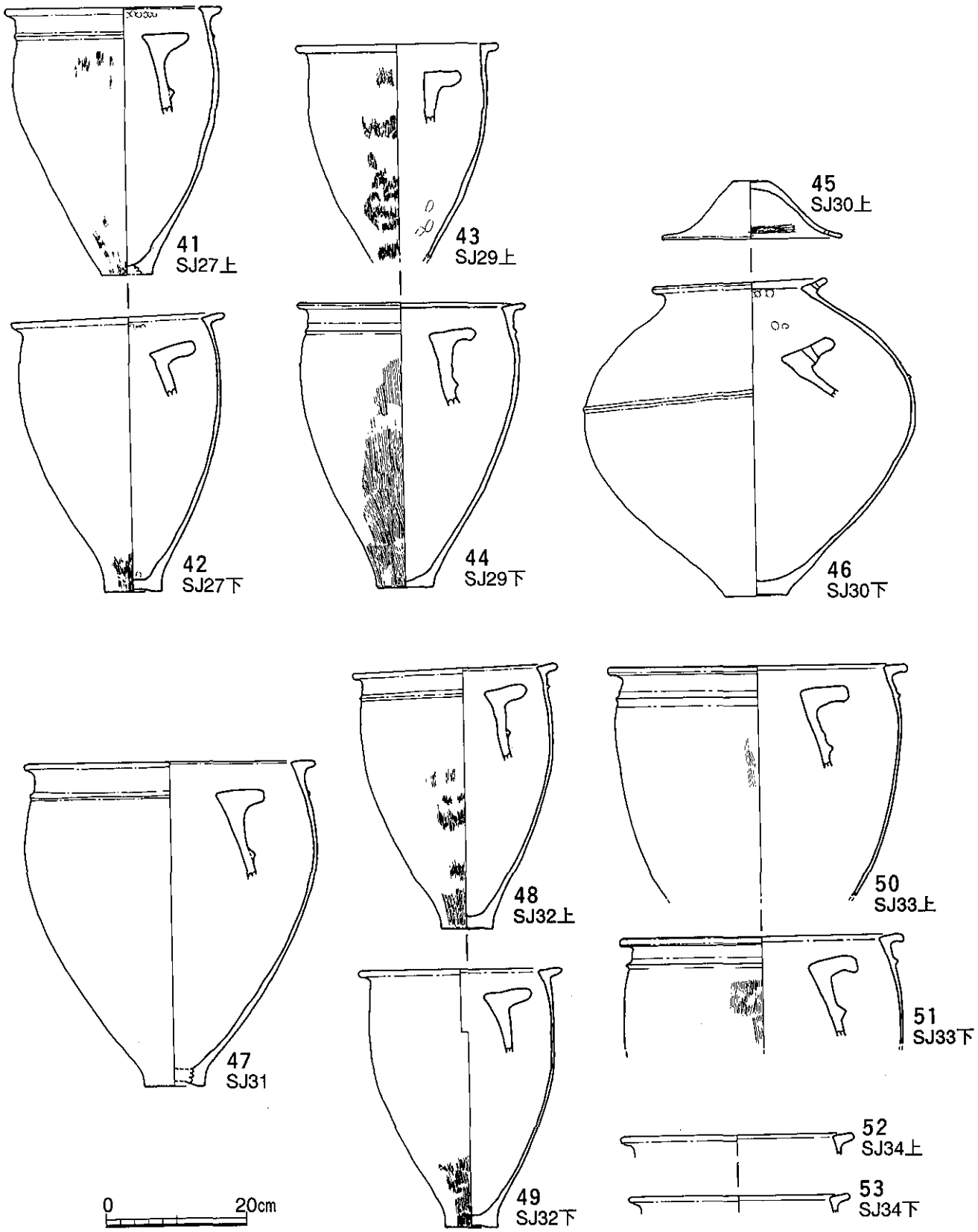



図33　SJ27上甕(41)・下甕(42)、SJ29上甕(43)・下甕(44)、SJ30上甕(45)・下甕(46)、SJ31(47)、SJ32上甕(48)・下甕(49)、SJ33上甕(50)・下甕(51)、SJ34上甕(52)・下甕(53)実測図 (1/8)

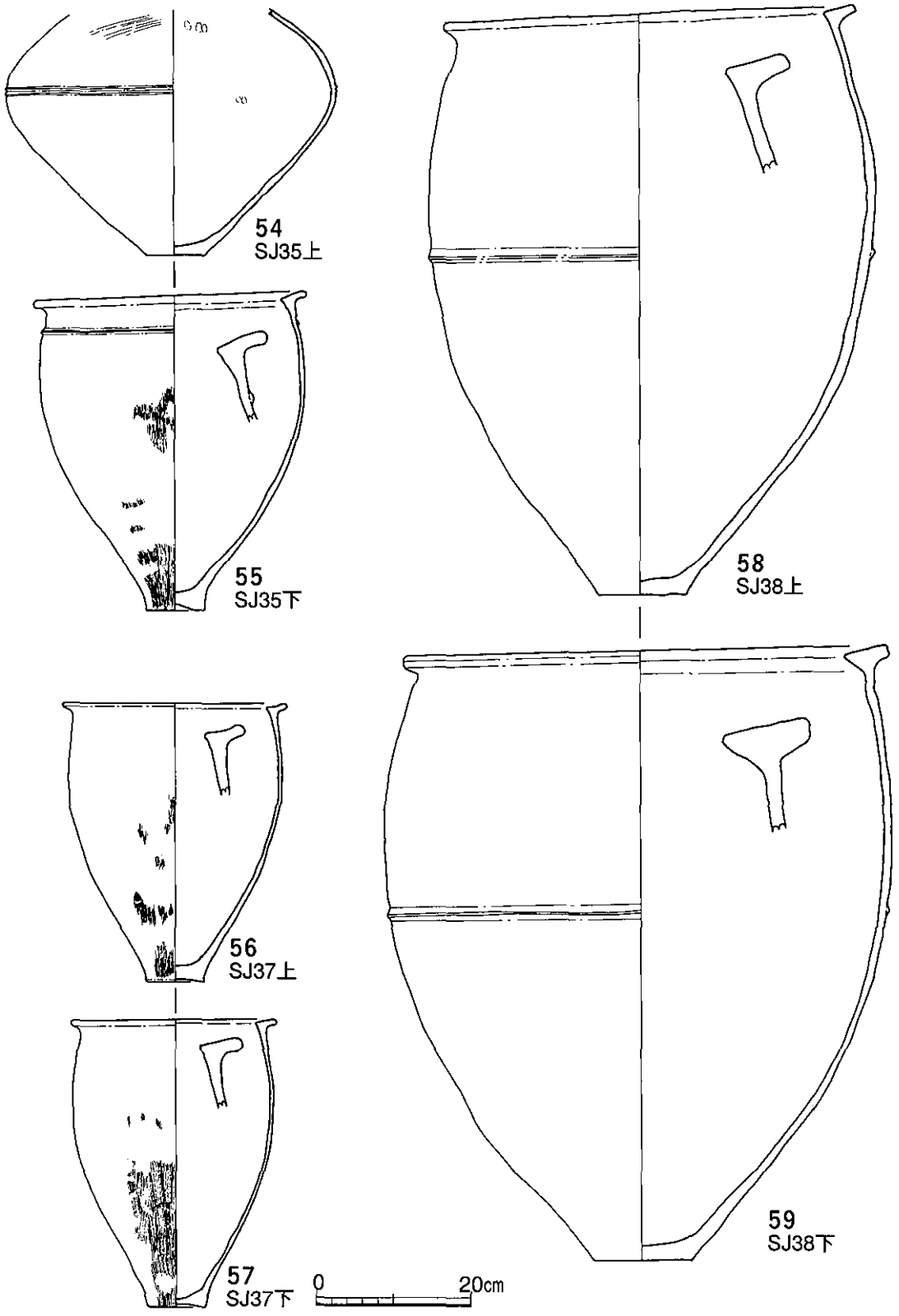



図34　SJ35上甕(54)・下甕(55)、SJ37上甕(56)・下甕(57)
SJ38上甕(58)・下甕(59)実測図 (1/8)

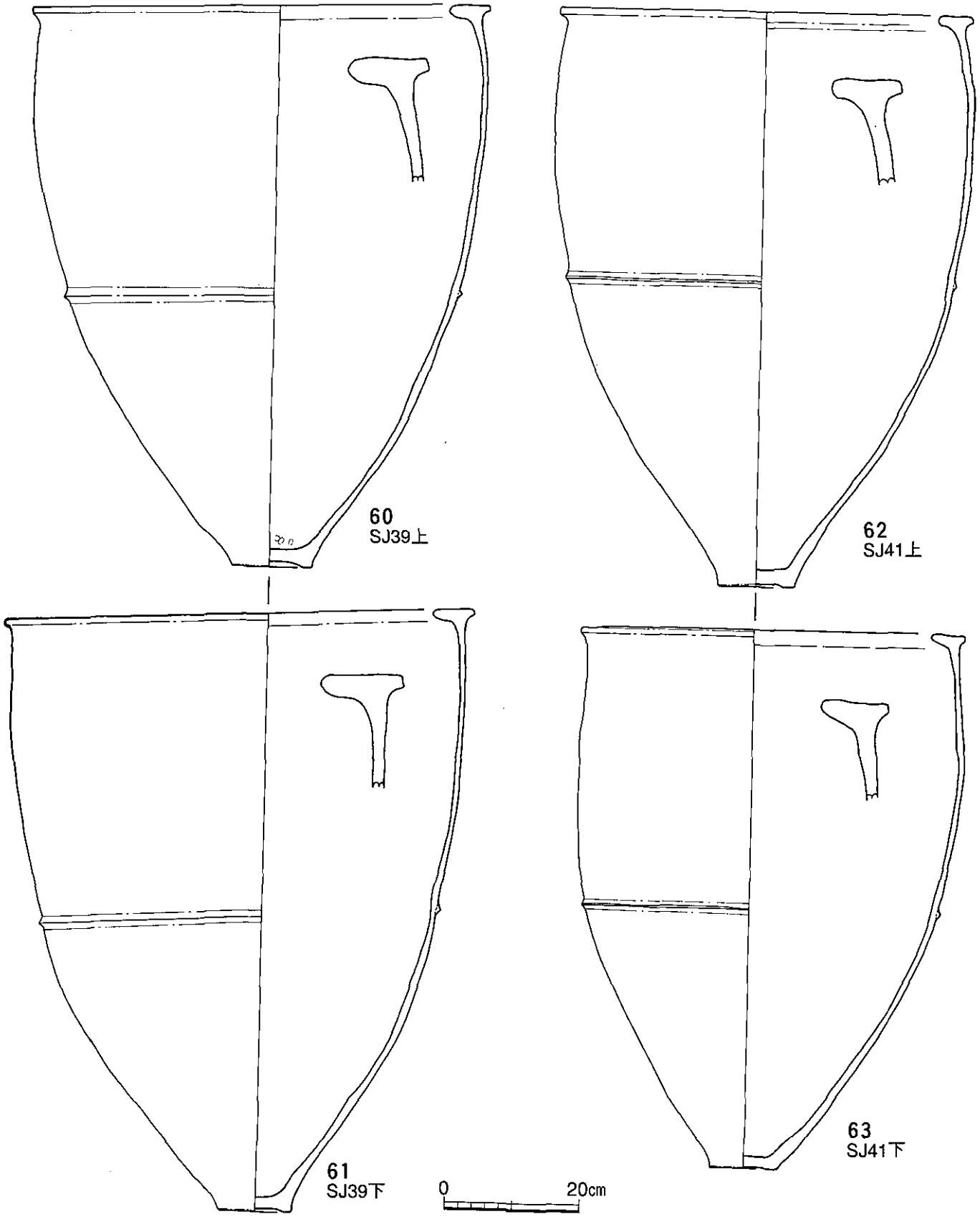



図35　SJ39上甕(60)・下甕(61)、SJ41上甕(62)・下甕(63)実測図 (1/8)

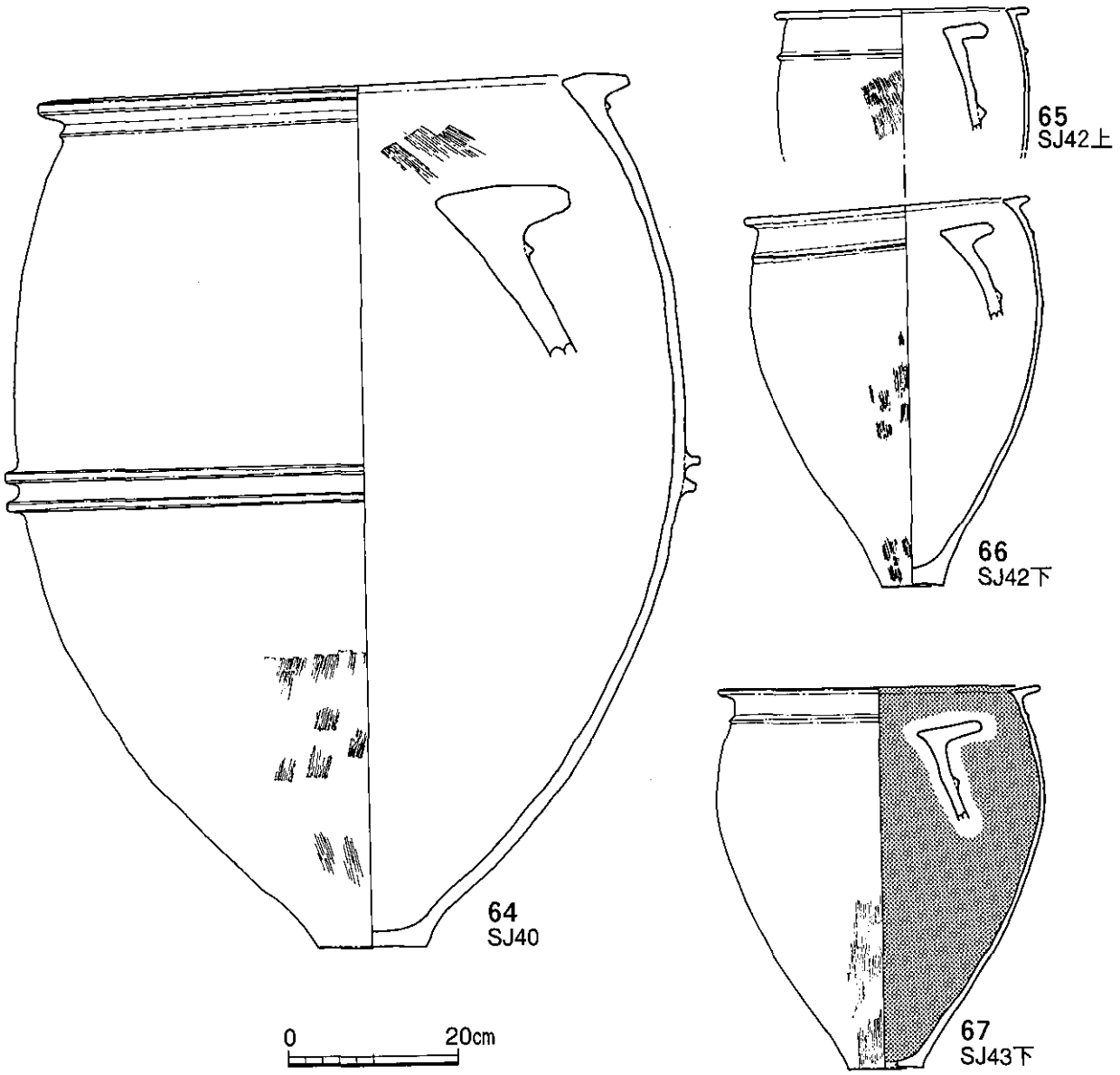



図36　SJ40(64)、SJ42上甕(65)・下甕(66)、SJ43下甕(67)実測図 (1/8)

## (2) 管玉

小型の甕棺墓SJ33から、副葬品として計57個の碧玉製の管玉が出土した（巻頭図版(2)・図版47、図38）。前述したように、後世の耕作によると思われる削平によって、甕棺墓の残存状況は非常に悪く、埋土の中に不規則に散乱しているような状態であった。本来57個を超える数の玉があった可能性も強い。

計測値等は表２で示しているとおりであるが、長さは最大で9.0㎜、最小で4.0㎜、平均すると8.5㎜である。径は３㎜前後である。色調は緑灰色を基本とする。

なお、本遺跡では副葬品の資料はこの管玉のみであった。

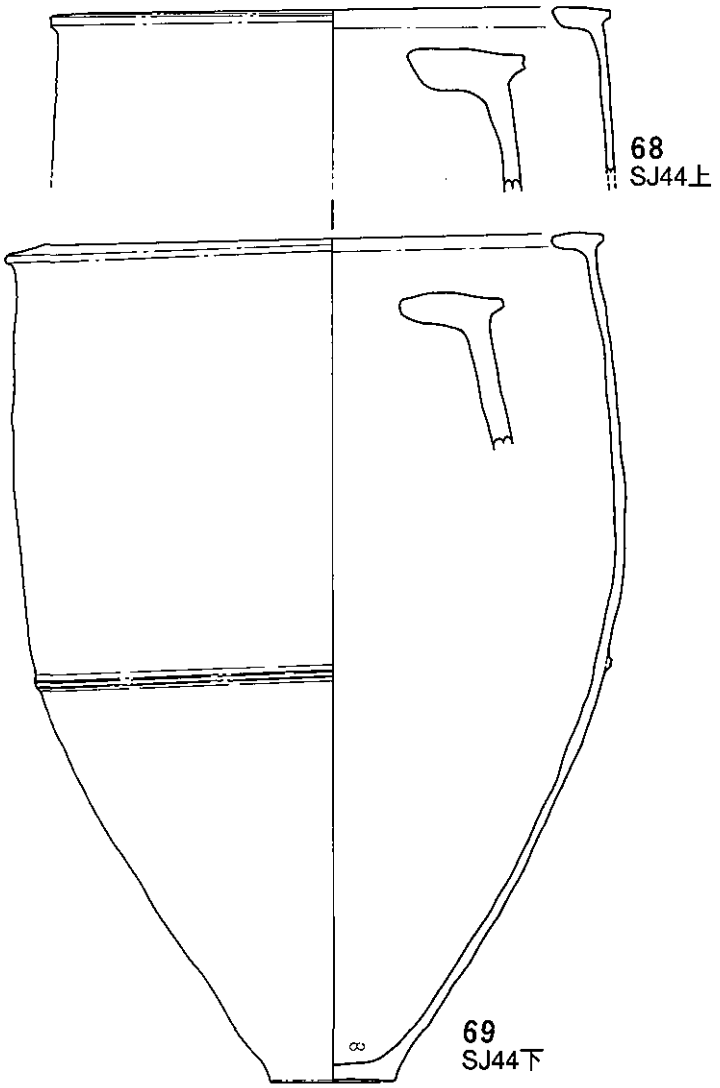



図37　SJ44上甕(68)・下甕(69) 実測図（1/8）

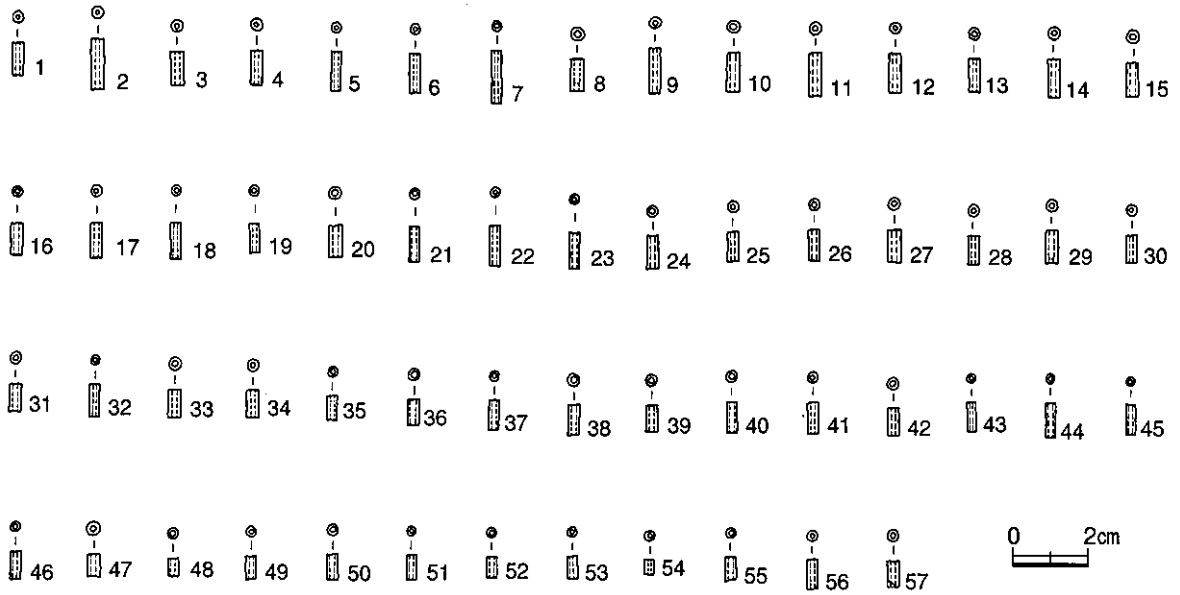



図38　甕棺墓SJ33出土碧玉製管玉実測図（1/2）

表２　甕棺墓SJ33出土碧玉製管玉計測表

| No. | 長さ (mm) | 径 (mm) | 孔径 (mm) | 重量 (mg) | 色 | No. | 長さ (mm) | 径 (mm) | 孔径 (mm) | 重量 (mg) | 色 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 9.0 | 3.0 | 1.0 | 150 | 緑灰色 | 31 | 7.5 | 3.0 | 1.5 | 100 | 緑灰色 |
| 2 | 13.5 | 3.0 | 1.0 | 250 | 明緑灰色 | 32 | 9.0 | 2.75 | 1.25 | 100 | 緑灰色 |
| 3 | 9.0 | 3.5 | 1.5 | 150 | 明緑灰色 | 33 | 7.5 | 3.5 | 1.75 | 160 | 暗緑灰色 |
| 4 | 9.5 | 3.0 | 1.25 | 180 | 暗緑灰色 | 34 | 7.5 | 3.0 | 1.5 | 130 | 緑灰色 |
| 5 | 10.5 | 2.5 | 1.25 | 150 | 緑灰色 | 35 | 6.5 | 3.0 | 1.25 | 70 | 暗緑灰色 |
| 6 | 10.5 | 3.0 | 1.25 | 190 | 緑灰色 | 36 | 7.0 | 3.0 | 1.5 | 110 | 暗緑灰色 |
| 7 | 14.0 | 3.0 | 1.25 | 240 | 緑灰色 | 37 | 8.0 | 3.0 | 1.25 | 100 | 緑灰色 |
| 8 | 8.5 | 3.5 | 1.75 | 150 | 緑灰色 | 38 | 8.0 | 3.0 | 1.5 | 130 | 暗緑灰色 |
| 9 | 12.0 | 3.0 | 1.5 | 200 | 緑灰色 | 39 | 7.0 | 3.0 | 1.25 | 130 | 緑灰色 |
| 10 | 10.5 | 3.0 | 1.75 | 200 | 緑灰色 | 40 | 8.0 | 3.0 | 1.5 | 110 | 緑灰色 |
| 11 | 11.5 | 3.25 | 1.25 | 230 | 暗緑灰色 | 41 | 8.5 | 3.0 | 1.0 | 130 | 緑灰色 |
| 12 | 10.5 | 3.0 | 1.25 | 200 | 緑灰色 | 42 | 7.5 | 3.0 | 1.5 | 120 | 緑灰色 |
| 13 | 9.0 | 3.0 | 1.5 | 200 | 緑灰色 | 43 | 8.0 | 2.5 | 1.25 | 70 | 暗緑灰色 |
| 14 | 10.5 | 3.25 | 1.5 | 210 | 緑灰色 | 44 | 9.0 | 2.5 | 1.25 | 100 | 明緑灰色 |
| 15 | 9.0 | 3.5 | 1.75 | 160 | 暗緑灰色 | 45 | 8.0 | 2.25 | 1.0 | 70 | 緑灰色 |
| 16 | 8.5 | 3.0 | 1.25 | 160 | 緑灰色 | 46 | 8.0 | 3.5 | 1.5 | 100 | 緑灰色 |
| 17 | 9.0 | 3.0 | 1.0 | 180 | 暗緑灰色 | 47 | 6.0 | 3.5 | 1.5 | 150 | 暗緑灰色 |
| 18 | 8.5 | 3.0 | 1.25 | 140 | 暗緑灰色 | 48 | 5.0 | 3.0 | 1.25 | 80 | 暗緑灰色 |
| 19 | 8.0 | 3.0 | 1.0 | 120 | 緑灰色 | 49 | 6.0 | 3.0 | 1.0 | 70 | 緑灰色 |
| 20 | 8.5 | 3.0 | 1.5 | 150 | 明緑灰色 | 50 | 7.0 | 3.0 | 1.25 | 100 | 緑灰色 |
| 21 | 9.5 | 3.0 | 1.5 | 130 | 明緑灰色 | 51 | 7.0 | 2.5 | 1.0 | 70 | 緑灰色 |
| 22 | 11.0 | 2.5 | 1.0 | 150 | 緑灰色 | 52 | 6.0 | 2.75 | 1.5 | 70 | 暗緑灰色 |
| 23 | 10.0 | 2.5 | 1.25 | 80 | 緑灰色 | 53 | 6.0 | 2.5 | 1.0 | 60 | 緑灰色 |
| 24 | 9.0 | 3.0 | 1.5 | 130 | 暗緑灰色 | 54 | 4.0 | 2.75 | 1.0 | 50 | 明緑灰色 |
| 25 | 8.0 | 3.0 | 1.25 | 110 | 緑灰色 | 55 | 7.0 | 3.0 | 1.5 | 90 | 緑灰色 |
| 26 | 8.0 | 3.0 | 1.5 | 100 | 緑灰色 | 56 | 8.0 | 2.75 | 1.5 | 70 | 緑灰色 |
| 27 | 9.0 | 3.5 | 1.5 | 150 | 明緑灰色 | 57 | 7.0 | 3.0 | 1.5 | 100 | 緑灰色 |
| 28 | 8.0 | 3.0 | 1.25 | 100 | 濃緑灰色 | 平均 | 8.5 | 3.0 | 1.3 | 131 | |
| 29 | 9.0 | 3.0 | 1.25 | 150 | 緑灰色 | | | | | | |
| 30 | 7.5 | 3.0 | 1.0 | 100 | 明緑灰色 | | | | | | |

# Ⅳ まとめ

## 1 遺構の時期

検出した弥生時代の墳墓は、木棺墓、土坑墓、石棺墓、甕棺墓と、弥生時代の北九州の墓制がすべてそろっている。各遺構の概略的な配置を図39に示した。この図には墳墓に関わると考えられる祭祀遺構を加えている。各遺構の時期と特徴等について以下記述する。

木棺墓と土坑墓の区別は明瞭でないものもあり、また、土坑墓の中には木棺墓の構造を簡略化したものも含まれている。したがって発掘調査において同じSPという略記号を用いた。明確に木棺墓と判断できるものはSP01・SP02・SP11の3基である。土坑墓は（積極的に木棺墓と判断できないものも含めて）SP03～10の8基である。いずれからも時期を明らかにできる遺物は出土していない。SP01に甕棺墓SJ20との切り合い関係があったのだが、前後関係を明らかにできるだけの根拠を確認できなかった。

後で述べるが、森園遺跡の甕棺墓は中期中葉から営まれはじめ、中期の終わりには終焉している。木棺墓と土坑墓は甕棺墓を直接破壊することなく、あるいは甕棺墓から破壊されることもなく（上記SP01の例を除き）甕棺墓群の周囲につくられている。SP06～08の3基は列埋葬の形態をとっており、その主軸は大型甕棺墓SJ20・38・39・41などの主軸方向とも等しいが、木棺墓と土坑墓は一般的には甕棺墓よりも古く、この地域では前期でもかなり古い段階の墓制である。上記の甕棺墓の1段階古い時期（中期前葉）と考えるのは、すでに甕棺墓が盛行する時期に達しており不自然である。さらに古い時期（前期）と考えても、すでに周囲では中・寺尾遺跡や御陵前ノ椽（えん）遺跡などで甕棺墓がつくられており、この仮定も結論を下すのは難しい。一般論からみると、中期の前葉でも古い段階のものの可能性が強いが、甕棺墓が消滅してから後の後期のものであることも考えられる。そうなると石棺墓とほぼ並行する時期となる。

なお木棺墓SP01は先述しているように、木棺の立て方、木棺外の裏込めの状況、木棺を覆う多量の粘土の存在など類例を見ないものであった。

石棺墓は3基検出したが、これも時期のわかる遺物がなく判断に苦慮するところであるが、甕棺墓を破壊してつくられていることから後期の所産と考えてよいであろう。

甕棺墓は大型棺（成人棺）26基、小型棺（小児棺）19基の計45基を検出した。小型棺の占める割合は42%である。大型棺と小型棺の位置関係は小型棺が調査区の東側に偏って検出されているように、墓域がおおむね区分されていたことを示している。

大型棺はA・B・Cの3類に区分して整理した。その特徴は前述したとおりである。大型甕棺はこれまで多くの研究者によって、型式区分と時期区分・時期変遷とが試みられてきた。大型棺の型式を細分化・パターン化するという試みもあるが、細かい型式区分そのものが目的化したようなものもある。特に細かい型式区分を即時期区分として取り扱おうとする傾向は、各型式区分・編年を各遺跡で援用、一般化しようとする際に無理を生じてしまう原因となっている。

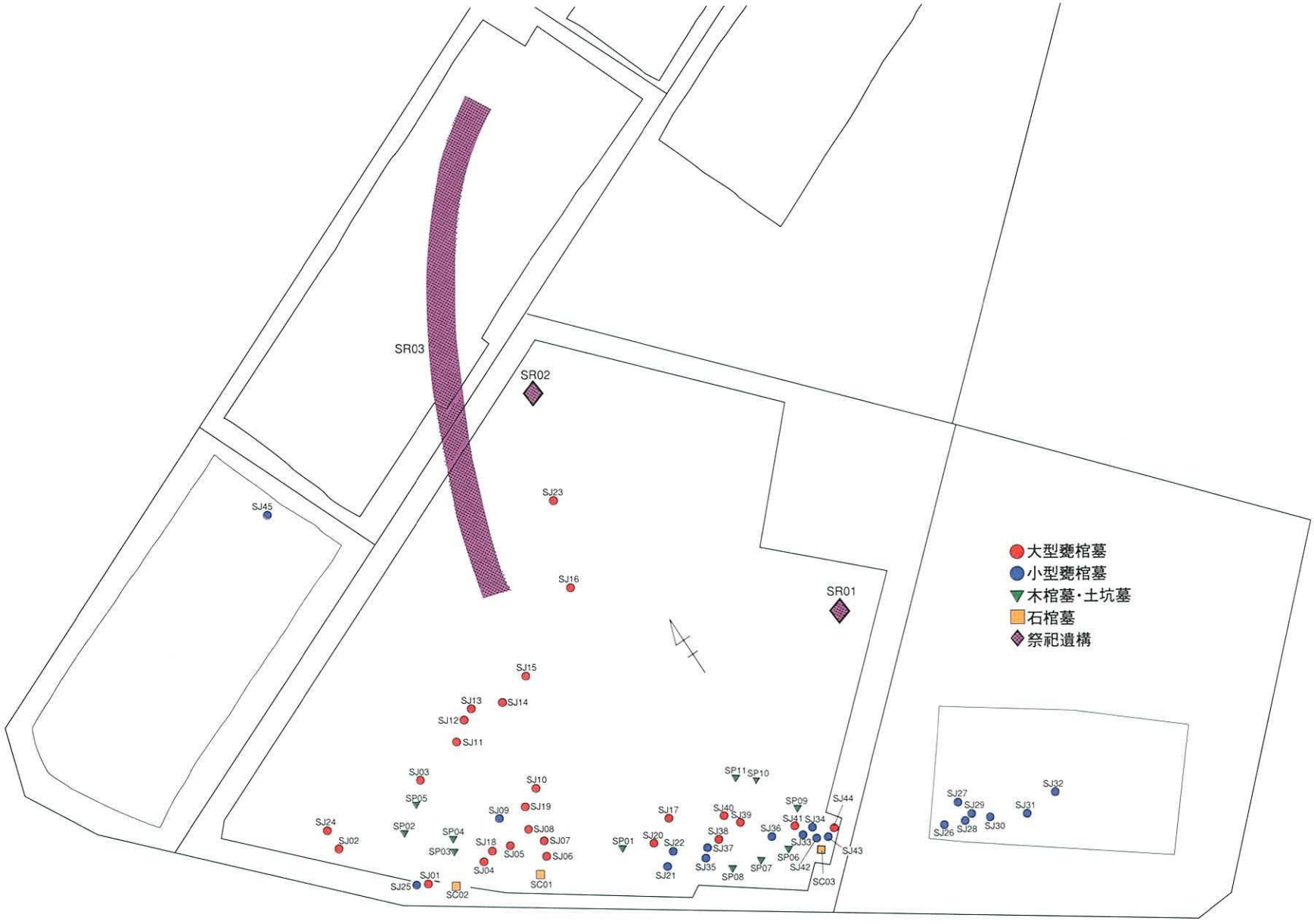
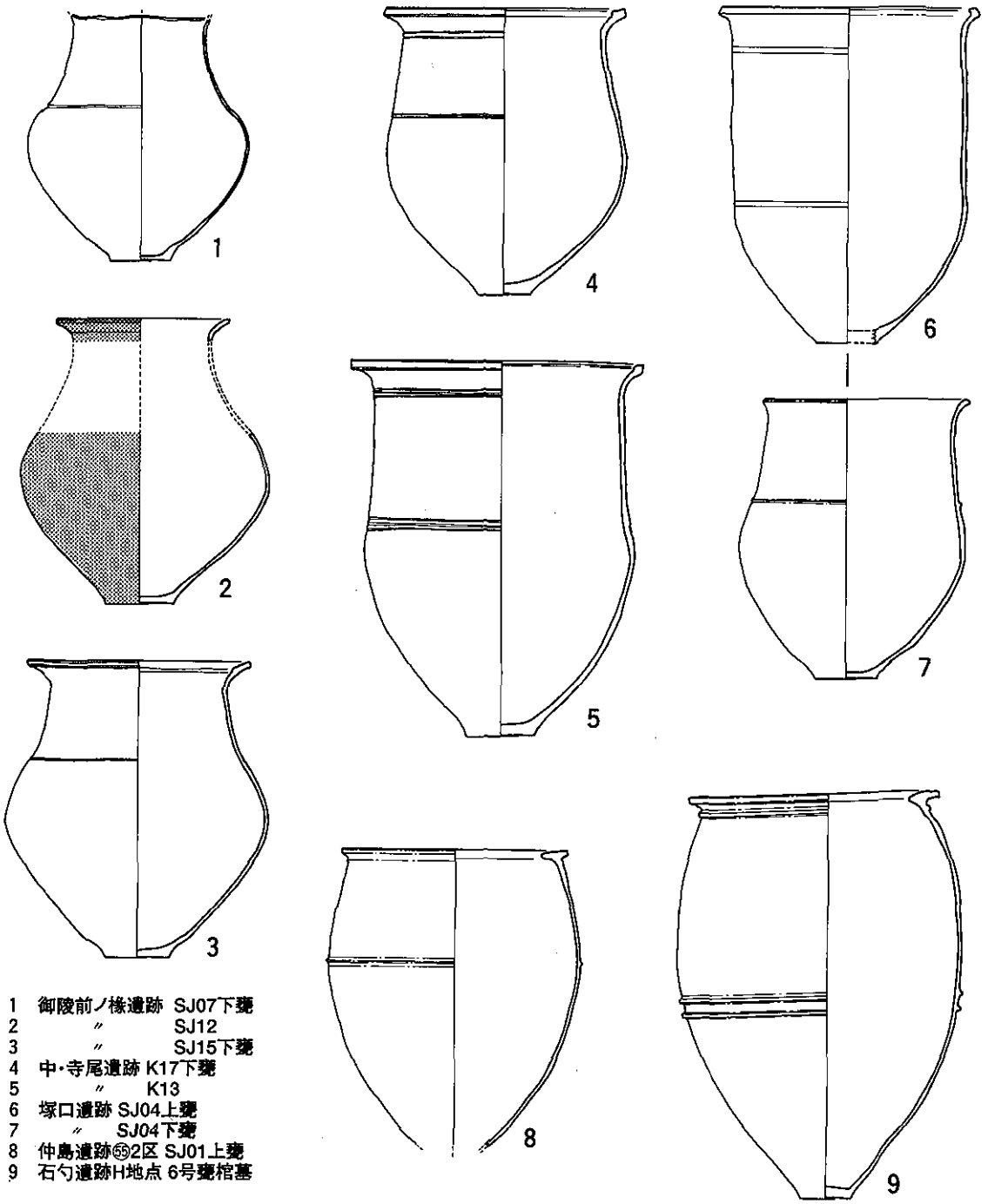



図39　検出遺構概略図（弥生時代の墳墓と祭祀遺構のみ）（1/400）

大雑把といわれるかもしれないが、どの遺跡でも通用する型式区分と時期区分を用いようとすれば、前期の中頃から中期の大型甕棺の時期区分は従来から使われてきた「伯玄」、「金海」、「汲田」、「須玖」、「立岩」の型式を基本にすえて考えることで十分と考えている。なお、発掘調査の事実から「城ノ越」という型式は、やはり型式としては存在するものの、単独では広い範囲を覆うだけの一時期を画せないものと思う。私は、伯玄式…前期中頃、金海式…前期後葉～末、汲田式…中期前葉、須玖式…中期中葉、立岩式…中期後葉～末、という年代感で齟齬をきたすことはまずないと思っているし、後は各型式内での型式学的前後関係を考えれば間違いはないであろう。




1 御陵前ノ椽遺跡 SJ07下甕
2 〃 SJ12
3 〃 SJ15下甕
4 中・寺尾遺跡 K17下甕
5 〃 K13
6 塚口遺跡 SJ04上甕
7 〃 SJ04下甕
8 仲島遺跡㊾2区 SJ01上甕
9 石勺遺跡H地点 6号甕棺墓

図40　大野城市域の甕棺(1/16)

本報告書で使ったA・B・Cの分類は、この考えが基になっているものである。すなわち、A類が須玖式の古い段階、B類が須玖式から立岩式のやや古い段階、C類が須玖式の新しい段階から立岩式となる。

森園遺跡の甕棺墓は中期中葉のやや古い段階から始まり、後期まで続かないうちに終焉している。この時期の集落は今回の墳墓群よりも東側、つまり変電所の構内Ⅰ地点で調査した集落跡（註4）が時期的に一致する。断定してしまうのは危険であるが、集落は変電所構内、墳墓域は今回の報告箇所と認識できる可能性は強いであろう。なお、小型棺の時期比定は難しいが、中期後半として差し支えはなかろう。

甕棺墓の副葬品としては小型棺SJ33から出土した57個の碧玉製管玉がある。大型棺に副葬品がない状況を考えると大変興味深い。時期は大型棺の分類でいくとC類の並行期、すなわち中期の後葉である。当時の首長権が世襲であったかどうかはともかくとして、将来を期待されていた者かもしれないが、青銅製の武器、鏡などとは異なり、卓越した階層が持つ副葬品ではない。

今次の調査区では、祭祀土器を廃棄したいわゆる祭祀遺構が3基確認されていることも重要である。土坑SR01・02と溝SR03である。整理作業を進めておらず今回の報告に間に合わせられなかったが、大型甕棺墓C類の時期、中期後葉の甕棺墓に伴う祭祀遺構である。溝状のSR03からは、周辺を含めてもかなり稀ともいえる大量の祭祀用土器が出土した。本文中で内容を報告できなかったが、器種構成も壺と甕が主体であり、この地域の祭祀土器の象徴ともいえる高杯と筒型器台を含まないことは注意する必要があると考えている。

## 2　大野城市域の大型甕棺墓の変遷について（図40）

大野城市域だけに限って、大型の甕棺墓の移り変わりをごく簡単に整理しておきたい。

最も早く現れるのは御陵前ノ椽（えん）遺跡である。図40の1と2は板付Ⅰ式期に並行し、3は板付Ⅱ式期に並行する。前期の中頃から後葉である。ここでは甕棺墓の棺内・棺外に小壺を副葬しているものがある。

次に出現するのは中・寺尾遺跡で、ここでは土坑墓が甕棺墓に先行して営まれるが、連続して前期末の甕棺（図40の4と5）が多数確認されている。

未報告の資料だが塚口遺跡には、前期と考えられる木棺墓に続き前期末～中期初頭の甕棺墓（図40の6と7）がある。7の下甕は胴部に凸帯を貼りつけ、前期的な甕棺と中期的な甕棺の過渡的形態を示している。

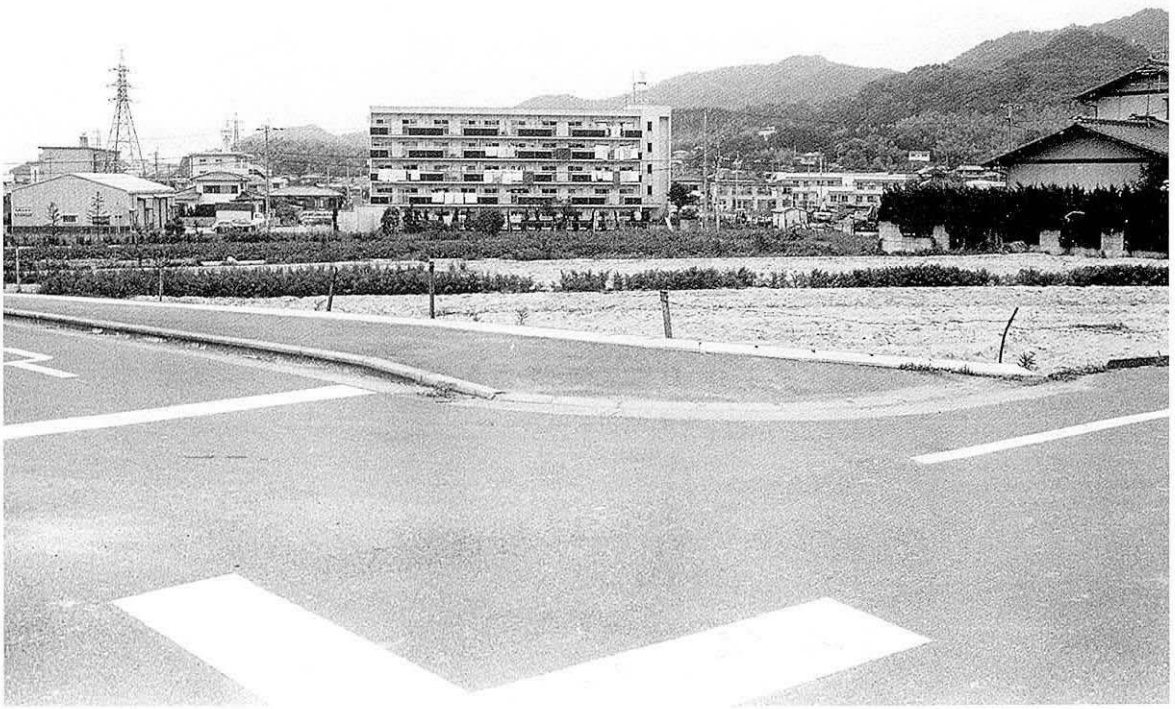
中期の甕棺墓は、未報告だが仲島遺跡（㊺2区）の中期中葉の甕棺墓（図40の8）から始まる。

市街地の中にある石勺遺跡からは、中期前葉から中期末までの甕棺墓が確認されているが、主体となる時期は中期末のもの（図40の9）である。

中期中葉のやや古い段階から中期末までを、今回報告の森園遺跡の甕棺墓が占めている。

註1　大野城市教育委員会『御陵前ノ椽遺跡』（大野城市文化財調査報告書第48集、1997年）
2　大野城市教育委員会『中・寺尾遺跡』（大野城市文化財調査報告書第1集、1977年）
3　大野城市教育委員会『石勺遺跡Ⅰ』（大野城市文化財調査報告書第47集、1996年）
4　大野城市教育委員会『森園遺跡Ⅰ』（大野城市文化財調査報告書第26集、1988年）

# 図　　版



（1） 発掘調査前の状況①（A区の隅、南側から）全面が畑であった



（2） 発掘調査前の状況②（西側から）奥は九州電力変電所

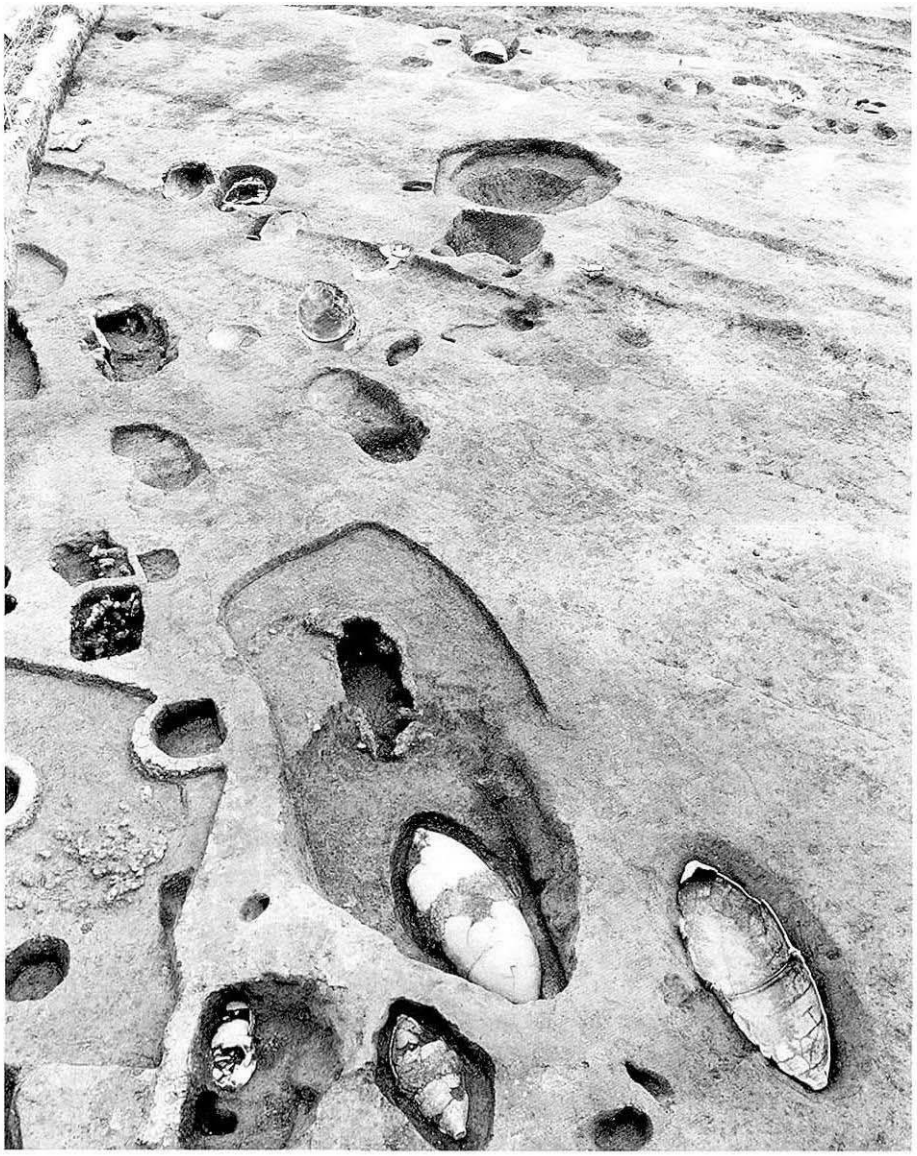
図版 2



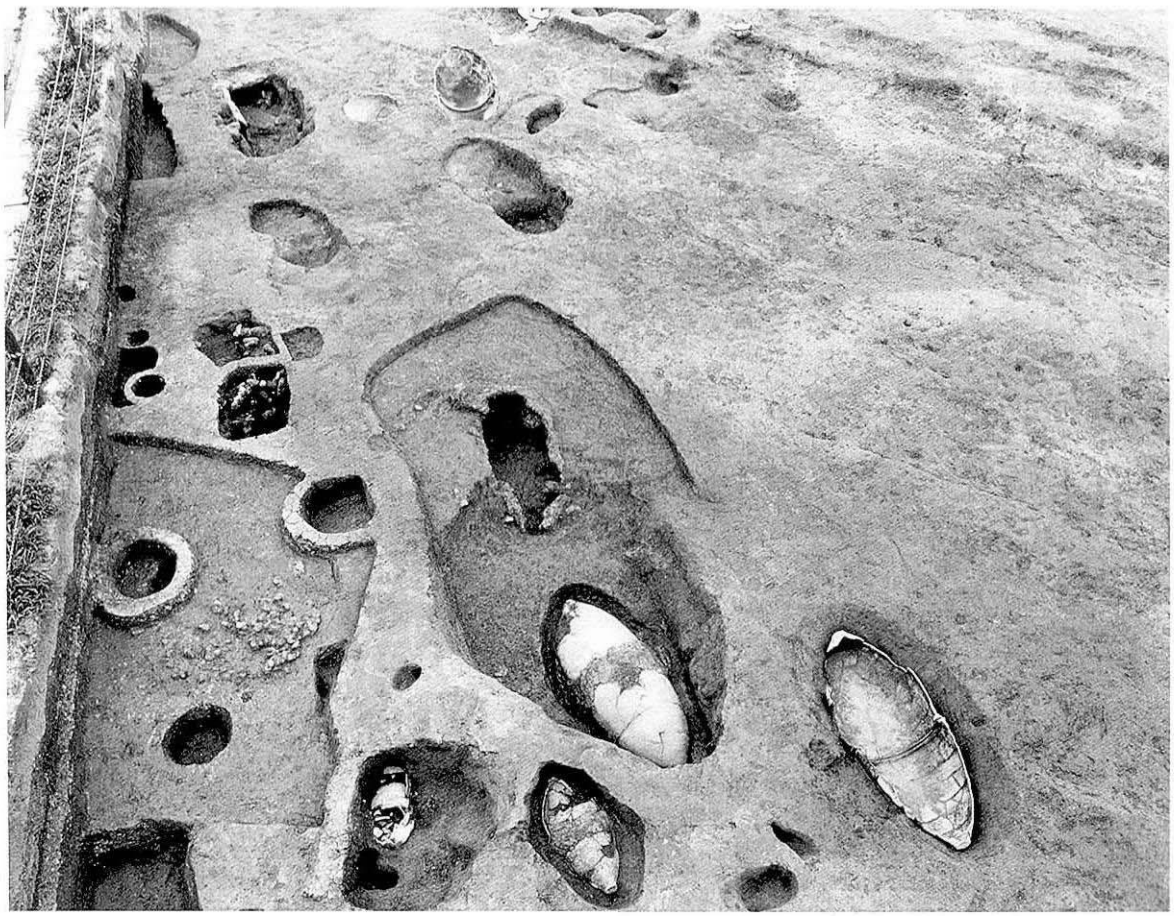
（1） 調査地遠景（E区の隅、北東側から）A・B区は調査が終了し建物が建っている



（2） A区墓地群（南西側から）



（1） B区西側墓地群①（東南側から）



（2） B区西側墓地群②（東南側から）

図版 4



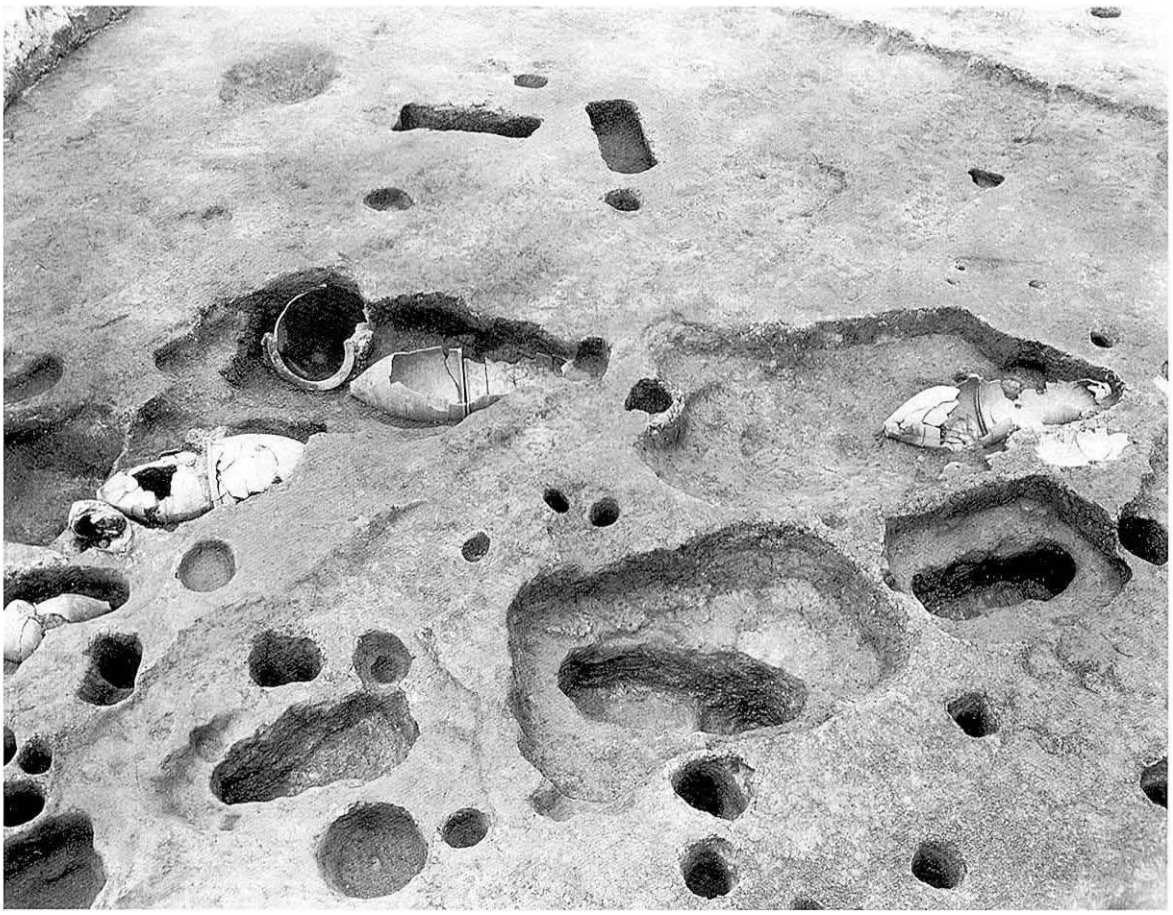
（1） B区西側墓地群③（北側から）



（2） B区西側墓地群④（北側から）



(1) B区西側墓地群⑤(北側から)

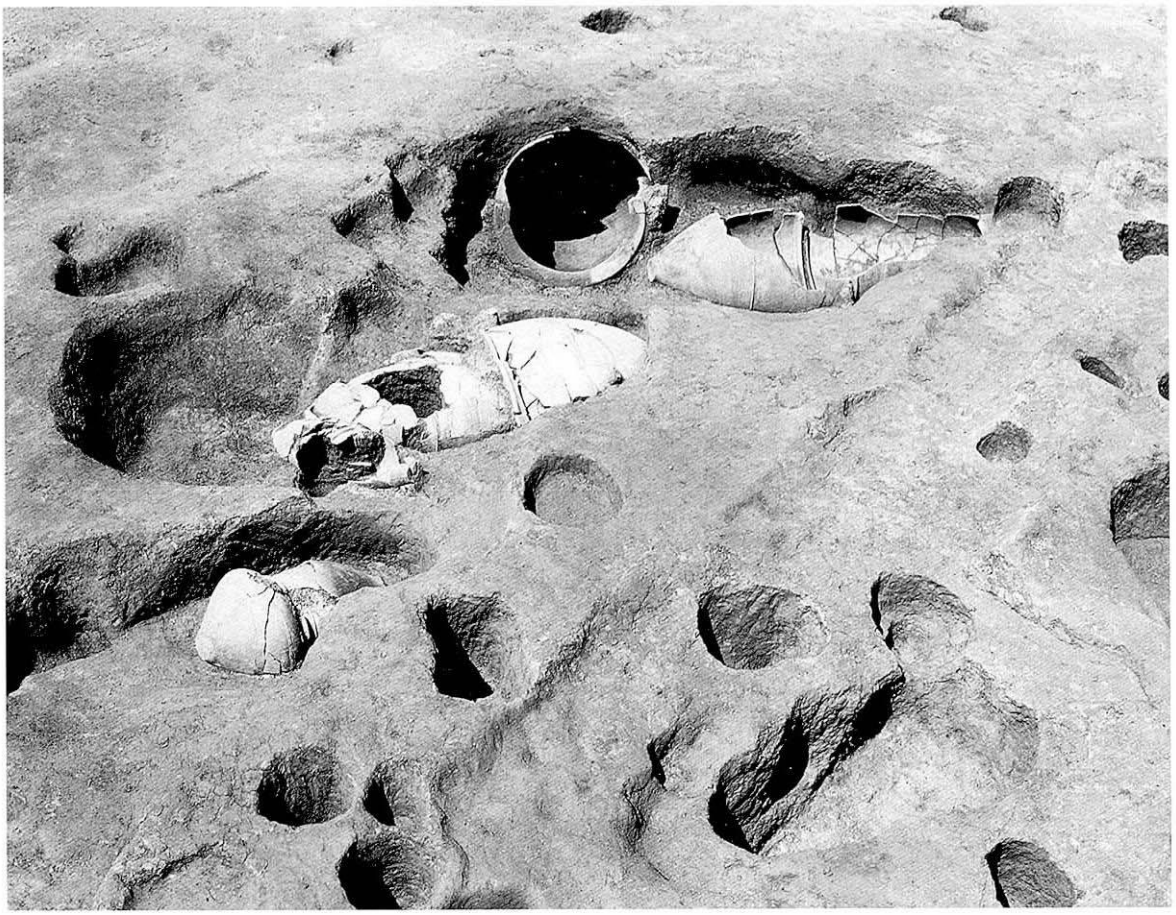


(2) B区東側墓地群①(南側から)

図版 6



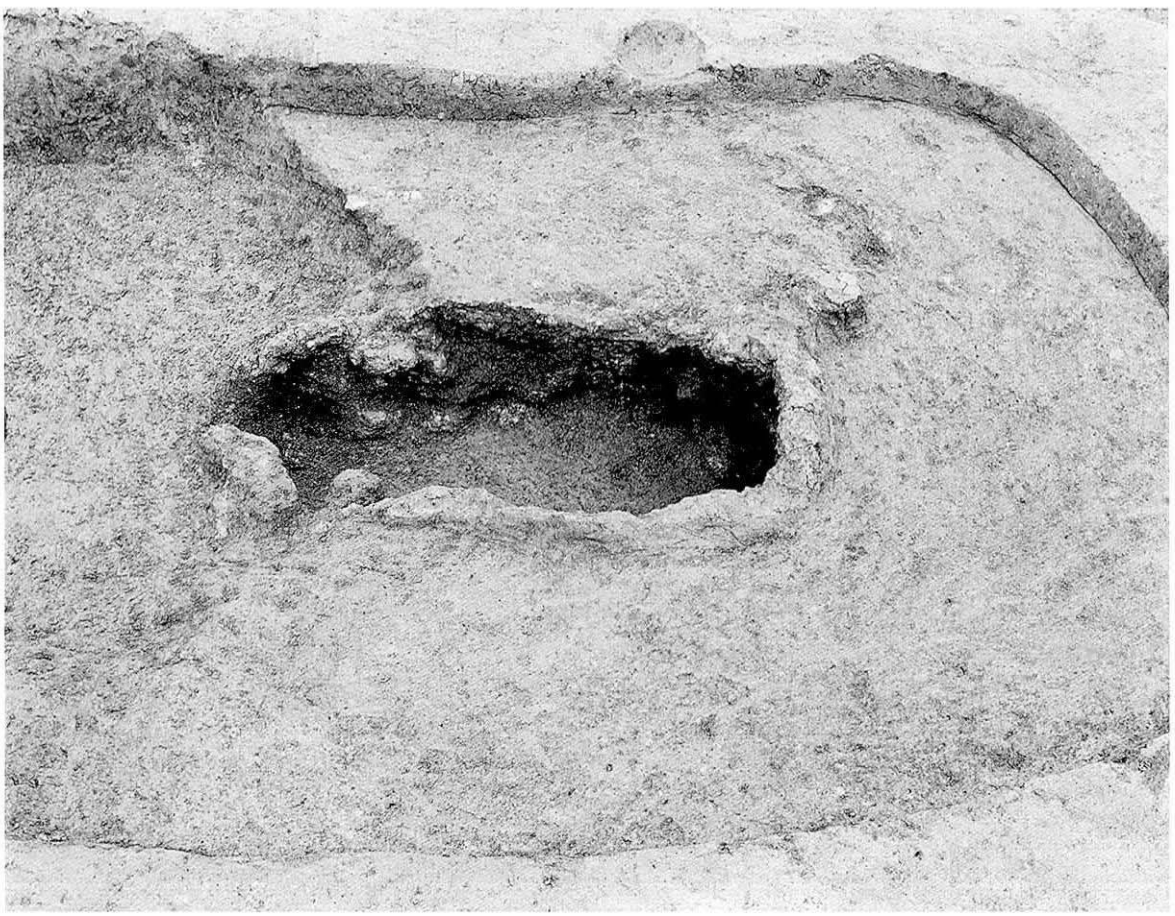
（1） B区東側墓地群②（南側から）



（2） B区東側墓地群③（南西側から）



（1） B区東側墓地群④（西側から）



（2） 木棺墓SP01①（棺底まで掘り下げ、被覆粘土が現れたところ）

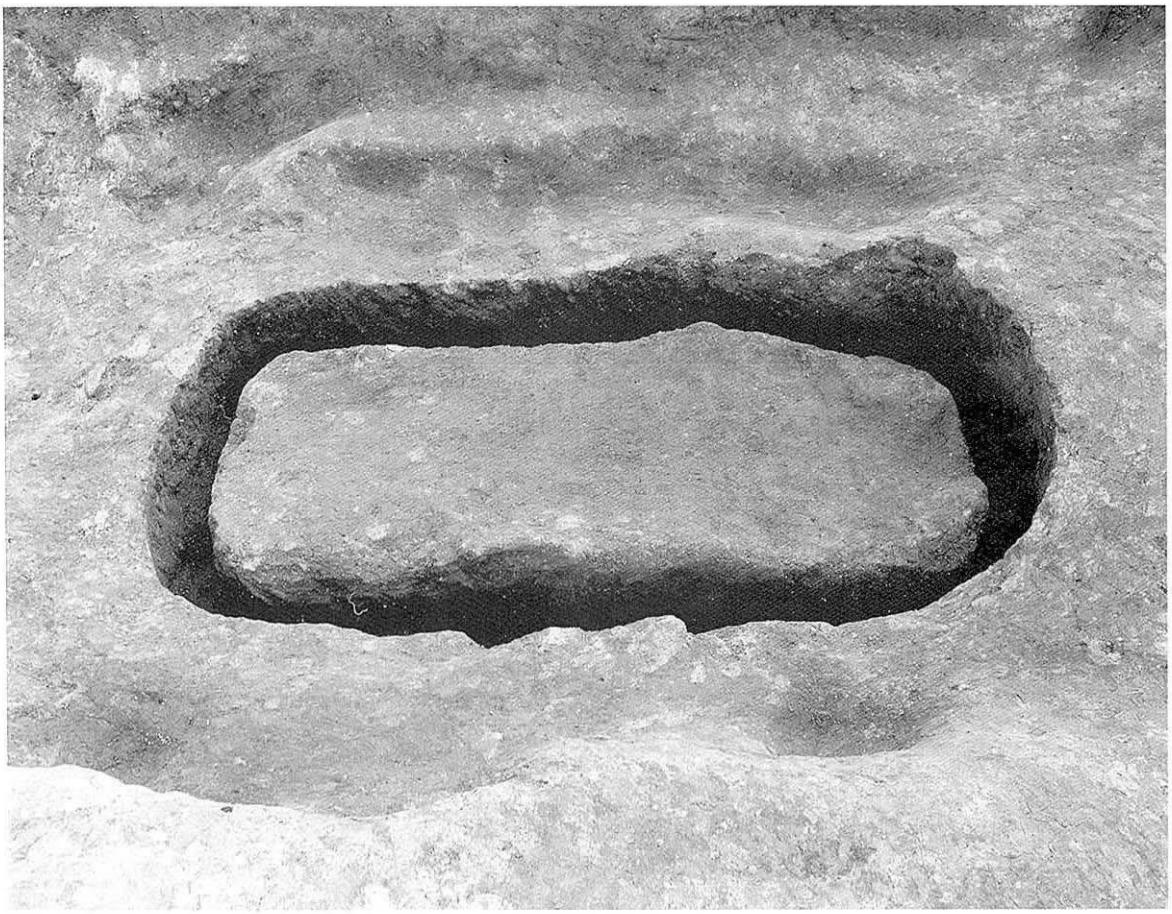
図版 8



（1） 木棺墓SP01②（棺底まで掘り下げ、被覆粘土が現れたところ）



（2） 木棺墓SP01③（被覆粘土の状況）



（1） 木棺墓SP01④（完掘状況）

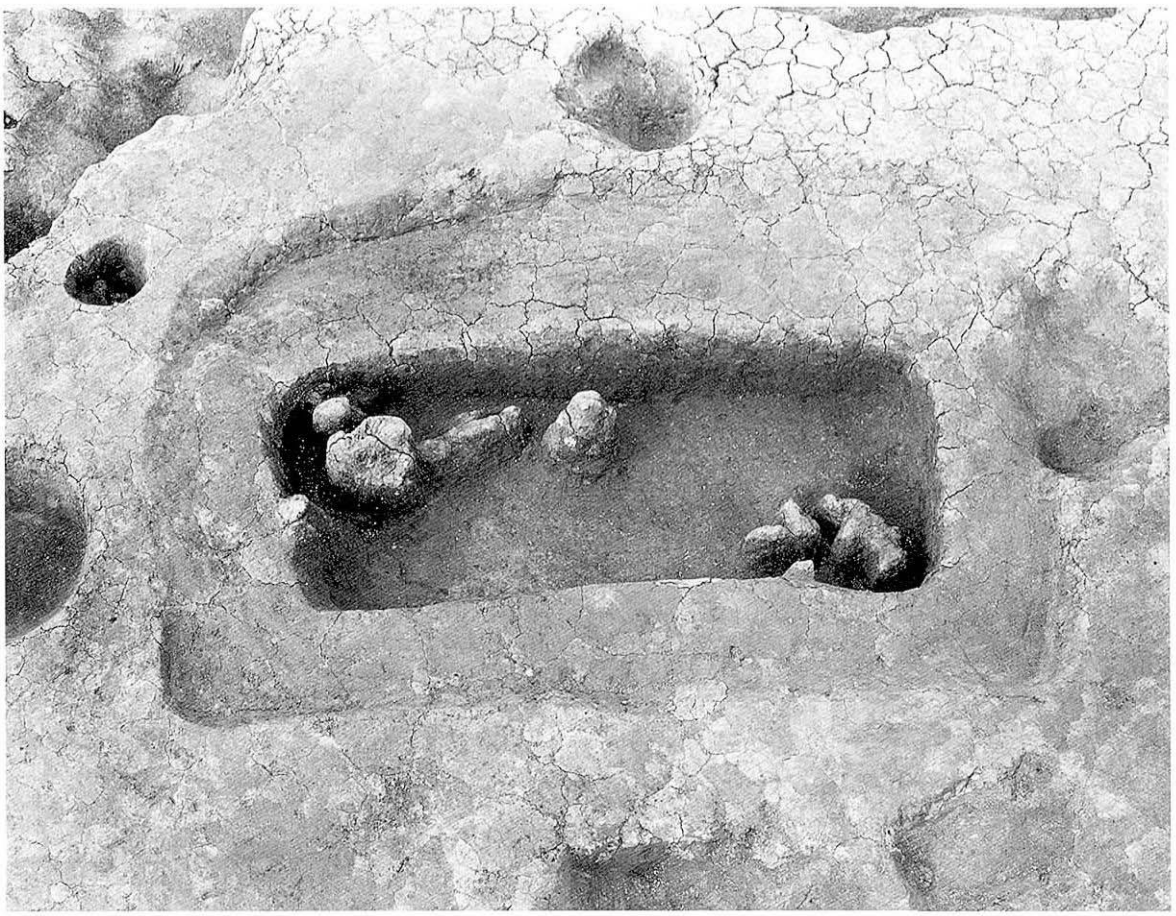


（2） 木棺墓SP02

図版10




（1） 土坑墓SP03（下）・SP04（上）



（2） 土坑墓SP05




（1） 土坑墓SP06（右上の甕棺はSJ33）



（2） 土坑墓SP07

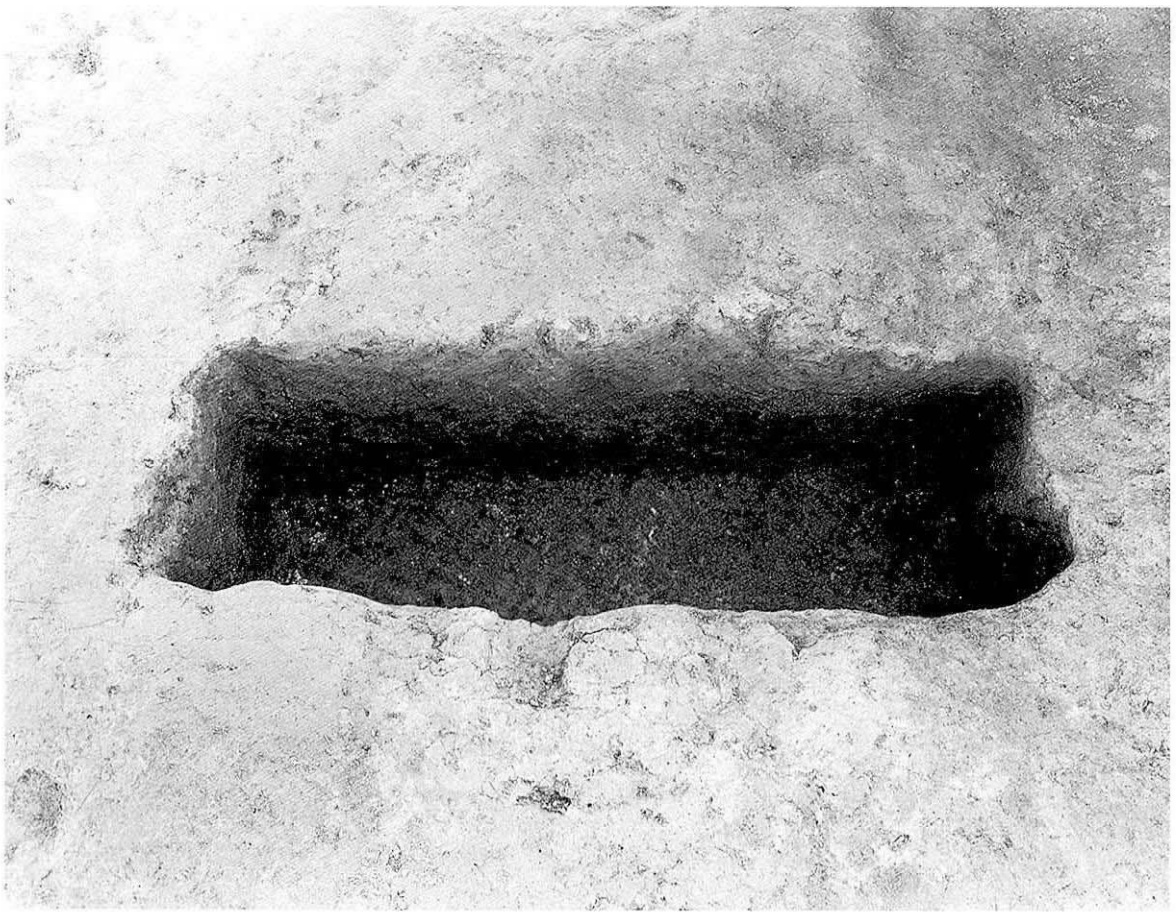
図版12



（1） 土坑墓SP08



（2） 土坑墓SP10

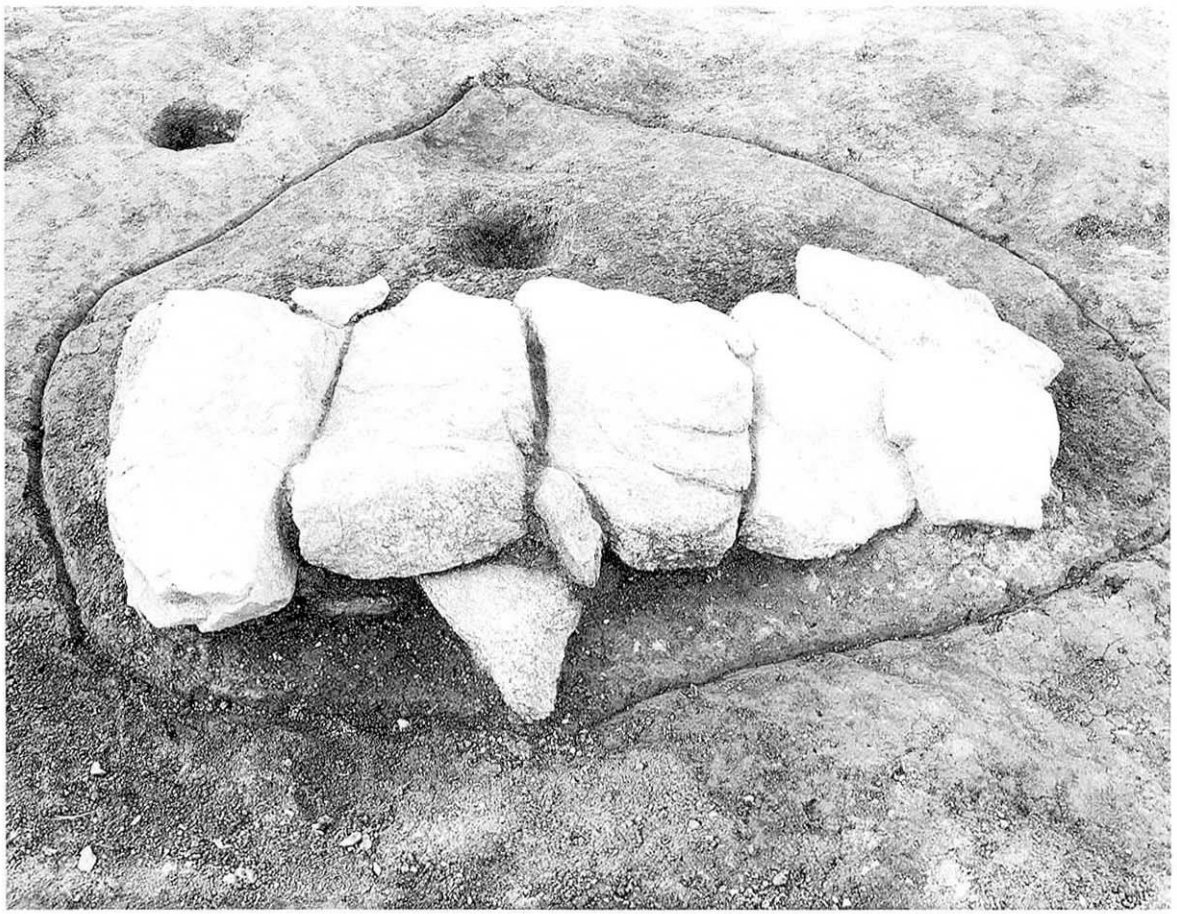


(1) 木棺墓SP11

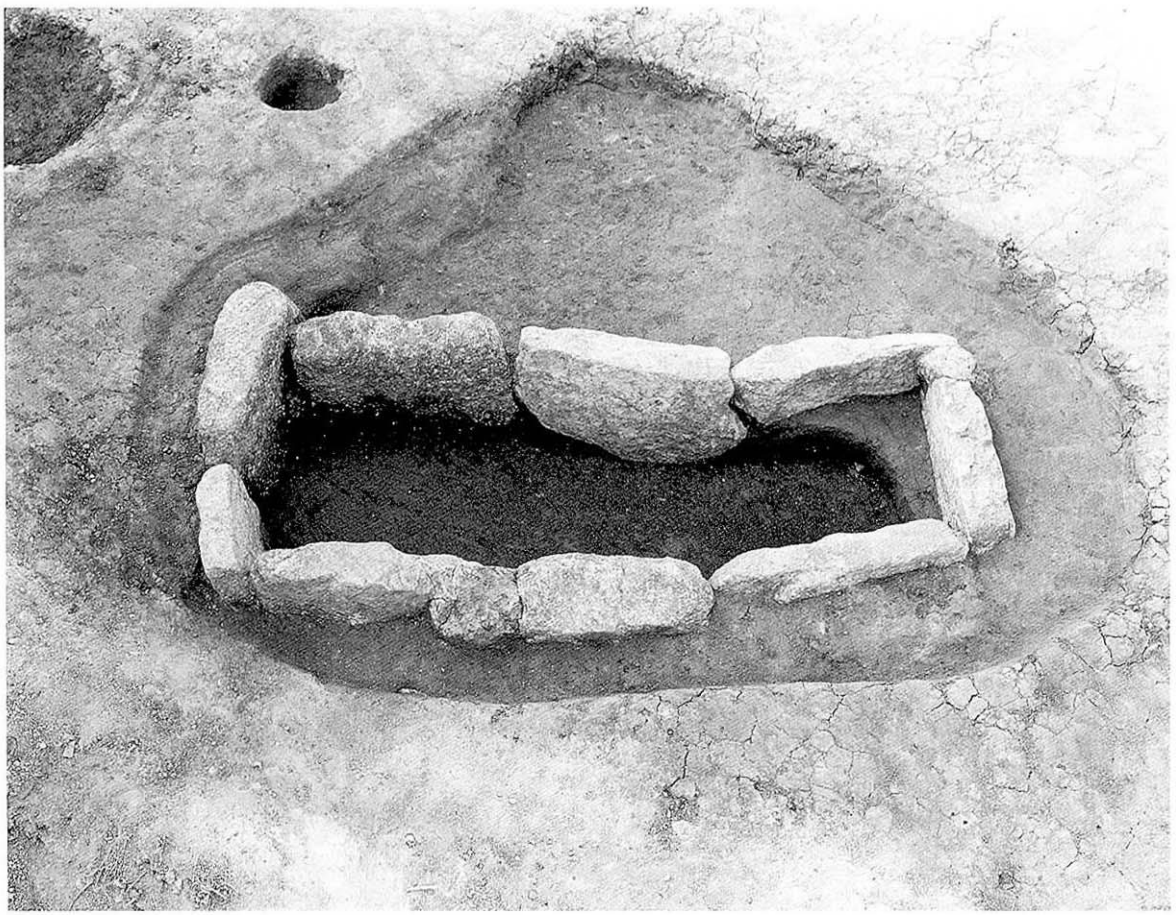


(2) 石棺墓SC01

図版14



（1） 石棺墓SC02①（蓋石除去前）



（2） 石棺墓SC02②（蓋石除去後）



（1） 石棺墓SC03①（蓋石除去前）



（2） 石棺墓SC03②（蓋石除去後）

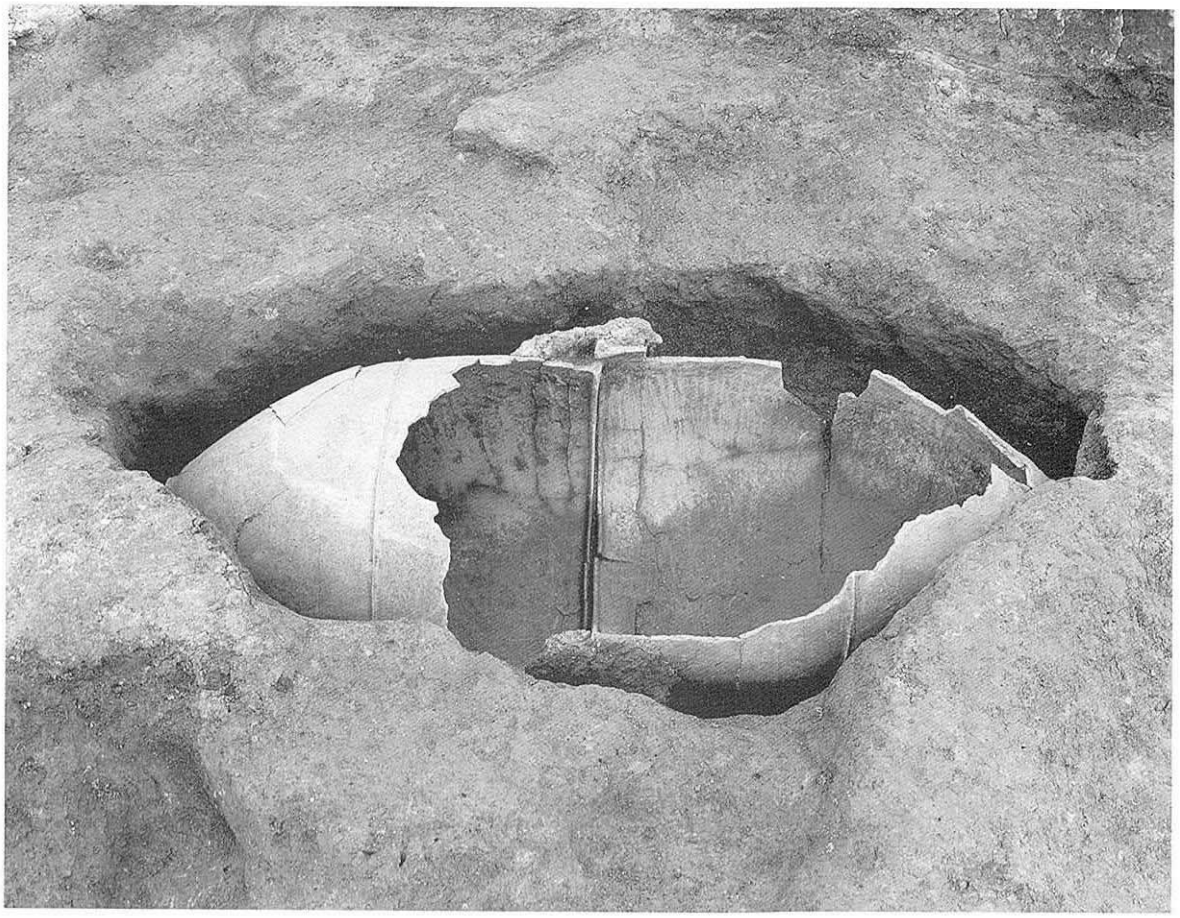
図版16



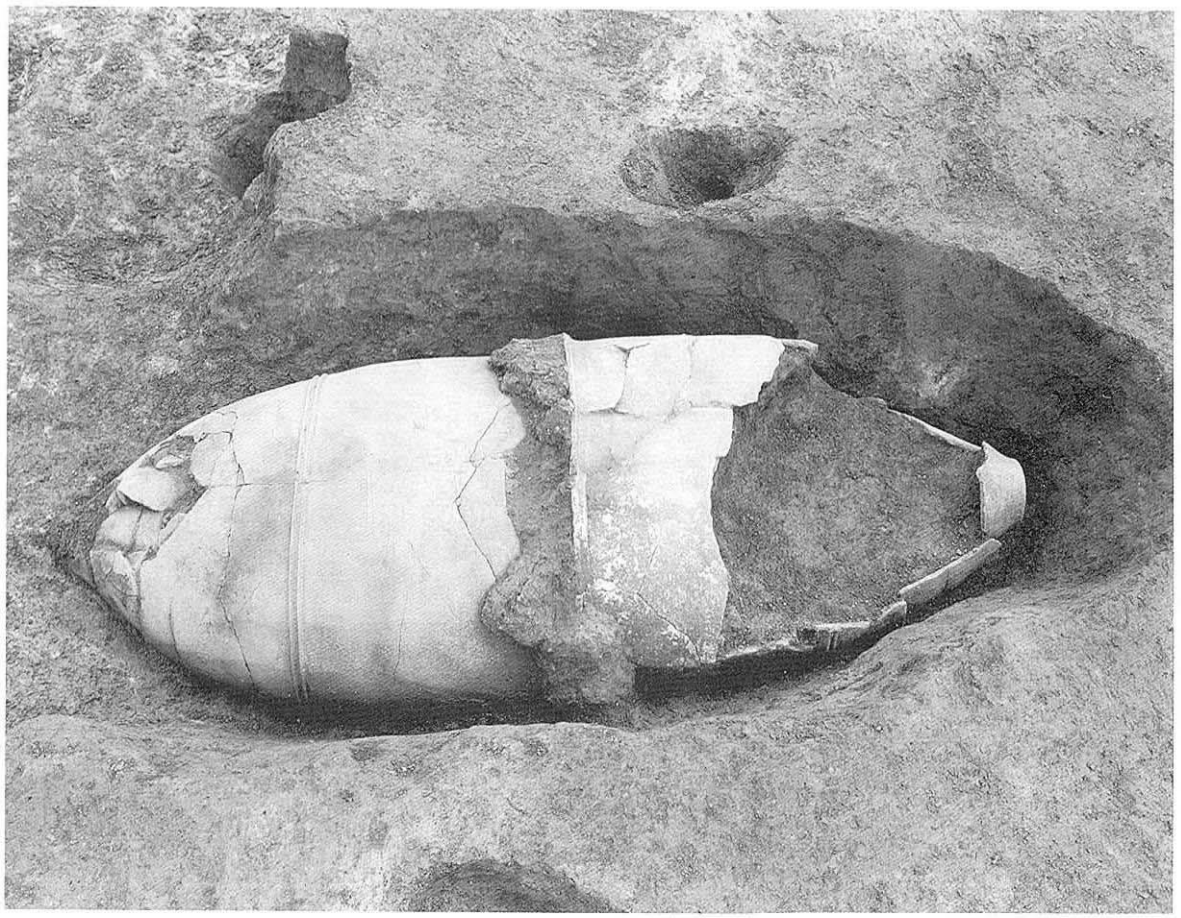
（1） 石棺墓SC03③（蓋石除去後）




（2） 甕棺墓SJ01（左）・SJ25（右）

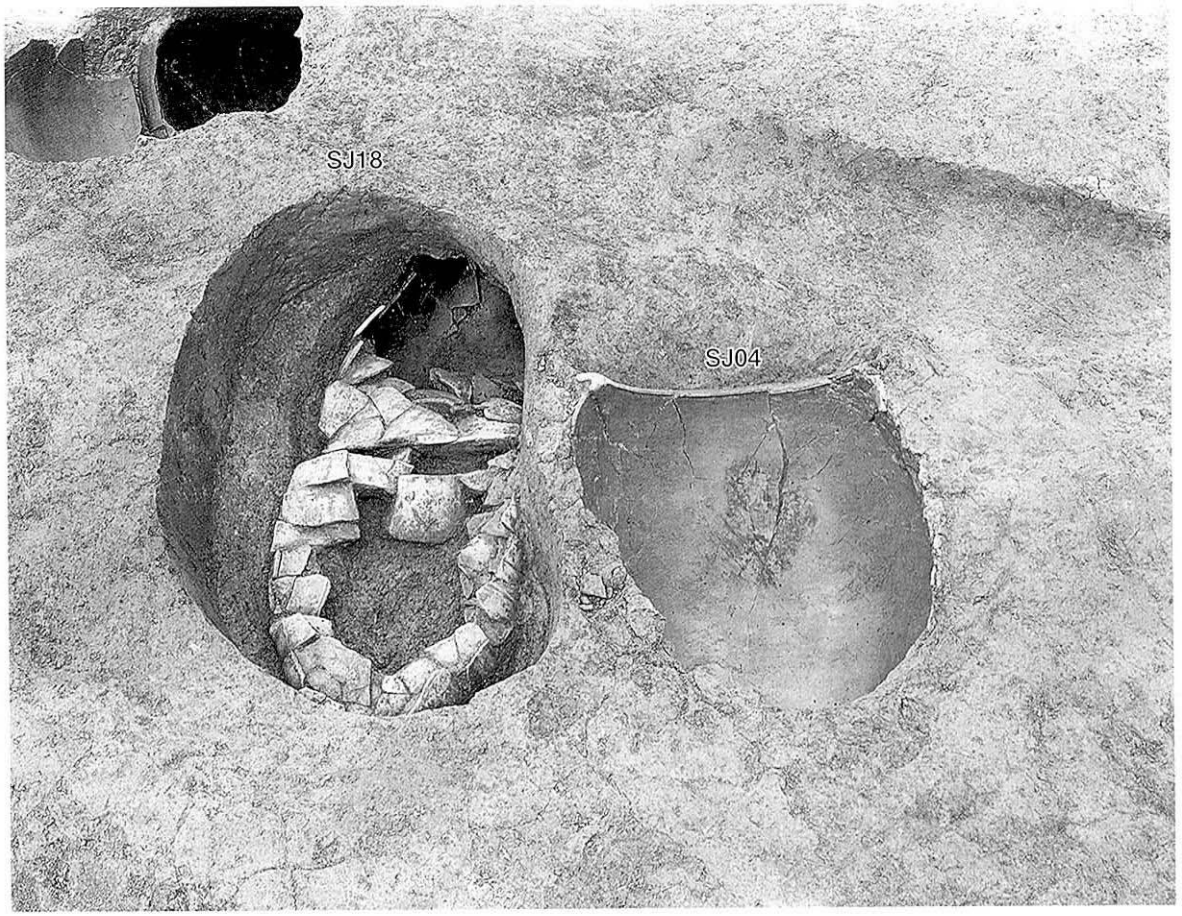


（1） 甕棺墓SJ02

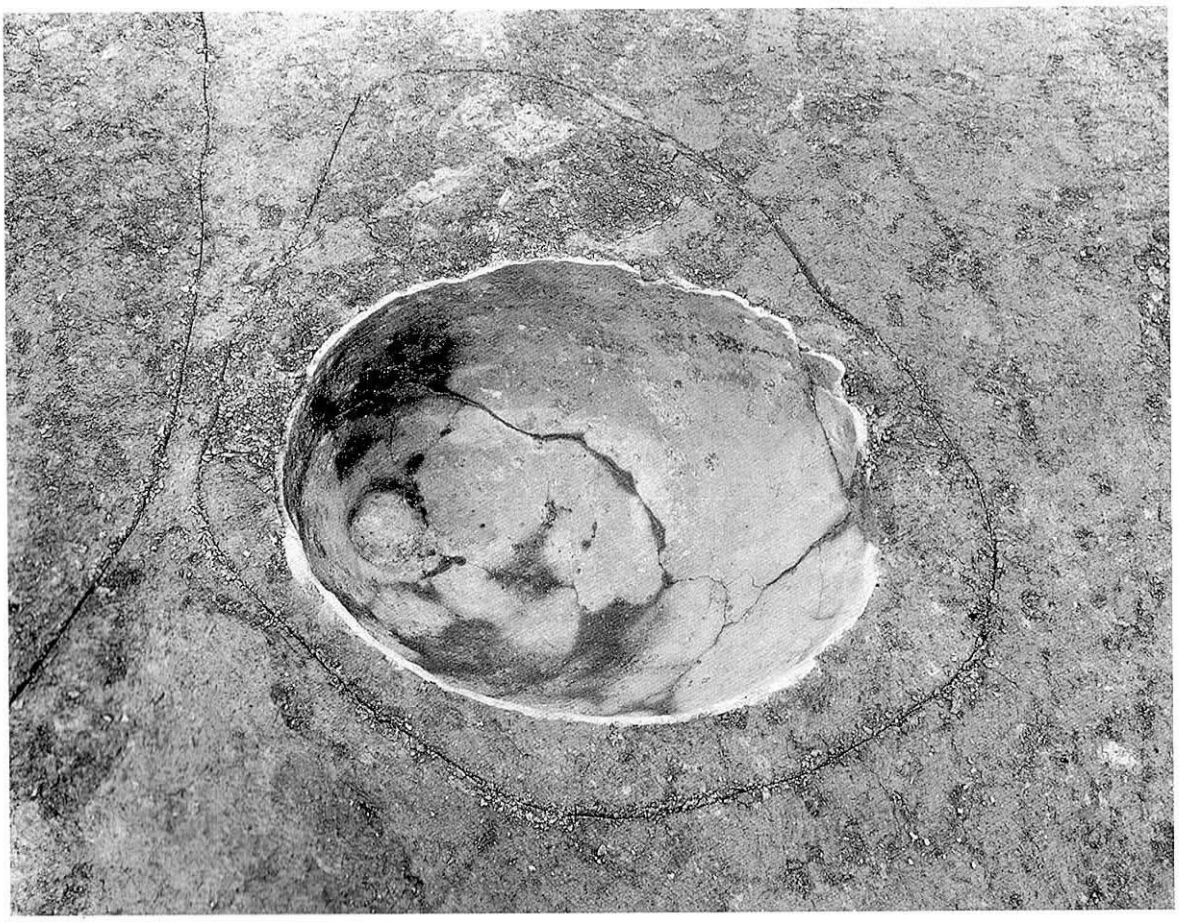


（2） 甕棺墓SJ03

図版18



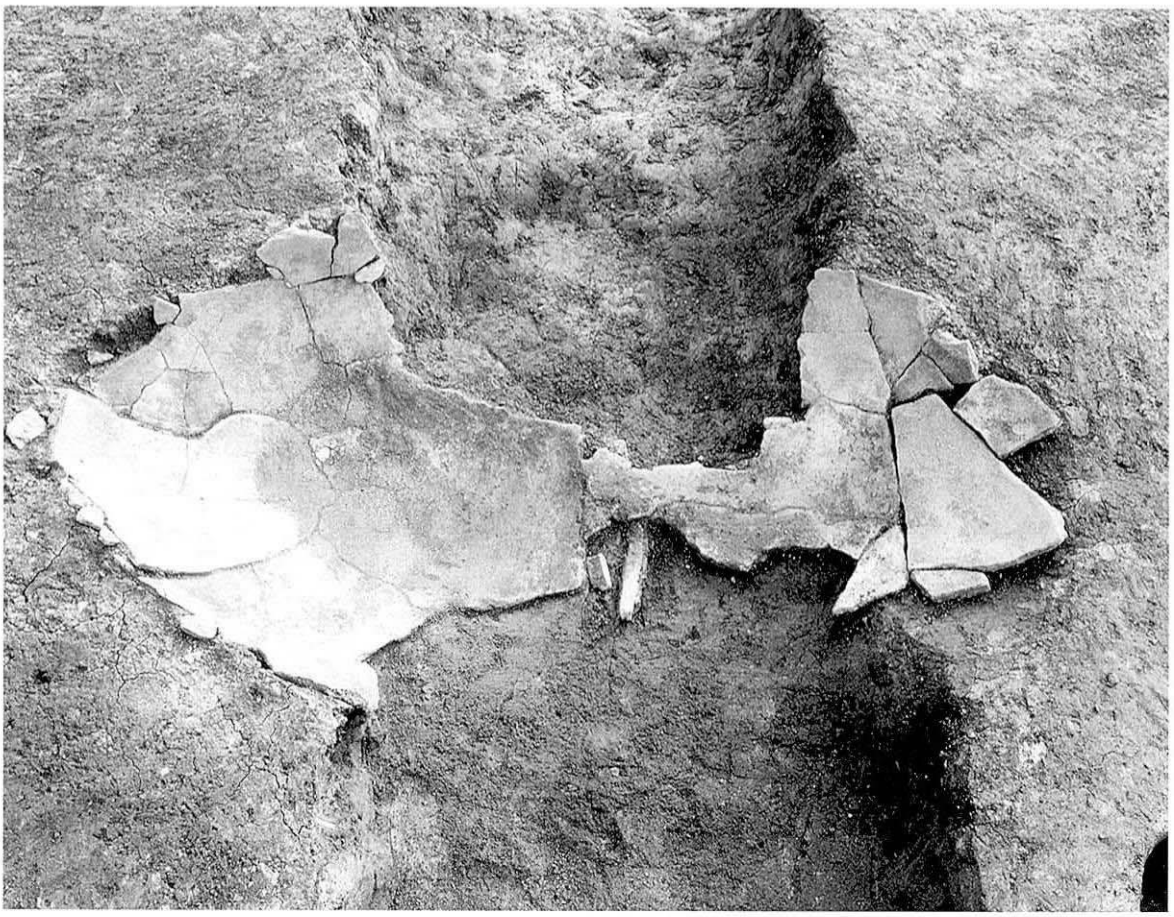

（1） 甕棺墓SJ04（右）・SJ18（左）



（2） 甕棺墓SJ06



(1)　甕棺墓SJ07（上はSJ06）



(2)　甕棺墓SJ08

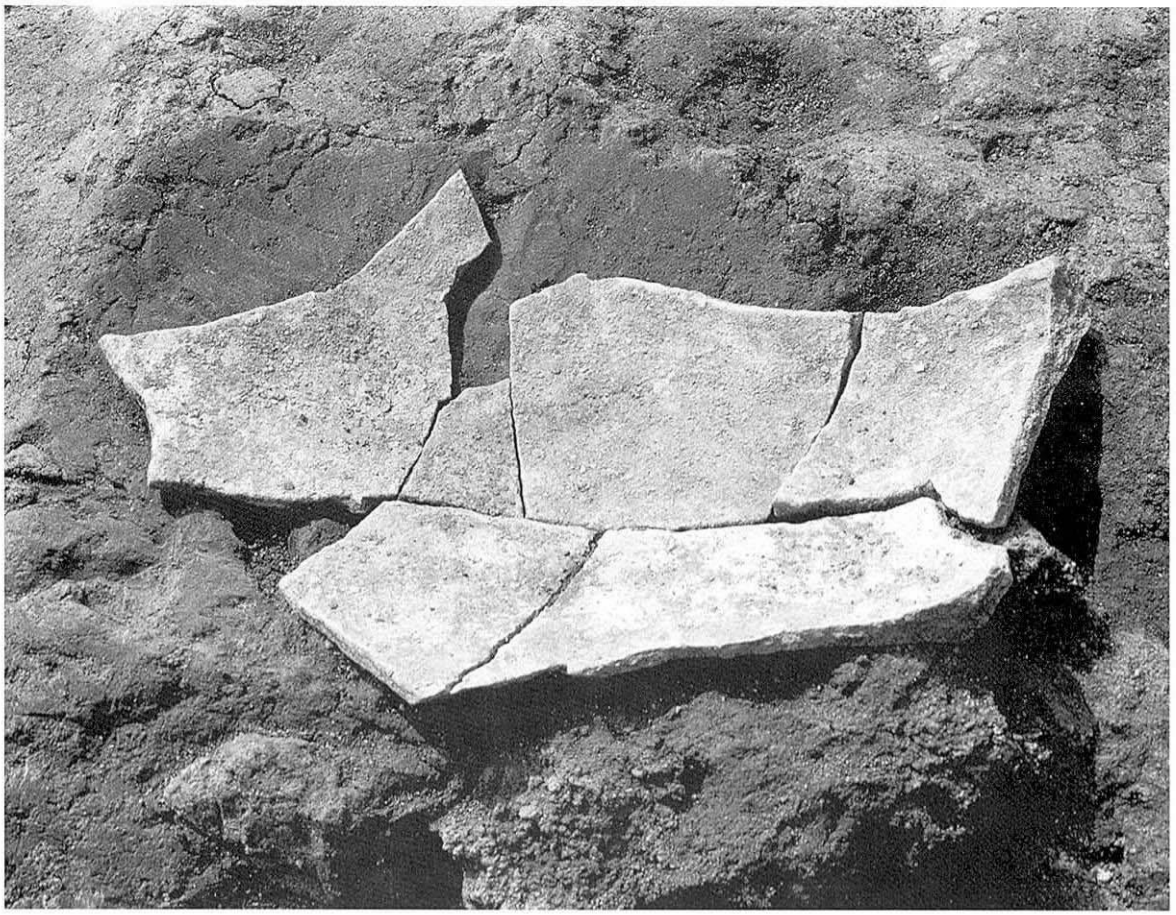
図版20




（1） 石棺墓SC01、甕棺墓SJ04・SJ05・SJ06・SJ07・SJ08・SJ18



（2） 甕棺墓SJ09

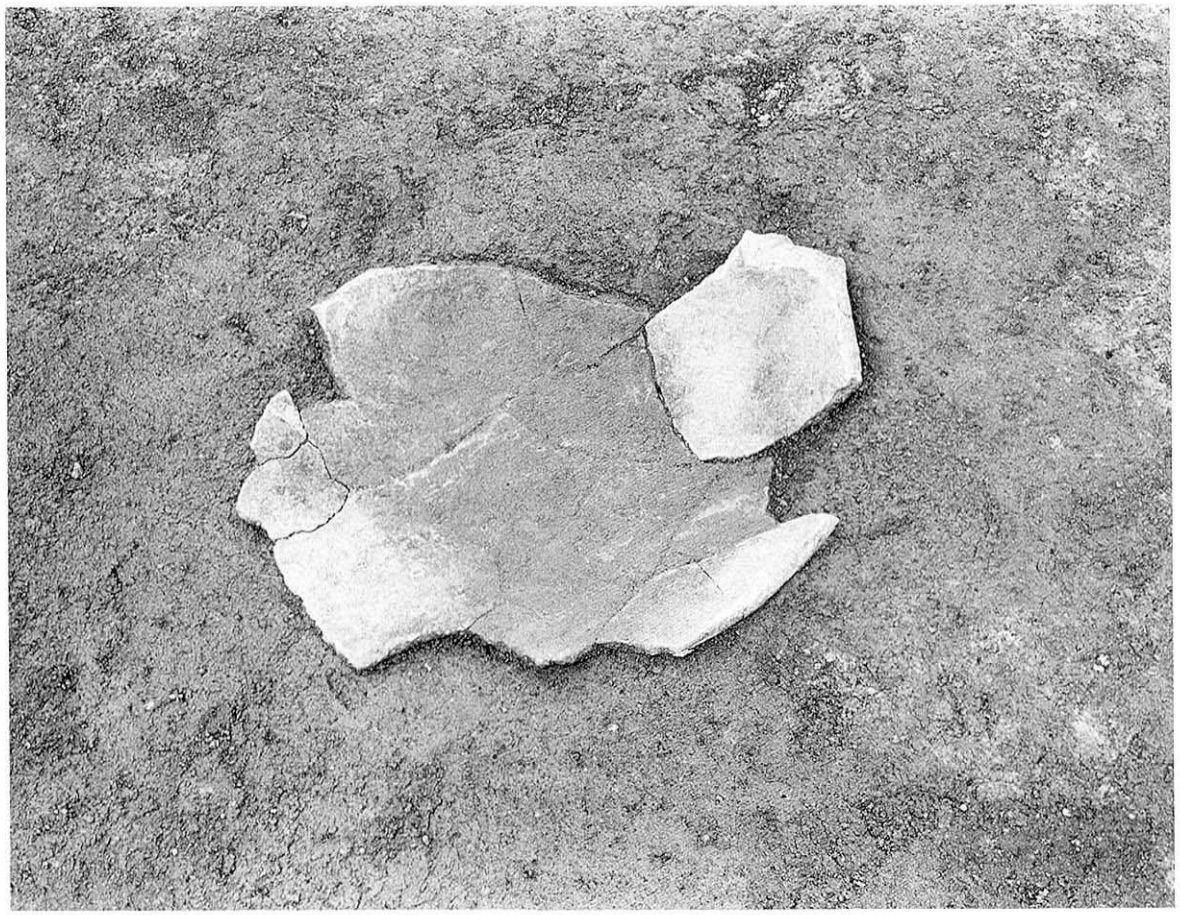


（1） 甕棺墓SJ10

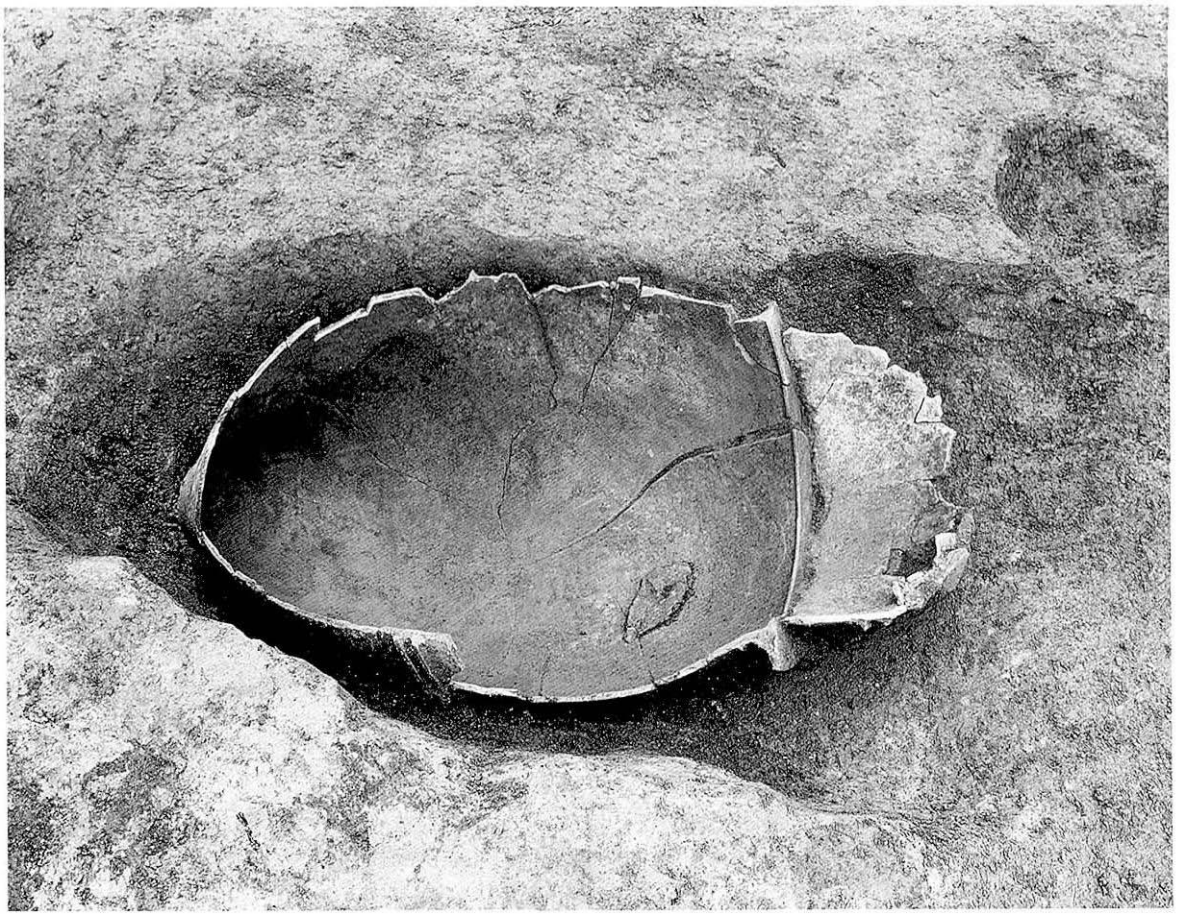



（2） 甕棺墓SJ11・SJ12・SJ13

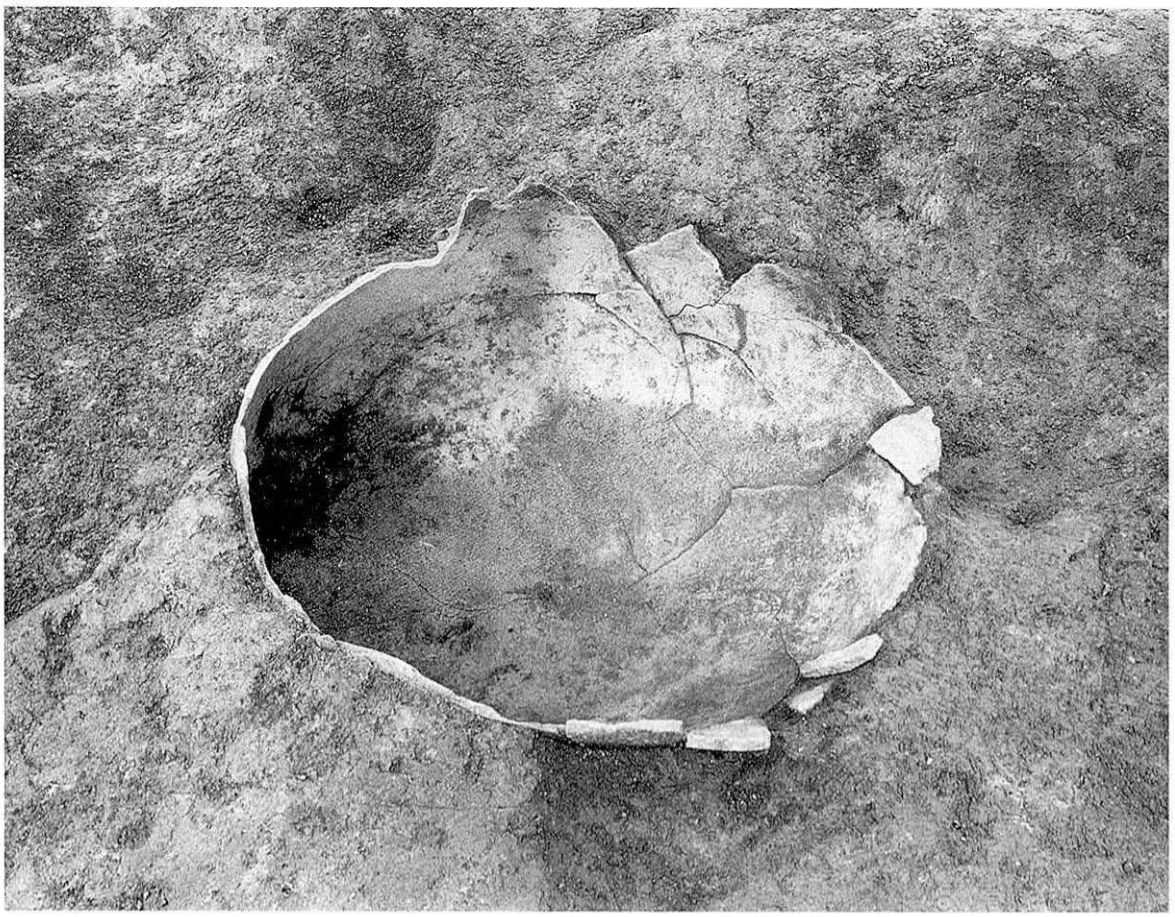
図版22



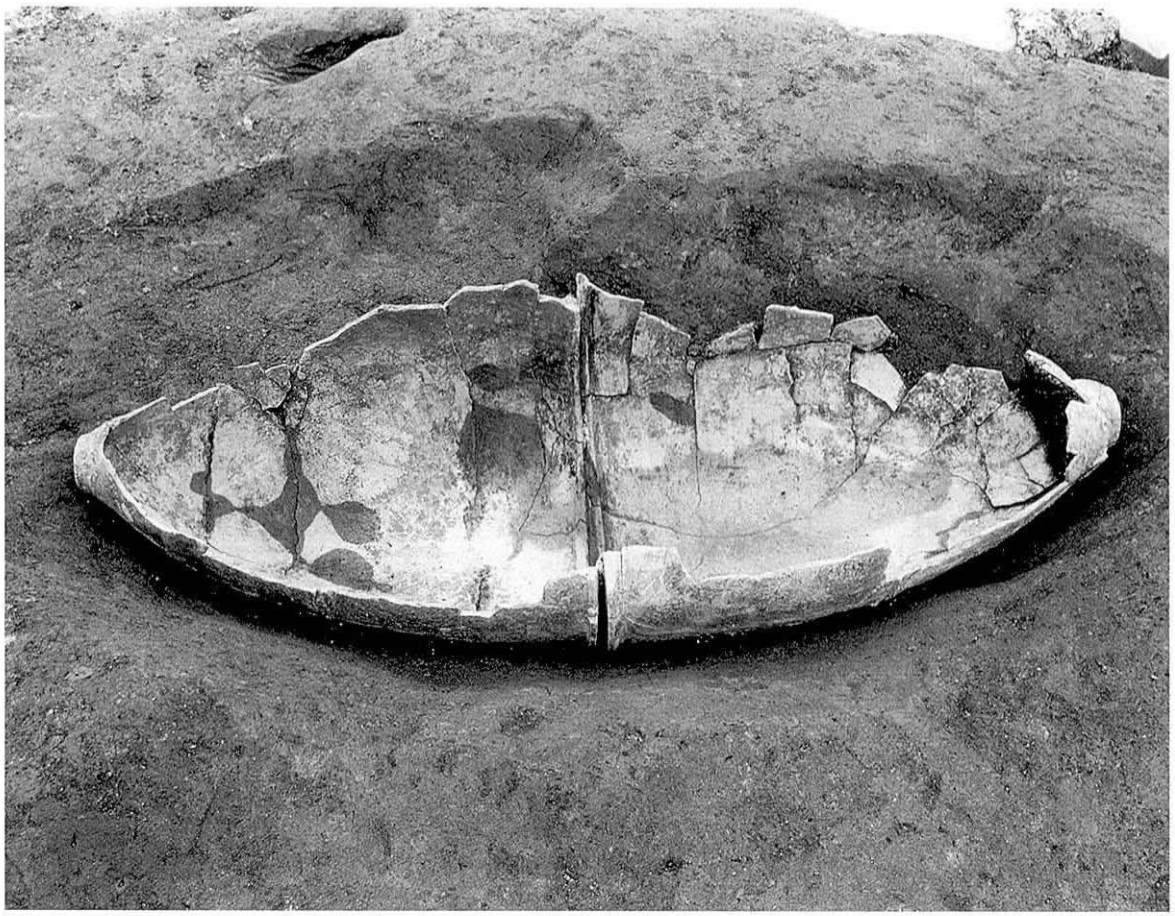
（1） 甕棺墓SJ14



（2） 甕棺墓SJ15

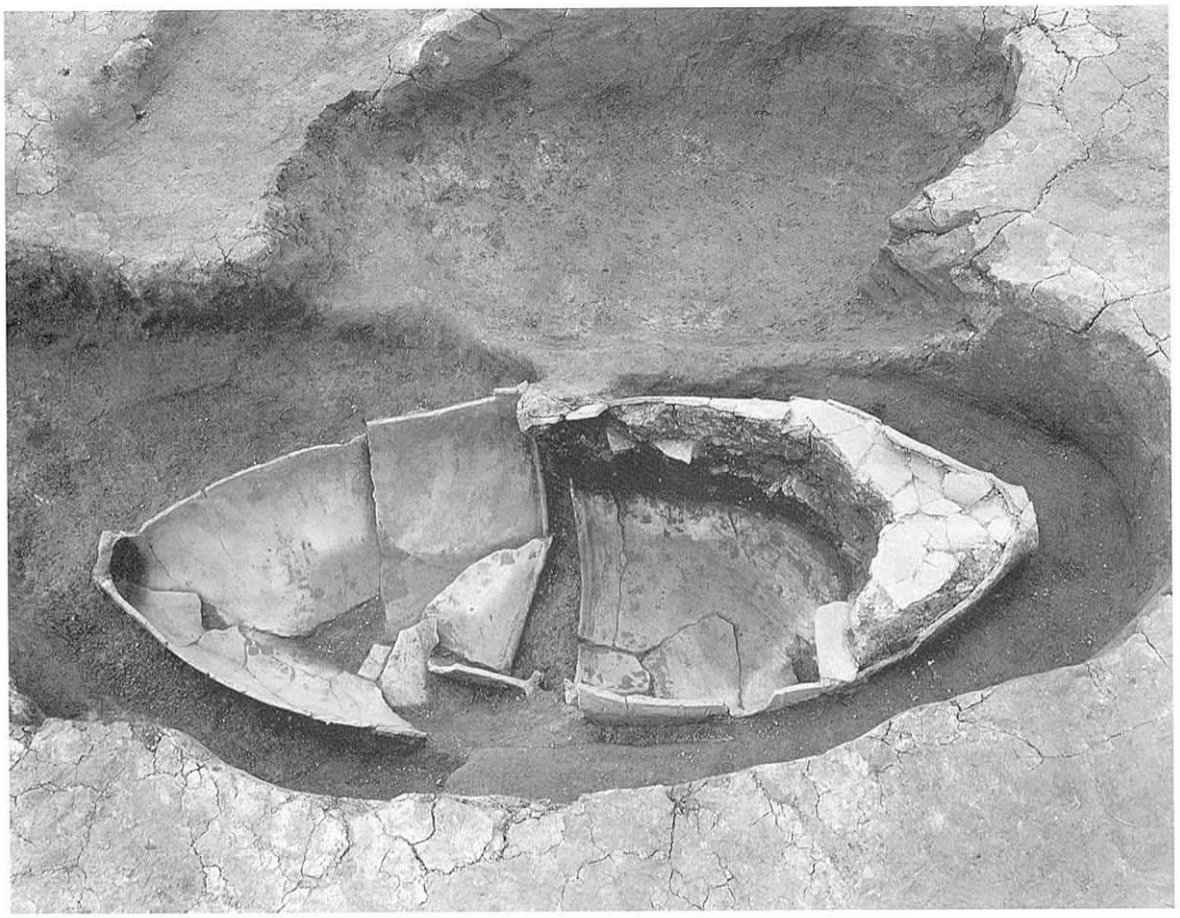


(1)　甕棺墓SJ16



(2)　甕棺墓SJ17

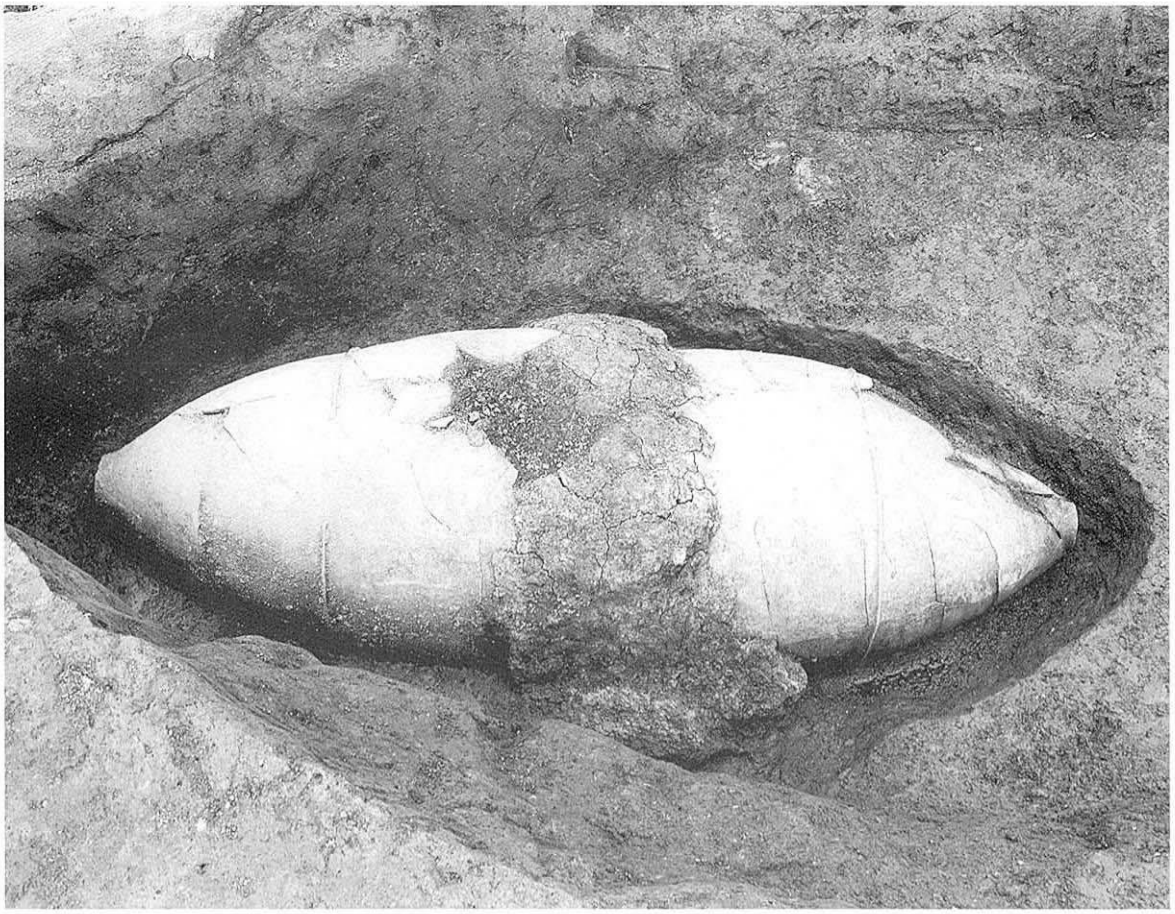
図版24



（1） 甕棺墓SJ18（上はSJ04の墓坑）



（2） 甕棺墓SJ19



（1） 甕棺墓SJ20



（2） 甕棺墓SJ21

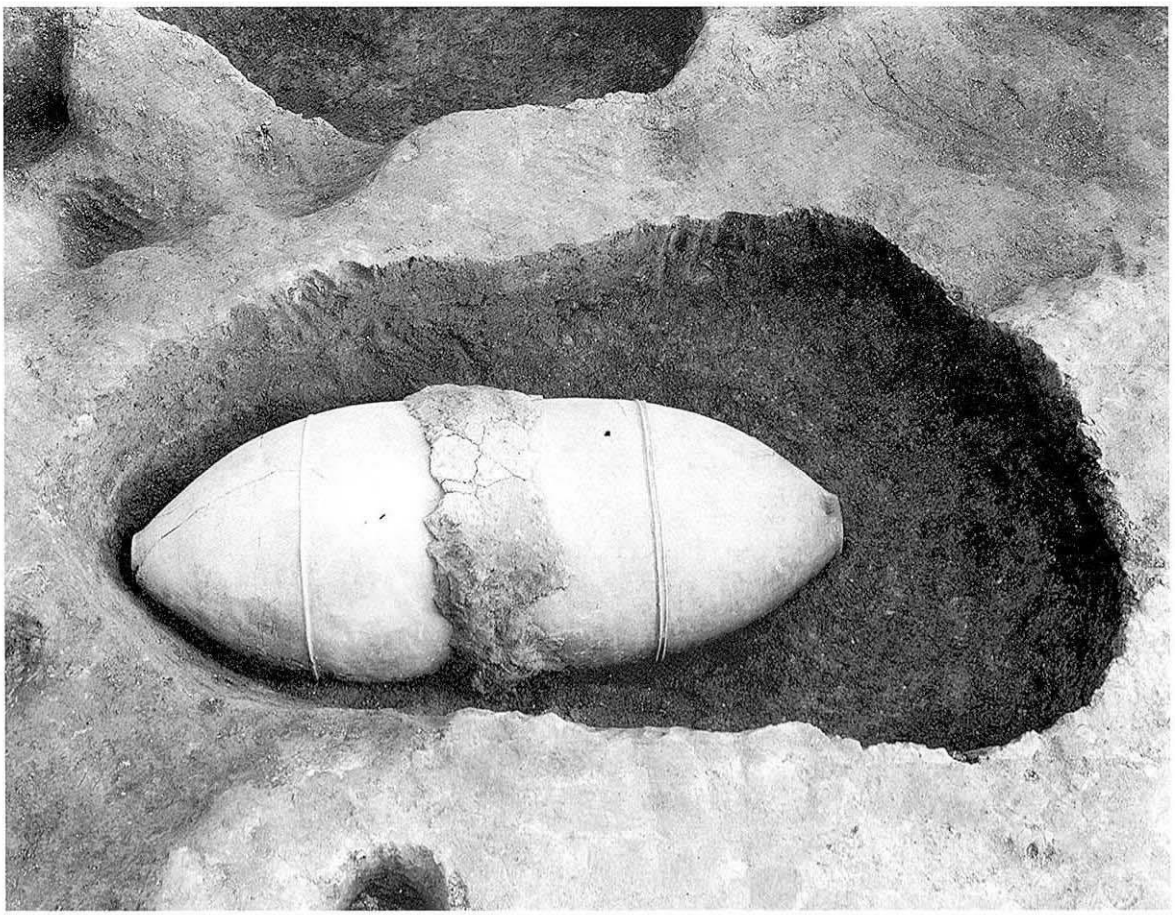
図版26



（1） 甕棺墓SJ22



（2） 甕棺墓SJ23

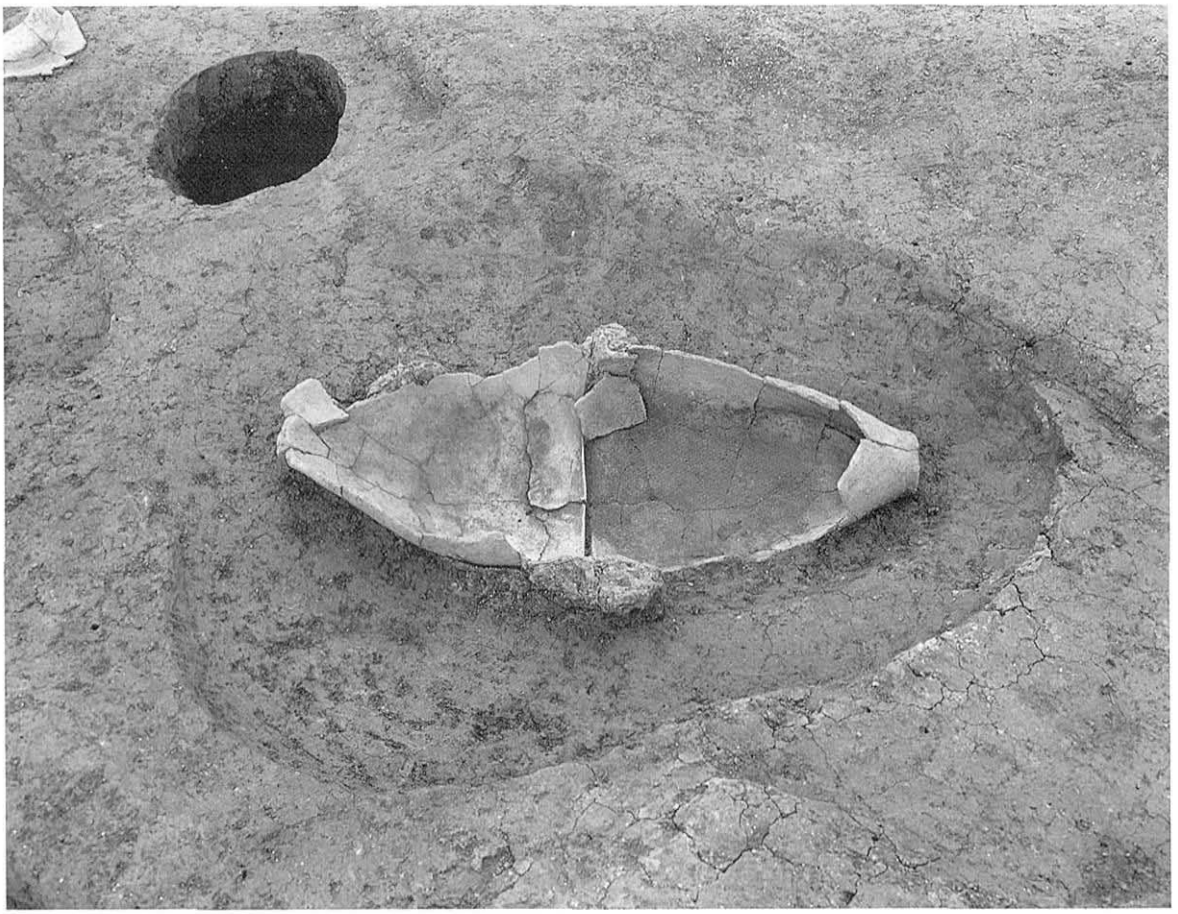


（1） 甕棺墓SJ24

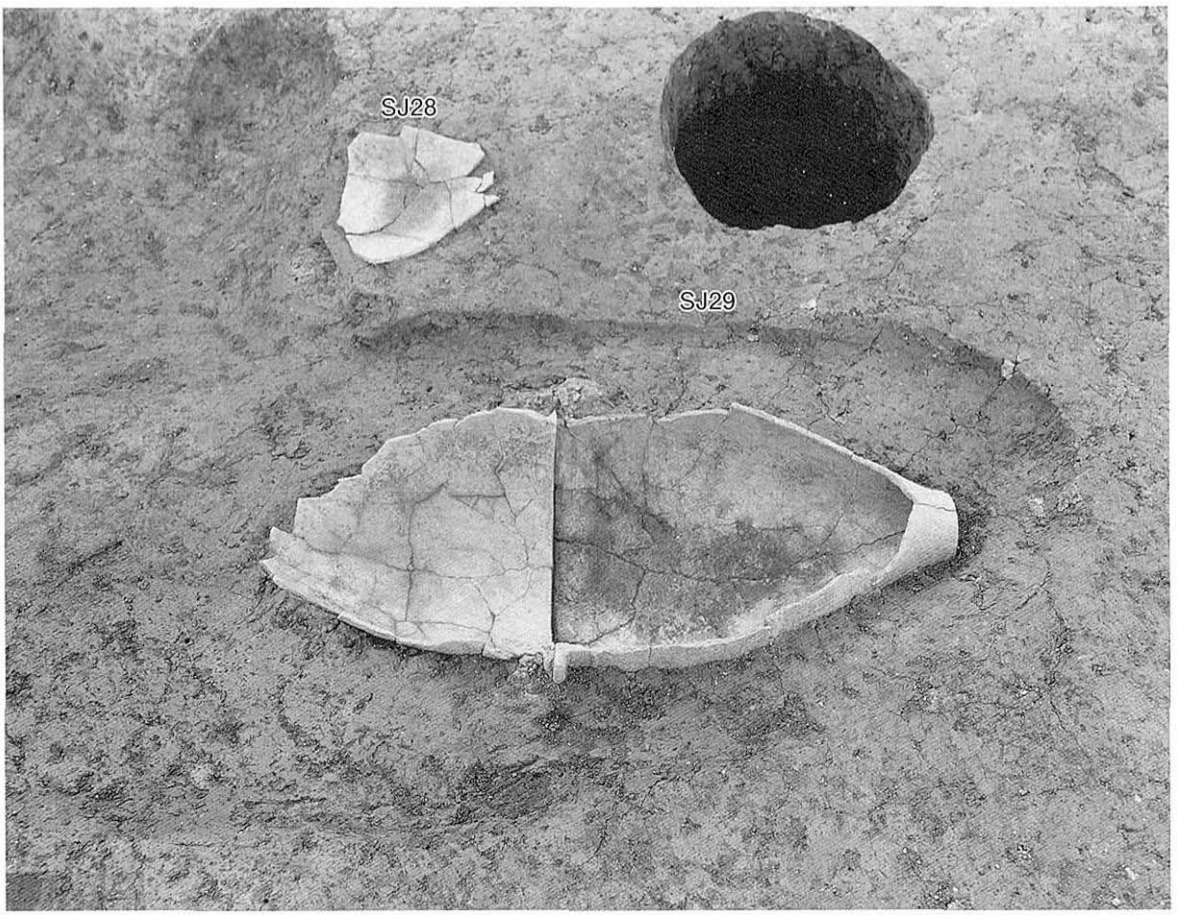


（2） 甕棺墓SJ26

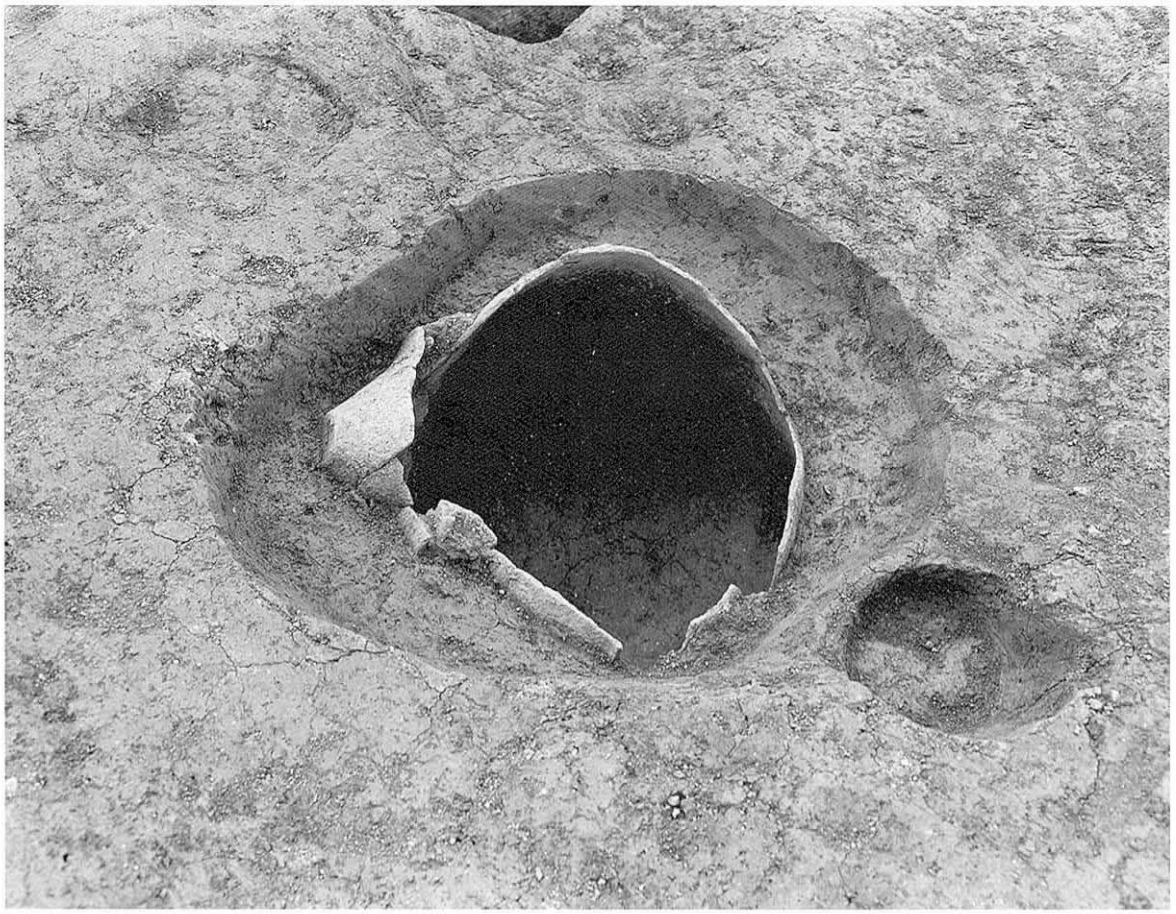
図版28



（1） 甕棺墓SJ27




（2） 甕棺墓SJ28（上）・SJ29（下）

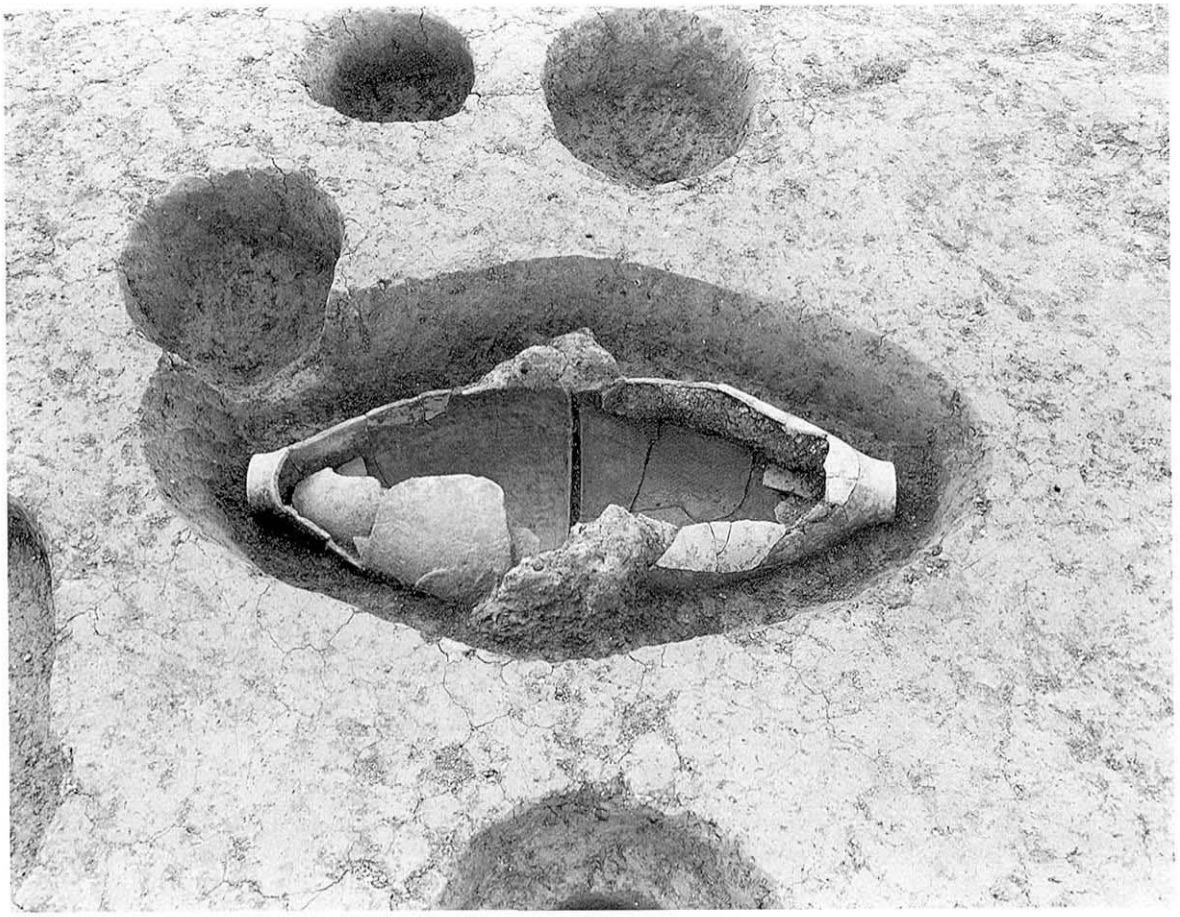


（1） 甕棺墓SJ30

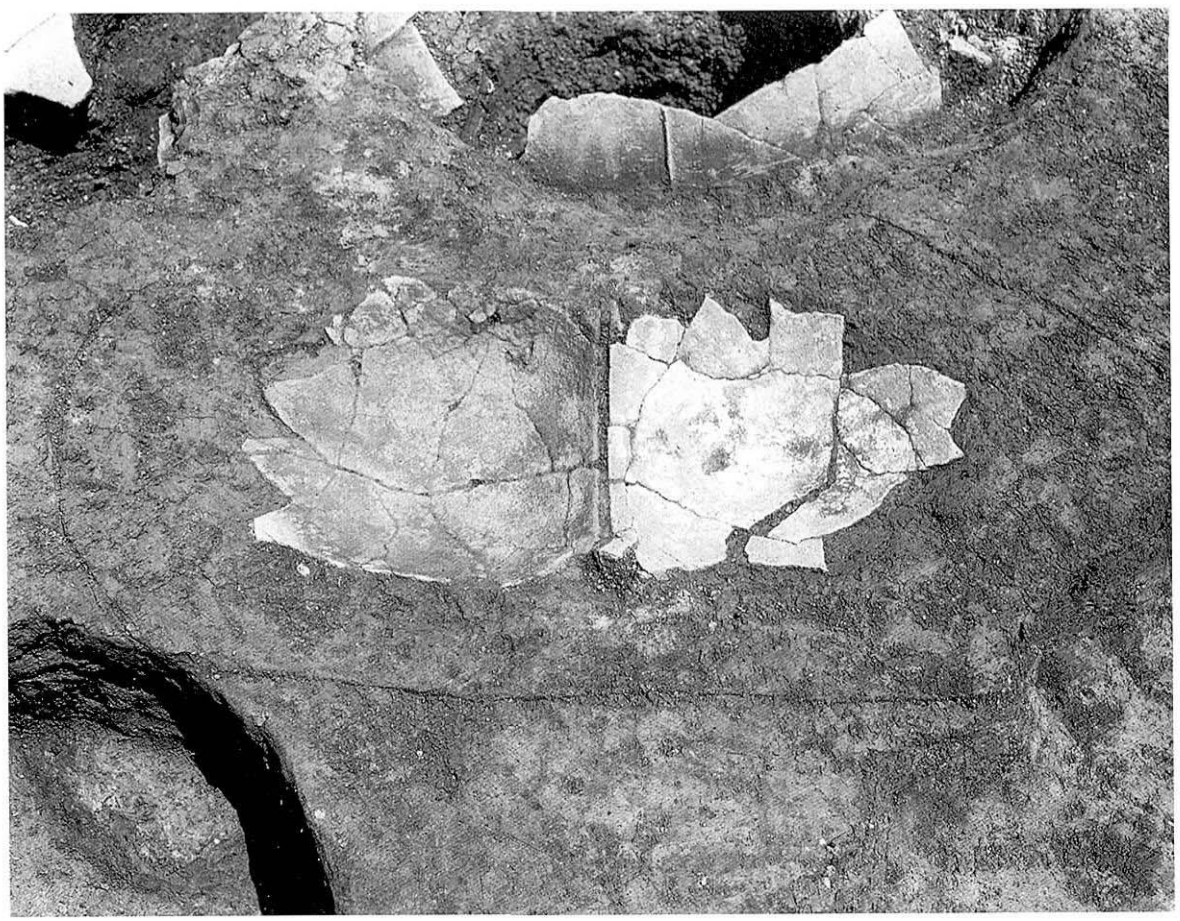


（2） 甕棺墓SJ31

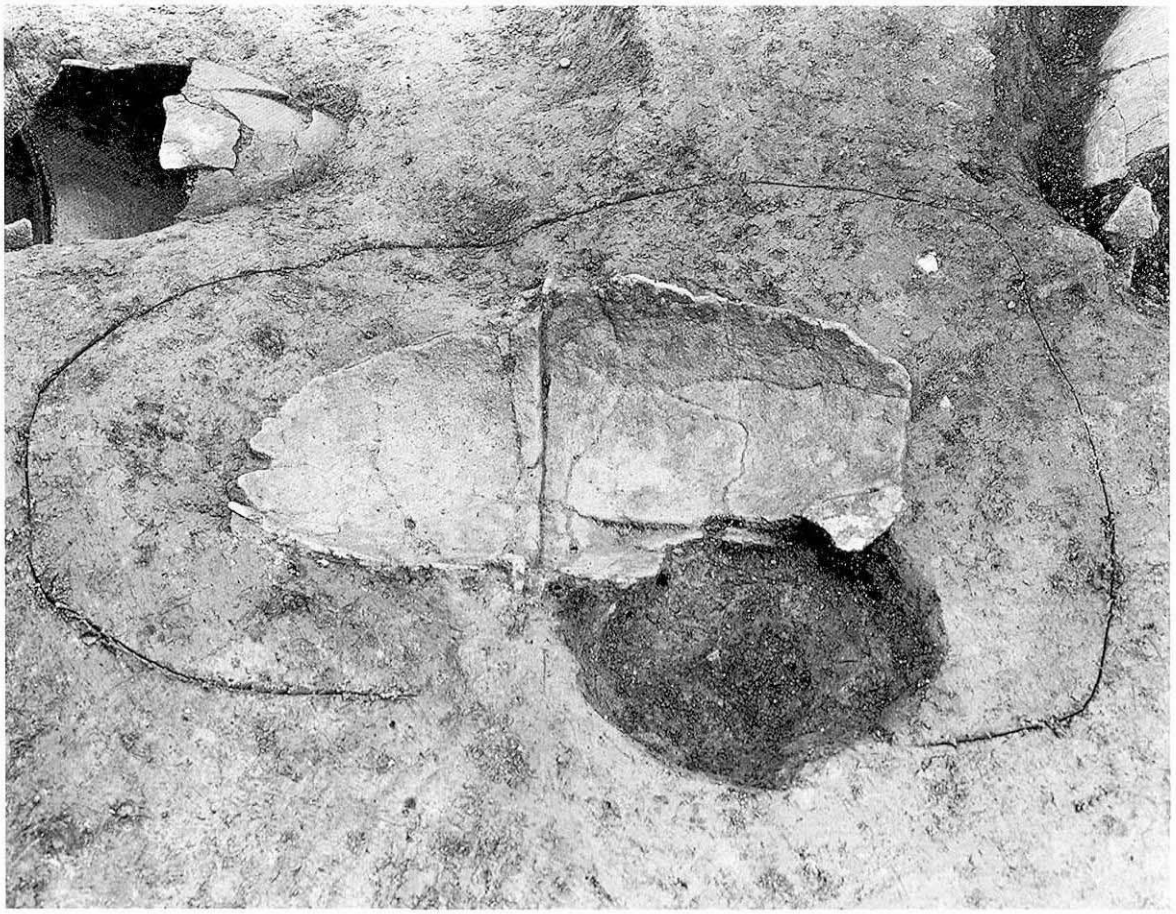
図版30



（1） 甕棺墓SJ32



（2） 甕棺墓SJ33



（1） 甕棺墓SJ34

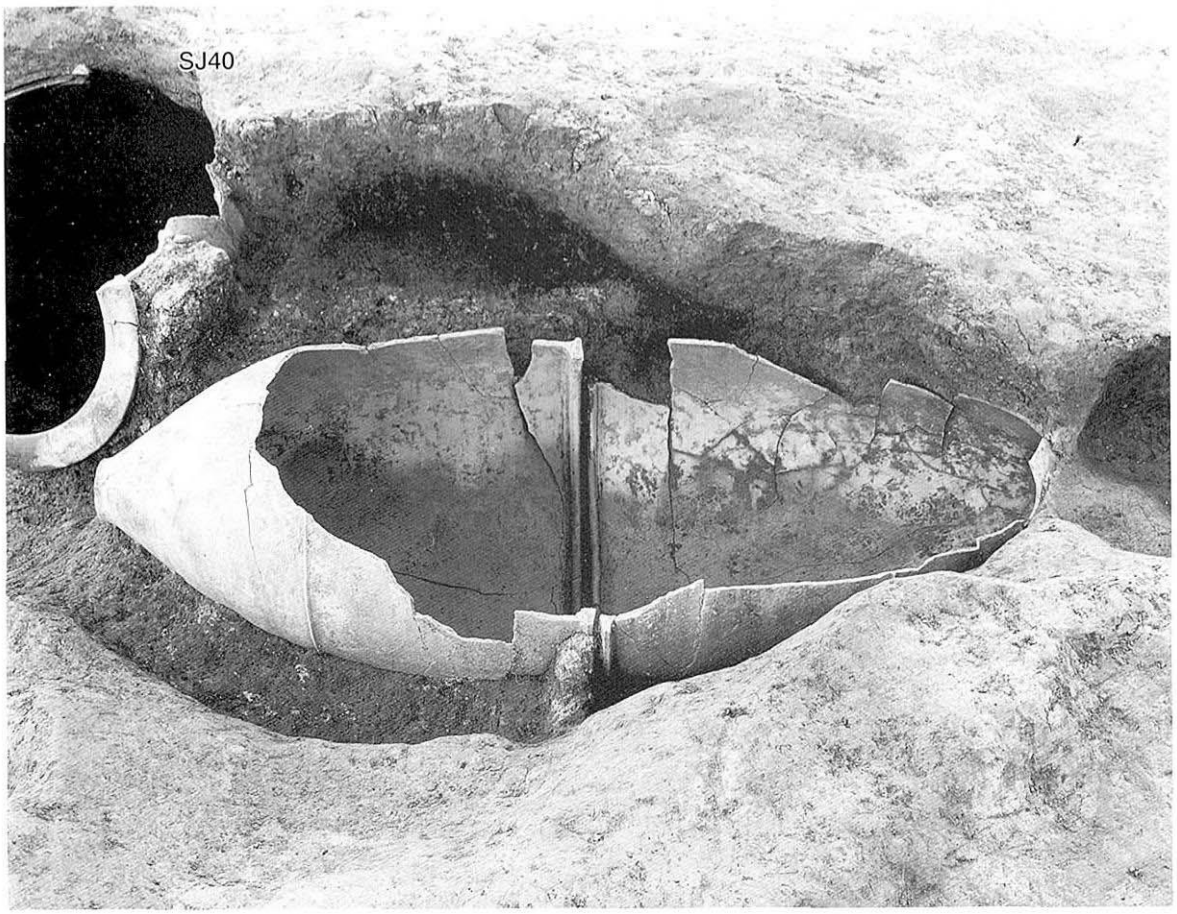


（2） 甕棺墓SJ35

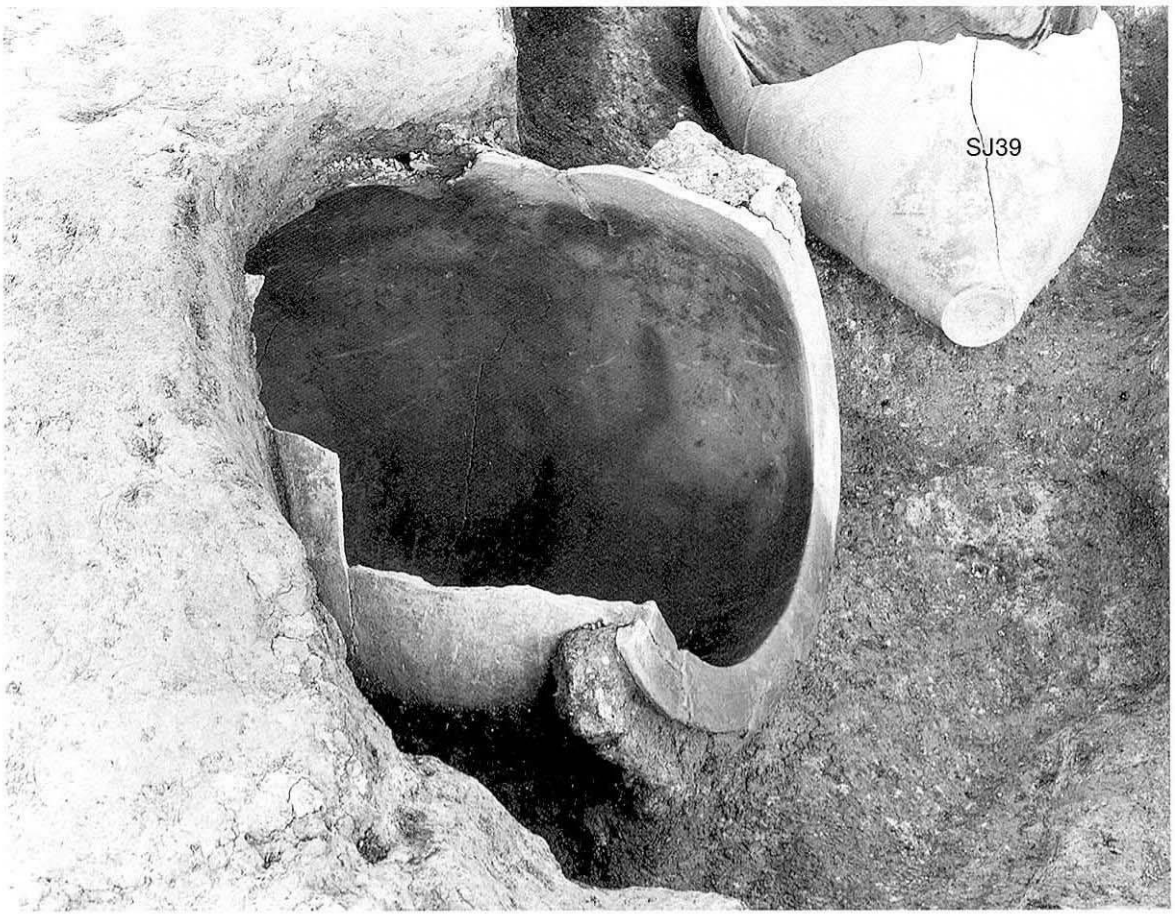
図版32




(1) 甕棺墓SJ37(右上)・SJ38




(2) 甕棺墓SJ39




（1） 甕棺墓SJ40




（2） 甕棺墓SJ41（すぐ上の小型棺はSJ33）

図版34




(1)　甕棺墓SJ42(下)・SJ43(上)(右下はSC03)



(2)　甕棺墓SJ45



1
SJ01下甕　口縁部の粘土の接合面



5
SJ03上甕



3
SJ02上甕



6
SJ03下甕



4
SJ02下甕



2
SJ04



9
SJ06



7
SJ05上甕



15
SJ07上甕



8
SJ05下甕



16
SJ07下甕

出土遺物②（甕棺）



15
SJ07上甕の凸帯貼りつけ前の沈線



16
SJ07下甕の凸帯貼りつけ前の沈線



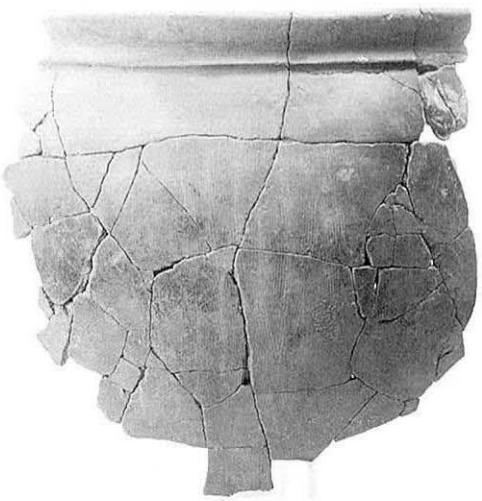
11
SJ09上甕



14
SJ11



12
SJ09下甕



17
SJ12上甕

出土遺物③（甕棺）



19
SJ13



23
SJ17上甕



21
SJ15下甕



24
SJ17下甕



22
SJ16

出土遺物④（甕棺）



25
SJ18上甕



26
SJ18下甕



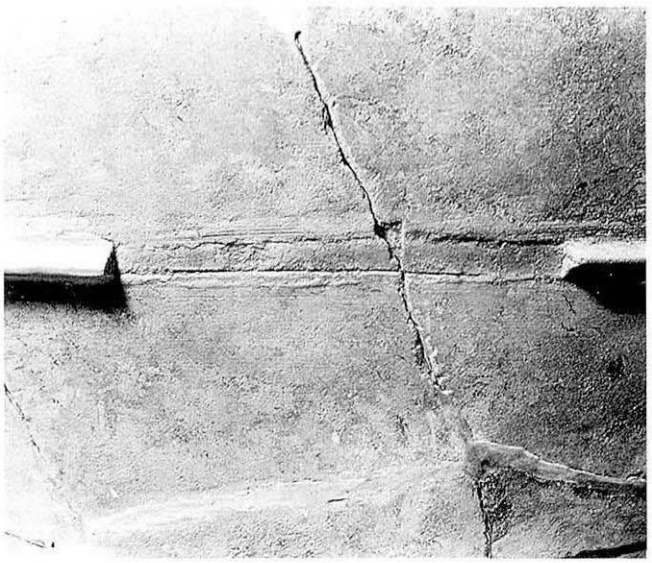
27
SJ19



32
SJ20上甕



33
SJ20下甕



32
SJ20上甕の凸帯貼りつけ前の沈線

出土遺物⑤（甕棺）



28
SJ21上甕



29
SJ21下甕



30
SJ22上甕



31
SJ22下甕



36
SJ23

出土遺物⑥（甕棺）



34
SJ24上甕



39
SJ26上甕



35
SJ24下甕



40
SJ26下甕



40
SJ26下甕　口縁部の粘土接合面



38
SJ25下甕

出土遺物⑦（甕棺）



41
SJ27上甕



43
SJ29上甕



42
SJ27下甕



44
SJ29下甕

出土遺物⑧（甕棺）



45
SJ30上甕



47
SJ31



46
SJ30下甕



48
SJ32上甕

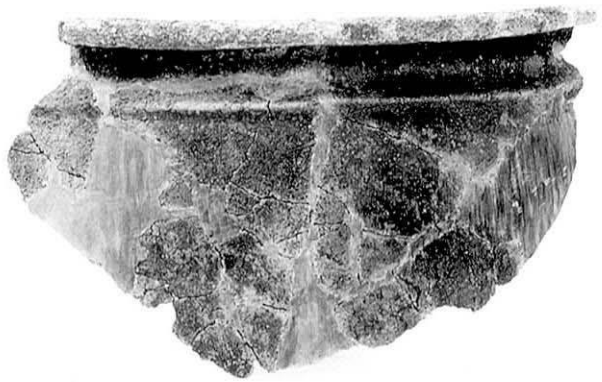


45・46
SJ30
蓋と壺のセット状態

出土遺物⑨（甕棺）



50
SJ33上甕



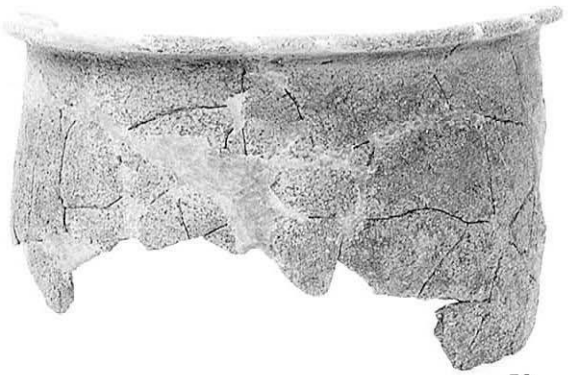
51
SJ33下甕



54
SJ35上甕



55
SJ35下甕



56
SJ37上甕



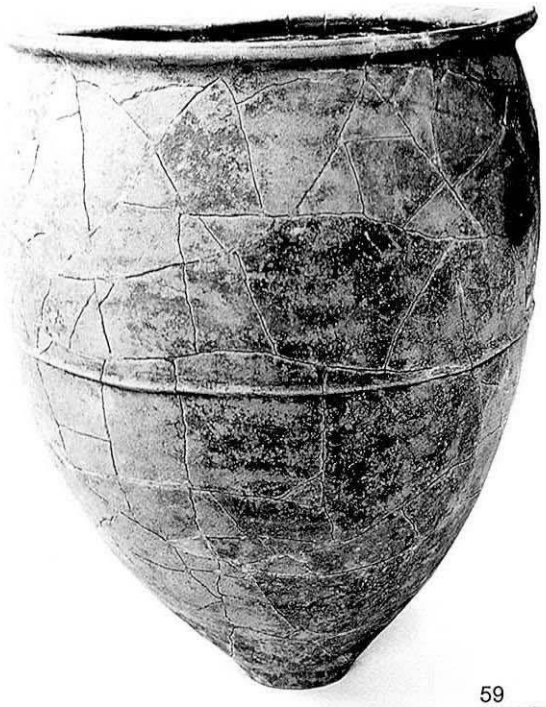
57
SJ37下甕



58
SJ38上甕



60
SJ39上甕



59
SJ38下甕



61
SJ39下甕

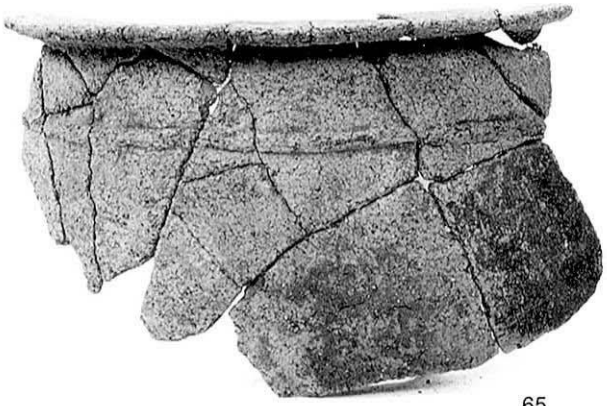
出土遺物⑪（甕棺）



64
SJ40



62
SJ41上甕



65
SJ42上甕

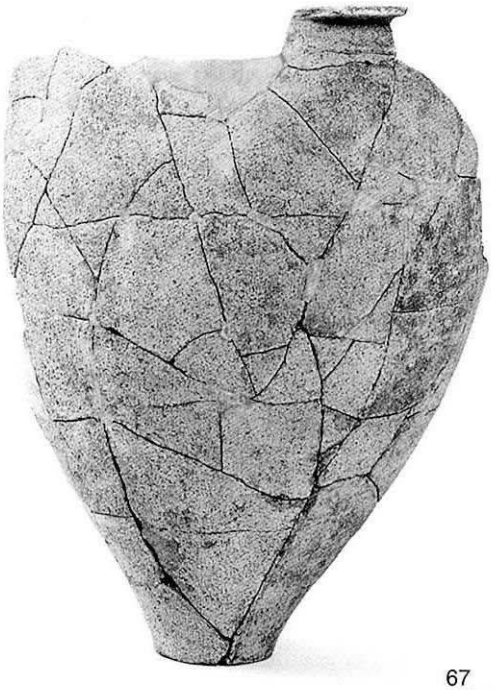


63
SJ41下甕



66
SJ42下甕

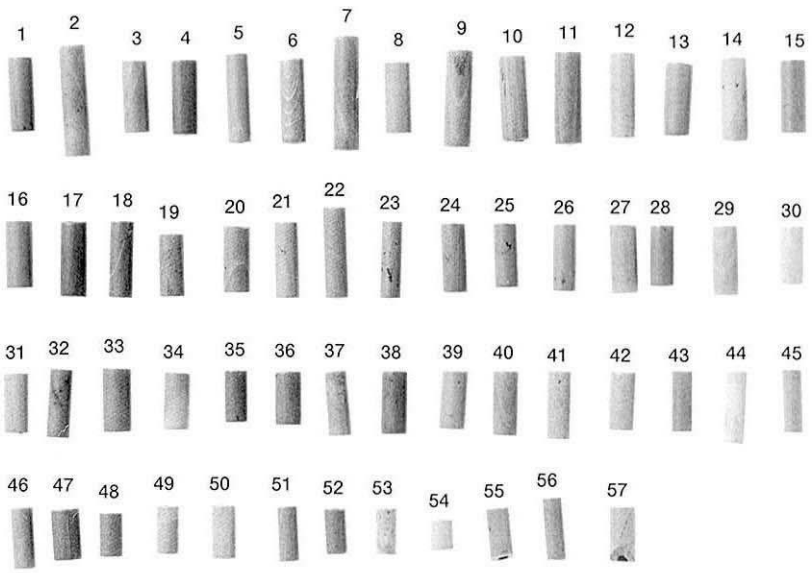
出土遺物⑫（甕棺）



67
SJ43下甕



69
SJ44下甕




甕棺墓SJ33 出土の碧玉製管玉（原寸）

出土遺物⑬（甕棺・管玉）




付図　森園遺跡Ⅱ地点の検出遺構図(1/200)

# 報 告 書 抄 録

| | |
|---|---|
| ふ り が な | もりぞのいせき |
| 書 名 | 森 園 遺 跡 Ⅱ |
| 副 書 名 | |
| 巻 次 | |
| シ リ ー ズ 名 | 大野城市文化財調査報告書 |
| シ リ ー ズ 番 号 | 第55集 |
| 編 著 者 名 | 向 直也 |
| 編 集 機 関 | 大野城市教育委員会 |
| 所 在 地 | 〒816-8510 福岡県大野城市曙町2丁目2-1 TEL 092-501-2211 |
| 発 行 年 月 日 | 1999年3月31日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所 在 地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯<br>°′″ | 東経<br>°′″ | 調査期間 | 調査面積<br>(㎡) | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| もりぞのいせき<br>森園遺跡 | ふくおかけん<br>福岡県<br>おおのじょうし<br>大野城市<br>かわくぼ<br>川久保 | | | 33°32′29″ | 130°<br>29′24″ | 1986.6.5<br>〜<br>1986.8.25<br>1986.11.27<br>〜<br>1986.12.27<br>1987.5.26<br>〜<br>1987.7.9 | 約3,200 | 事務所<br>建設など |

| 所収遺跡名 | 種名 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 森園遺跡 | 墓地 | 弥生 | 甕棺墓<br>木棺墓<br>土坑墓<br>石棺墓 | 弥生土器(甕棺)<br>碧玉製管玉 | 弥生時代の墳墓だけを報告したもので、他に未報告の遺構あり。 |


**大野城市文化財調査報告書**

**第 55 集**

1999年3月31日

発 行 大 野 城 市 教 育 委 員 会
福岡県大野城市曙町２丁目２－１

印 刷 株式会社 チューエツ福岡工場
福岡県博多区東比恵２－９－１